
ジャージのヒーロー

雲居恋兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャージのヒーロー

【Nコード】

N1941Z

【作者名】

雲居恋兎

【あらすじ】

いつもジャージ姿なニート少女夕霧。彼女が高校を退学になり、若くしてニートになったのには理由があった。

そんな彼女が神を名乗る者に、「その力を貸してほしい」と異世界に飛ばされ、へたれ勇者の手助けをすることに。

自らの過去、出生の秘密。そしてへたれ勇者は無事へたれを脱することができのだろうか。

意地悪な魔法使いと三人で仲良く冒険…？ 時には喧嘩をしたり、仲間が増えたりしながらこの世界を満喫する夕霧。

最後に、夕霧は元の世界に帰るか帰らないかを迫られることになる。
その時、彼女の選択は…如何に。

始まり

携帯の着信音が鳴る。

夕霧はもぞり、と布団の中で身じろぎをしたが起きる気配は無い。しかし、携帯電話は諦めることなく持ち主である彼女を呼び続けている。

いい加減にしろ、とでも言いたげに夕霧の眉間に皺が寄り、ようやく携帯電話に手が伸びた。

「もしもし……」

「ぱんぱかぱーん。君は実に幸せな人間だ！この僕が直々に選んだ、君にぴったりの仕事を与えよう！」

寝起き一発目の衝撃にしては大きすぎたのか、それとも夢とも思ったのだろうか。

夕霧はぷち、と通話を切るともう一度枕に顔を埋めた。しかし携帯電話は尚もめげずに鳴り始め、夕霧を呼ぶ。

「あああああつ！うるせえよなんだよ！」

布団から飛び起きた夕霧は勢い良く通話ボタンを押すと、そう叫んだ。

「おやおや、そんな怒ると早死にするよ？人間はそういうふうに作ったからね」

やれやれ、とでも言いたげに電話の向こうでため息をつかれる。それがまた夕霧の琴線に触れた。

「誰だよてめえ！私の安眠妨害したからには大層な理由があるんだろうなあ？さつさと名前用件謝罪を述べろよ！」

みしみしと携帯電話が軋む。

「ああ、申し遅れたね。僕は***。君に仕事を与えたくてね……それと、寝てる時にごめんね？」

夕霧の眉間の皺が一層深くなった。こいつの口調もいらつくが、なぜか名前が聞き取れない。

「名前、なんだって？」

「***だよ。……あ、君たちの言語レベルじゃ理解も発音もできないのか」

うーん、と***は考え込む。

馬鹿にされている、と一瞬思ったが、何故だがそれは少し違うような気がした夕霧は少しだけ話を進めてみることにした。そうでなければ二度寝はできそうにない。

「で、何者よ」

「えーと・・・君たちの世界でいうところの神なんだけど、ちょっと待ってね。今君たちでも理解できる言語で名前を考えてるから」
ぶつぶつと人名を呟き続ける自称神。

夕霧はこれは夢だ、と割り切ることにした。

「太郎でいいでしょ。で、仕事って何？」

夢の中なはずだけれども、寝ている気がしない……早くもう一度寝たい。その一心でさくさく話を進めたがる夕霧。

「もつとかっこいい名前がいいなー。天龍とか」

神のくせに厨二病かよ勘弁してくれ、とげんなりした夕霧だが話が進まないのにつっこむのをやめる。

「……で、仕事についてだけど。君の能力をフルに活用して欲しいだけだ。これは君にしかできない仕事だよ。あと、これは夢じゃないからね？ まじめに考えて！」

後半、いきなりまじめな口調になる神。

夕霧は君にしかできない、という言葉に僅かながら反応した。しかも、夢ではない……と。

「……私は何もできないよ」

何かを悔いているかのように呟く。

「壊すことくらいだ」

自分を嘲るように笑う夕霧。彼女の脳裏に、ある出来事の記憶がよ

ぎった。

「知ってるよ。僕は何でも知ってるからね」

「え」

神は何でもない、日常の出来事を話すかのように話始めた。

「君は、色々事情があつたにせよ、結果的に人を、それも複数をたつた一人で半殺しにした。一番怪我が軽かつた人でも複雑骨折・・・だったかな。しかも君は素手だった。そうだね？」

「……」

黙り込む夕霧。しかし神は続ける。

「そして君は退学。それ以来ずっと外に出ることもなく、唯一の会話相手は母。でも君のお母さんは君と目を合わせてくれない……そりゃそうだ、一般人から見ても君のやったことはとても怖いもの。君がまったく口を割らなかつたせいで何故君があんなことをしたのか、誰も知らないんだから…… 本当君って不器用だよねえ」

ふふふ、と笑う神、押し黙る夕霧。

この話は、夕霧にとって思い出したくない出来事であり人生を大きく変えてしまったものだ。掘り返して、気持ちのいいものではない。「……どこまで知ってるのさ」

押し出した一言。夕霧には知られたくない事実がある。一番誰にも言いたくない場所、夕霧が話すくらいなら退学を選ぶ程の事実。

「全部だよ。ゼーんぶ、僕は知ってる。」

「本当に？」

はつたりだとしたら、信じてバカを見るのは夕霧だ。

しかし、本当だとしたらこの人物を神だと信じる証拠になる。

なぜなら、夕霧はあの暴力事件の秘密を誰にも話していないからだ。「これで信じてくれるかな？ 君には一人とても大切な友人がいたね。優秀で勤勉な、真面目を絵に描いたような子だ。しかし勉強のストレスからかいつしか愛煙家になってしまい、君がボコボコにした不良たちにバレル。それをネタに彼女は脅されていたんだ。彼女の様子がおかしいと感じていた君はこっそり彼女の行動を見張り、

その現場に出会った。彼女が愛煙家であることを知っていた君はすべてを悟り、その場で問題を暴力によって解決した……違うかい？」

「この人物は本当に神なのだろうか。あの少女が外部に漏らすわけではない、そんなことをすれば夕霧の決断が無駄なものになってしまう。」

「……あつてる」
あの事件のあと、夕霧が守った少女は一度も姿を見せていない。夕霧が思っている程に、彼女は夕霧のことを思っていてはくれなかったのだ。

「さて、用件に戻そうか。君のその暴力と正義の心で、世界を救うお手伝いをしてほしいんだ」

神は夕霧が自分の頼みを聞くであろうことを確信したのだろう、ようやく本題に入り始めた。

「日本を暴力で救えるわけないだろ」

夕霧も信じる気になったのか、先ほどよりは真面目に受け答えをする。

「誰も日本を、なんて言っていないよ。君には、ちょっと違う世界に行ってもらおう」

「はあ？」

思わず、突拍子もない声を上げる夕霧。

「タケノコの里派とキノコの山派が和解するレベルでありえないこと言ってるんじゃないよ……」

「神にありえないことであると思うの？ ……行くよ」

神のその声と共に、夕霧はその場から姿を消した。

始まり（後書き）

たまにネットスラングとかあったりしますので、意味がわからない言葉があればご一報ください。

最初の街 リオン1

キノコタケノコ戦争が、終結した。

「ここ、どこだよ……なんだよこれ……」

夕霧は呟く。顔面蒼白で。

今、彼女は木の上にいる。細くて頼りない、小さな木。

そしてその下には……三匹のモンスター。

元の世界で一番近いと思われる生物はサソリだが、大きさがその比ではない。

三匹積み上げれば、夕霧の背と同じくらいにはなるだろう。

「ここがキミの職場さ。ごめん、僕は世界に直接干渉できないから小鳥に体を借りたから飛べるけど、君は飛べない種族だったね」

「ばたばた、と羽ばたきながら夕霧の周りを飛び回る小鳥（in神）」。

「……やるしかないのか」

「おわびに、君の世界から武器っぽいものを持ってきたよ。といっても、君の部屋にあったものだから殺傷能力は高くないだろうけど……手を出して」

夕霧が手を出すと、なんと木製の野球バットが姿を現した。彼女の弟のものである。

「またあいつ勝手に私の部屋に入っただのか……まあいいや、無いよりまし、か……」

ガリガリと木を削る音がする。この木が折れてしまうのも時間の問題だろう。

「がんばって、君ならできるよ！」

「他人事だと思いやがって……いつか焼き鳥にして食ってやる」

「別に僕の体じゃないから痛くもかゆくもないよー。ほらほら、早く行かないと木が悲鳴をあげてるよ？ それに僕も時間が近い」

小鳥は夕霧のジャージの裾を嘴ではさみ、思いつきり引っ張った。

「ちょ……おいしいいい！」

夕霧も流石の運動能力。一瞬だけバランスを崩したが、とっさの判断でサソリの一匹に着地し、残り二匹。

戦闘の場へ、飛び込んでしまった。

奇声をあげながらハサミらしきものを振り回すサソリたち。

「ああああ！ やってやるおじやねえかああああ！」

夕霧も負けじとバットを振り回す。

確実にサソリに当たててゆき、端から見ている神は感心したようになうんと頷く。

「やっぱり喧嘩の才能があるんだねえ……おっと、そろそろ僕は行かないと」

小鳥はちゅんちゅんと一鳴きすると、空高く飛び上がりどこかへ行ってしまった。

まだサソリと戦っている夕霧は気付かない。

ハサミで殴られても怯まず戦う様子は、まるで生まれながらの戦士……武器は野球バットだが。

「ーっ」

一瞬、夕霧の視界から片方のサソリが消える。彼女の背後に周りハサミを振りあげるサソリ。流石にこれを食らってしまえば夕霧もここまでだろうーその時。

「グラキエース（凍れ）」

サソリが、凍り付く。

夕霧の頬を冷気がくすぐり、思い切りサソリを殴っていたことで熱くなった体に心地よさを感じさせた。

「大丈夫？」

たたた、と駆け寄ってきた少年。耳元にかかる茶色の髪の毛がゆらゆらと揺れている。そして、肩には目を引く大剣と盾。いずれもこの世に二つとないであろう荘厳さと華麗さを携えていた。

「大丈夫……ありがとう」

ぐしゃり、と目の前のサソリにとどめを刺すと夕霧は少年の方を向

き、お礼を言う。

「オレは何もしてないよ。お礼ならリヴィに言って」

少年は少し後ろのほうにいる黒いローブを纏った少年を指さした。

「ありがとう」

黒ローブの少年は、夕霧の言葉に顔を背けるときびすを返しすたすたと歩き始める。

「ちょ、待ってリヴィ！……ごめんね、リヴィは人見知りが激しいんだ。オレはトーガ、君は？　なんて呼べばいい？」

リヴィと呼ばれた少年の態度にわなわなと怒りに震えていた夕霧は、トーガの言葉で我に返った。

「夕霧。謙虚だからさん付けでいい」

自信まんまんで言い放つ夕霧。彼女の世界でのネットスラングなんて通じるわけもなく、トーガは首を傾げる……が。

「ぶっ……どこが謙虚なんだか」

少し前を歩いていたリヴィが反応し、その上笑いだした。

「君、気に入ったよ。夕霧だっけ、覚えてあげる。僕はリヴァイア、リヴィって呼んでもいいよ」

首を傾げたトーガを見て、しまった、という表情をした夕霧だったが、何故かリヴィに受けたことで結果オーライだ、と胸をなで下ろす。

「トーガに、リヴィね。了解」

「で、夕霧さんはあそこで何をしてたの？　修行……にしてはスコルなんて効率悪すぎるし」

殻が堅く、動きも素早いスコルは割と上位のモンスターのようで、初心者には向かないらしい。

「あれ冗談だから夕霧でいいよ。えっと、私は世界を救う手伝いをしてってくれて頼まれて連れてこられたんだけど、気がついたら木の上にいたから、折れて落ちる前に降りないといけなかったのに下にあいつらがいた。だから戦ってたところに二人が通りかかって助けてくれたんだ。ありがとう」

改めてお礼を言う夕霧だが、話を聞いた二人は顔を見合わせた。

「世界を救うって……でも、そんな要素あるのって……」

「十中八九トーガだろうね。だからこんな僕たちしか来ないような場所に現れたのかも」

夕霧を蚊帳の外にして、完全に二人で話始めるトーガとリヴィ。話の断片から、自分が助けるべきな人物はトーガだと悟った夕霧はトーガの背中の大剣に目をやる。

「でかい剣だねえ」

表面の繊細かつ大胆な装飾にふれてみようと思えばすと、ピリ、と大剣が電気を帯びた。

「あつ！ 触っちゃだめ！」

トーガが叫ぶが、時既に遅し。

「わあああああ！ ！！！！」

電撃がビリビリと空気を伝い夕霧を襲う。必死に逃げる夕霧。

「グラキエース（凍れ）」

氷は電気を通さない。まったく通さないと言えば嘘になるが、それでも電気が氷に弱いのは確かかなようで、リヴィが生み出した氷の壁は剣の電撃から夕霧を守った。

「な……なんて危ない剣だよ！」

「まったく、怪我はない？ トーガの剣はかつての勇者が持っていた剣だからそれなりのいわくも付いてるんだよ。これに懲りたらもう触らないことだね」

ため息をつくリヴィ。

「ごめんね、オレ以外が触るところなっちゃって……もっと早く言えばよかった」

尻餅をついた夕霧に、トーガは手を差し出した。

「あんがと。大丈夫、私結構丈夫だから……」

とは言いつつも、大剣を警戒する夕霧。

「さて、君が本当にトーガの手伝いをしてくれるなら、目下の問題を話さなきゃね。トーガ、今日の修行は中止だよ、帰ろう」

「え、いいの？ わかった、夕霧、ちょっと着いてきてくれるかな」
「はいはい」

夕霧はジャージに付いた砂埃を払いつつ、トーガとリヴィの後に続いた。

がやがやと騒がしい城下街。

様々な声が夕霧の耳に飛び込んでくる。

子供たちの騒ぐ声、女たちの井戸端会議……どこの世界でも人々の根本的なところは変わらないのだな、と夕霧は思った。見た目は奇抜な者が多いが、夕霧が驚くような行動をしている者はいない。

しかし服装は皆バラバラで、リヴィのようなローブを着ている者もいれば、踊り子のようなセクシーな格好、和服のようなものを着ている者もいる。この世界でのファッションは、とても自由なものようだ。

それでも夕霧のジャージ姿は珍しいようで、じろじろと見てくる不躰な視線も、少なくはない。

「で、どこに行くの？」

さらし者には慣れている。夕霧はトーガの服……は大剣が怖いので、リヴィのローブを引っ張った。

「トーガの家。あそこならゆつくりできるし、盗聴される恐れもないからね……と言っても、盗聴されて困る事なんて何一つないけど」
勇者なんだから少しくらい隠密事項とかがあってもいいものだけだ、とリヴィはため息をつく。

「この坂を上りきつたらすぐだよ」

トーガが振り向き、優しく笑った。しかし、夕霧の顔はひきつる。

「おかしいだろこの坂！ 急すぎて上ったりしたら私の心臓がマッハなんだが？」

元の世界では存在するかもわからないほど急な坂。坂と言うよりは絶壁だ。目視でぎりぎり鋭角、高さはとにかく高い。正直、坂と言うには歩きにくすぎる。というか、登山より辛いのではないだろうか。

「何言ってるのさ、疲れるわけないじゃないか」

リヴィは夕霧にバカにしたような目を向けた。

「夕霧は違う国から来たみたいだし、仕方ないよりヴィ。坂自体がないのかもしれないし」

こんなの坂じゃなくて絶壁だろ……と苦笑いする夕霧。そしてトーガは上を見ると、

「ドシルー！ 帰ったよー！」

と叫んだ。

すると、絶壁の上から降りてくる黒い影。

「ああ、乗り物があるのか」

エレベーターみたいなもんかな、と夕霧は呟いた。

「それがなんなのかは知らないけど、生身でここを上ろうとしたのなら君は馬鹿だね」

からかうような口調のリヴィ。

そんなことをしている間に影の招待が見えてきた。

——絨毯だ。ちょこんとメートル程の大きさをした獣が立っている。

「おかえりなさいませ、トーガ様。いらっしやいませ、リヴァイア様……失礼ですが、こちらは……」

金色のモノクルをかけ、黒い礼服を着た小さな獣が恭しく頭を下げ、夕霧に目を移す。夕霧は驚きで口をぱくぱくさせていて、小さな獣を指さして、叫んだ。

「うわああ！ ！ 動物がしゃべった！ ！ ていうか、何？ 猫？ 犬？ でも二足歩行してるし礼服装てるし！」

街を歩いている時は、元の世界よりも発達した動物がいるんだな、とは思っていたが、喋っているのを聞くのは初めて。異世界に来たことは知っているが、それでも衝撃は大きいようだ。

「夕霧、落ち着いて。そっか、夕霧の国ではエルフもないんだね・・こいつはドシル・エルフ。オレの家に仕えてくれてるエルフ達のリーダーだよ。大丈夫？」

あまりの衝撃に、体を絶壁に預け顔を覆う夕霧。最初から言ってくれよ・・・なんて呟いている。

トーガは苦笑いして、今度はドシルに夕霧の説明を始めた。

「ドシル、この子は夕霧。怪しい人ではないよ……あと、少し話したいから誰もいない部屋に通してくれないかな」

疑い深そうに夕霧を見るドシルだが、トーガ様がおっしゃるのなら……と絨毯を夕霧の傍に寄せた。リヴィはいつのまにかちゃっかり座り込んでいる。

「……あと、なんか私が驚きそうなことは？」

よっこいしょ、と絨毯に乗り込んだ夕霧は疲れた表情で二人に問いかける。

「うーん……あ、オレこの国の王子なんだよね」

なんとなくわかってたけどさ……と夕霧はため息をついた。

「じゃあ何、トーガの家に行くってこれから城にでも行くの？」

ふわふわと上昇する絨毯の上で話す三人。夕霧はちらちらと下を見ているが、二人は慣れたもので家のベッドの中にいるかのようにくつろいでいる。

「うん。ごめんね、驚かせちゃって」

夕霧は自分の格好を見下ろす。そういえば、普段家で着ているジャージのままだ。城に行くのならばきつとドレスコードなんてあるのではないか、と考えた夕霧は途方に暮れた。

着替えなんて持つてきていないし、お金もない。つまみ出されてしまったら恥ずかしいなんてものではなく、どうすれば良いのかわからなくなってしまうだろう。

「……ちゃんとした服着てくれば良かった」

ぼつり、と呟く夕霧。引きこもりニートと言っても、女の子らしい面もまだ持ち合わせているらしい。

「え？ それ、夕霧の国では一般的とか、そういう服じゃないの？」
トーガがきょとん、とした表情を見せる。

「え？ あ、ああ、うん、そう、そうだよ！ 私の国ではこの服装

が儀礼的っていうかなんというか……戦闘服？　みたいな……」

あは、あはは……と笑う夕霧。リヴィが小さく嘘付け、と呟くが、聞こえていなかったトーガは夕霧の言葉を信じたようだ。

「あ、そっか、お城に戦闘服で入るなんて……みたいな感じかな？

それなら大丈夫だよ、騎士とかも普通にその辺歩いてるし……あ、夕霧、お城が見えたよ！」

日本のみなさんすいません、なんて俯きながら心の中で懺悔していた夕霧が顔を上げると、本当に立派な城が目の前にそびえ立っていた。

ドシルと同じような小さい獣が操る絨毯が周りを飛び回るが、それらはまるで豆粒のように見える。

それ程に、お城は大きい。

あの絶壁はこの城を守るためだったのだろうか、なんて思いつつ城を眺める夕霧は、あることに気が付いた。

「……どこから入るの？」

見たところ、玄関がない。あるのは各部屋についているらしい窓のみ……こちらは裏側なのだろうか、とも考えたが普通城は城下街に正面を向いているものではないのだろうか、と考えを巡らす夕霧。城下街を歩いている時には、普通にドアのある家がほとんどだった。この城だけが特別なのだろう、この質問には二人とも聞かれて当然、とでも言うような反応を示した。

「この城はね、廊下も階段もないんだ。オレのお父さんが広い部屋が好きだからって、二つとも削っちゃった。それに城自体が大きい上階段で上ると疲れちゃうから、窓から入るようにしてるんだ」

防犯にもなるしね、と笑うトーガ。

「なんてものぐさなんだ……」

そう夕霧が呟いたところで、絨毯は窓の側に寄せられた。

「こちらの部屋が一番静かに話し合えます。こちらでよろしいですか？」

トーガの指示を仰いだドシルは、許可が出るとパチンと指を鳴らし

窓を開けた。これも魔法なのだろうか。

「じゃあ、話を始めようか」

部屋には三人分の椅子と、丸いテーブルが用意されていた。その上には、おいしそうなケーキと紅茶ポット。

リヴィが指を鳴らすとポットは一人で三人分の紅茶を用意した。

「魔法すごいな」

感心した夕霧が思わずそう褒めると、リヴィは満足そうに一番奥の椅子に腰掛けると、紅茶を一口飲み、

「熱い、フリーギドウム」

と、カップとコンコン叩いた。湯気が消える。

「で、君はどこから来たの？」

バットの置き場に困っていた夕霧は、その質問に更に困った顔をした。日本、なんて言うて通じるのだろうか、異世界から来た、なんて言ったら放り出されるのではないか。

しかし、すぐに決心したようで小さくよし、と呟くとバットをテーブルに立てかけ椅子に座った。

「日本から来た。聞いたことある？多分、私違う世界から来たんだよね」

トーガとリヴィの表情が固まる。

「多分っていうか確定的な事実なんだよね、これ。頭がおかしい人の戯れ言だと思って聞いてもらってもいいけど、残念なことに私がここにいる以上、これは本当のこと。私だっけついさっきまで信じられなかったし」

一度開き直ると、夕霧は強い。すらすらと言葉を並べ立てる様子を見て、リヴィが口を開く。

「日本、っていうのは知ってるよ。又エとかヤマタノオロチとかの発祥の地だね。でも、日本は昔沈んだよ……僕たちの世界では」

君の世界では違うんだろ？とも言うような口調。少なくとも、リヴィは夕霧を疑ってはいないようだ。

「ぱ、パラレルワールドっていうやつ？　すごいね、夕霧どうやって来たの？」

トーガも興味津々、といった様子である。こいつらは疑うことを知らんのか……と夕霧は自分のことながらに苦笑した。

「自称神に飛ばされた」

そう答えると、リヴィの眉間に皺が寄る。

「証拠はあるの？」

声に不信感が表れた。この世界でも神というのは万能だが、万能故に人間と接することはないと信じられている。

「ない」

あっさりと言い放つ夕霧。リヴィとの間にほんの少し陰悪な空気が流れ、トーガがあたふたとする。

夕霧とにらみ合っていたリヴィは、ふう、と息をついた。

「信じるよ」

このままでは夕霧がリヴィに追い出されてしまう……なんて心配していたトーガは、リヴィの言葉に驚く。

「な、なんで？　あんなに睨んでたのに……」

さすがの夕霧もちよつとばかり怖かったらしく、疲れたように背もたれに寄りかかった。

「今、ちよつと夕霧の記憶を見せてもらってね。本当だった」

一瞬の沈黙。

「おいお前レディの記憶を覗くとか良い趣味してんな？」

ガタ、と立ち上がる夕霧。

「冗談だよ、ただ嘘をついているかどうか魔法をかけただけ」

「ちなみに私の話が嘘だった場合は？」

「氷漬け」

「怖えよ！」

ばんばん、とテーブルを叩く夕霧。この魔法を過去数回かけられたトーガも苦笑いだ。

「さて、君の素性がわかった？　ところで、今度は僕たちの問題を

はなす番だね」

リヴィはまた指を鳴らし、二杯目の紅茶を入れた。

「トーガ、僕話し疲れたからあとはお願ひ」

フォークを手に取りながら言うリヴィ。ええ、とトーガは驚きの声をあげるも、いつものことか……なんて呟きつつ、話し始めた。

「えっと、問題って、三つ……でいいんだよね？三つあるんだ」
リヴィに確認を取りつつ話すトーガ。

この二人の上下関係がはつきりと見えてきている。

「まず、勇者であるオレがへたれすぎて敵を倒せないこと……これは夕霧も知ってるよね」

「そのために飛ばされたからね」

至極真面目に夕霧が頷くと、トーガは少し凹んだようだった。

「……次は、仲間がいない。夕霧が来てくれたとしても勇者オレ、魔法使いリヴィ、……夕霧は何になるんだろう」

説明中首を傾げるトーガ。リヴィは呆れたようにケーキを食べつつ眺めている。

「……何が必要なの？」

勇者と魔法使い以外の何かで一番近いものを名乗ろうかと考えた夕霧。

「えっと、勇者、魔法使い、弓使い、盗賊、踊り子の五人かな」

「ちなみに勇者は踊り子と結婚しようとしたけど、逃げられたらしいよ」

「そんな情報いらねえよ」

早くもケーキを食べ終わったりリヴィが口を挟んでくる。しかも知らない情報だけ与えると、また紅茶を飲み始めた。

「夕霧は……そうだな、その服って何か名称はある？」

トーガは本気で夕霧の職を考えているらしく、まじめな顔で尋ねる。

「じゃ、ジャージだけど？」

なんかどうせ戦闘服とか嘘をついたのだし、もっとかっこいい名前にすれば良かっただろうか……なんて考えていると、トーガの表情

がぱあっと明るくなる。

「ジャージのヒーローなんてどうかな！」

きらきらした瞳を夕霧に向けるトーガ。夕霧の顔がひきつる。

「ジャージの……ヒーローって……」

激しく気に入らないようだが、トーガはすばらしくかつこいいと思
い込んでいるようだ。

「ヒーローってだけでもかつこいいのに、ジャージなんて名前かつ
こよすぎるよ！ 夕霧が有名になったら子供達の人気総取りだよ！」
戦隊物のテレビに夢中になっている子供のようにはしゃぐトーガに、
そんな職はイヤだ、なんて言えるはずもない。

「……いいと思う、ありがとう」

了承してしまう夕霧。リヴィはというと……リヴィもかつこいいと思
っているようで、トーガを感心したように見つめている。どうや
らこの世界の価値観は少しばかり夕霧とズレているようだ。

「でもヒーローと勇者って職被りじゃね？」

夕霧はこれで名前をひっくり返せるかも、なんて内心想う。

「え？別にいいと思うよ？」

あっさりと職被りが肯定されてしまった。王子であり勇者の言うこ
となのだから、本当にいいのだろう。

「……じゃあ、あと弓使いと盗賊と踊り子ね、そのうち見つかるで
しょ」

正直踊り子の存在意義がまったくわからない夕霧だったが、先程の
リヴィ言葉から、きつと勇者が惚れてしまい勝手に連れてきたのだ
ろうと自分を納得させた。

「最後の一つは、えっと……」

トーガは言いくそくに呟く。

「魔王、いないんだよね……」

「は？」

混乱する夕霧。自分はトーガが魔王を倒す手伝いをするために呼ば
れたのではないのか、神は魔王が存在しないということを知らない

のか、とぐるぐると思いが巡る。

「フリーギドウム・カプト（頭を冷やせ）」

リヴィが夕霧に向かって魔法をかけた。頭を冷やす呪文である。

夕霧は今までできたことや、神との会話を反芻し、あることに気付
き、自分のやるべきことが見えてきた。

「わかった、あれだ。私はトーガを鍛えるためにこの世界に飛ばさ
れたんだから、魔王いらないじゃん」

え？ とトーガが虚を突かれたような顔をする。

「魔王いないなら、別に人数いらないよね。よし解決。早速修行だ、
こういうことだと思うんだけど・・・どうかな」

ぽかんとするトーガ、不敵な笑みを浮かべるリヴィ。

「僕、君みたいな頭の回転が早い子は好きだよ。やっぱり効率の良
い修行って、旅だよね……行き先は僕に任せて」

「え？ リヴィ、何か案があるの？」

リヴィはトーガに呆れた目線を送った。勇者がこれだと先が思いや
られるね、知ってたけど。なんて言葉の暴力をトーガに向ける。

「せっかく勇者の肩書きを持っている君がいるんだ、救う世界がな
くても、困っている村くらいはあるだろう？ 村人からは感謝され
て顔が広くなるし、トーガは鍛えられるし村は救われるので一石三
鳥だよ」

おお、と夕霧は感嘆の声を上げる。夕霧は一石二鳥だとか、楽でき
そうな言葉に弱い。

「私はそれに賛成」

トーガは少し不服そうな表情をしたが、頭を振り、少し暗い笑顔で、
「……オレも、賛成」
と言った。

「じゃあ、僕とトーガは旅立ちの儀をしなきゃね。夕霧は街を見て
回るといいよ、時間もかかるし出発は明日ね。そうそう、夕霧、夜
はどうするの？ 泊まれる場所とか、わからないでしょ。僕の家
に泊まれば？」

「へあ？」

一人でこの辺回って戻ってこれるかな、なんて思っていると急に話を振られた夕霧。裏返った声に、リヴィの肩が震える。

「笑うなよー……うーん、でもリヴィ、両親とかに聞かなくてもいいのか？ その、見知らぬ人を泊めるなんて」

「大丈夫だよ、僕に親はいないから。孤児なんだ……この世界では珍しくもなにもないよ、逆に親がいる方が稀だ」

「がたん、と音を立ててリヴィは立ち上がる。」

「あ、リヴィ、夕霧はここに泊めるよ。ドシルがもう用意しちゃったみたいで」

トーガが申し訳なさそうに言うと、窓にドシルの影が見える。リヴィは一言、

「……そう」

と返し、窓に近づいた。

「じゃあ、夕霧、オレたち色々準備してくるから、好きにして……」

……外に出たくなったら窓を開けたら誰かがおろしてくれるから」

トーガがひらりと絨毯に飛び乗ると、リヴィもそれに続く。そして下の方へ降りていった。

その後すぐに、ドシルよりも若い女だと思われるエルフが夕霧の元に絨毯を寄せ、

「お待ちせいたしました、夕霧様。ドシルさんから話は伺っております、どうされますか？ お城の案内なら致しますし、城下街に降りたいならお連れ致します。お部屋でご休憩をご希望でしたら、お部屋にお連れいたしますよ」

と、丁寧な言葉遣い。

夕霧は慣れないその対応に戸惑い、疲れているにも関わらずこの場から離れたいと望み、

「……城下街に降ろしてください」
と。

城下街を案内したがる彼女を丁重にお断りすると、夕霧はぶらりと

町へ出かけた。

最初の街リオン2

城下街を思うままに歩く夕霧を好奇の視線が襲う。

しかし、その視線の中によく知った感覚があることに気づく夕霧。

——なんで、怖いんだ？

恐怖の視線を向けられるようなことをした覚えはない。そもそも、この町の中にもハンターらしき人がたくさんいる。その方がよっぽど怖いだろうに、恐怖の視線は夕霧が独り占めしていた。

居心地が悪くなった夕霧は裏路地に入る。そこでは子供達が遊んでいた、若者が屯っていた。向けられる視線は、好奇。

——なんでだ？

先ほど自分に恐怖の視線を向けていた者たちの顔を思い浮かべる。そういえば、すべて老人だった。昔何かがあったのだろうか、と考えた夕霧は図書館を探すことにして、ふらふらしていた足取りがしつかりとしたものになる。

この国の図書館はわかりやすかった。

大きな本を象った看板の周りを、鳥が飛んでいる。

近づいていくと、その鳥が空を飛ぶ本だということがわかり、夕霧は改めて魔法の力に感心した。

本鳥の群をくぐり抜け、大きく図書館、と書かれた本型の看板の下にある入り口を開けると、数人の魔法使いらしき人たちがいた。

どうやら一般人は滅多に立ち入らない場所らしい。

積んである本や、本棚に並べられている本もあるが、室内でも本鳥が飛び回る。元の国のような索引なんてまったくなくない。夕霧は途方に暮れた。そもそも、何を調べたら良いのかもはっきりはわかってはいないのだ。

とりあえず、今が何年かもわからない。昔なにかがあったことはわかるのだが、具体的に何年くらいに何があったのかを調べようもなく、夕霧は手近にあった本を開いてみた。

「おお……」

そのページには、ふわふわの黒髪に、胸元の露出と足のスリットが深いセクシーな黒い服を着た、見るからに悪女、と言った美女が描かれていて、くるくると情景が変わっている。開いた時は自信满满的な笑みを浮かべていたのに、顔は描かれていないが一人の男に絡みつき狂ったような微笑みを浮かべている絵、それから男と引き裂かれ泣き叫ぶ絵、最後は黒髪の子供を抱いた母の絵が表示されると、最初の絵に戻った。

その隣のページに、悲劇の魔王・レディ・サタン・と書かれ、壮絶な半生が簡潔にまとめられている。

そこでぴん、と来た夕霧。

カラフルな頭や目がたくさんいた城下街で、黒髪を持つ者はほとんどいなかった。強いて言うならば、リヴィくらいのも。

もしかして、黒髪というのはこの世界では不吉なものであるとか、そういう伝承があったのではないか。

だから、信心深い老人たちは自分のことを恐れているのではないか

夕霧はレディ・サタンの半生を綴った文章に、世界を乗っ取ろうとしている途中、勇者の弟に恋をして誘拐し、監禁したが勇者一行に倒され野望は未達成に終わった、という一文を見つけた。

なるほど、だから悲劇の魔王か……なんて納得した夕霧は次のページをめくる。

そこには、レディ・サタンが犯した罪の数々が書かれていた。

細かい文字の羅列を見て、頭痛を感じ早くも次のページへ行く夕霧。「これ……」

どうやらこの本はレディ・サタンについて書かれたものようだ。レディ・サタンを葬った勇者一行、というタイトルの章一番最初のページ。

そこに、勇者一行の絵が描かれていた。

この絵は不動のまま、五人が座って笑っているだけのもの。

きつと、勇者一行が過去に自らの姿を残すために描かせたものだろう……どこの世界でも考えることは一緒だな、なんて思いつつ夕霧がその絵を眺めていると、あることに気付いた。

「盗賊……黒髪じゃん」

そう、真つ黒な衣装に身を包み、顔を隠すような格好をしているのですぐには気付かなかったが、確かに黒髪だ。

「そうだよ、僕の父さんだ」

「え」

夕霧が振り返ると、いつの間にかリヴィがいて辺りには誰もいない。どうやら、リヴィと夕霧の黒髪コンビを見て知識ある魔法使いたちは逃げてしまったようだ。

「ななな、なんでここにいるんだよ!」

ずざざざ、と音がしそうな勢いでリヴィから距離をとった夕霧を見て、リヴィは少し悲しそうな顔をする。

「……僕のこと、嫌い?」

実は恋愛経験どころか、異性と接することに慣れていない夕霧。対処法もわからず、おろおろとするばかりだ。

「き、嫌いじゃない。うん、嫌いじゃない。だからそんな悲しそうな顔するなつて。ほら、戻るから」

夕霧が元いた場所に戻ると、リヴィは夕霧の手元の本を覗き込んだ。

「ああ、この本か。よく見つけたね」

先ほど数秒前のことなんてまったくなかったかのように、悲しそうな表情が微塵も残っていない。あれは演技だったようだ。

「……そこにあった」

そのことに気付き、不服そうな顔をしながら投げやりに回答する夕霧。

「……リヴィの父さん?」

今頃脳が処理を完了したようで、夕霧は盗賊とリヴィを見比べる。

「多分ね。僕は生まれてすぐあの城の前に捨てられていたらしくて、その後盗賊と踊り子は行方不明。……あ、盗賊は踊り子と婚姻関係

にあつたんだ、だから必然的に踊り子が僕の母さんだろうね。父さんは勇者と仲がよかつたらしいし」

リヴィは淡々と語った。そりゃそうだろう、自分が捨てられた子供だなんて、いくら孤児が一般的な世界だからと言っても辛いことだ。「……黒髪って、そんなに珍しいのか？」

お世辞にも、盗賊や踊り子とリヴィが似ているとは思えない。むしろ、レディ・サタンの方がまだ共通点がありそうだ、と夕霧は思う。夕霧はレディ・サタンの半生を綴った文章に、世界を乗っ取ろうとしている途中、勇者の弟に恋をして誘拐し、監禁したが勇者一行に倒され野望は未達成に終わった、という一文を見つけた。

なるほど、だから悲劇の魔王か・・・なんて納得した夕霧は次のページをめくる。

そこには、レディ・サタンが犯した罪の数々が書かれていた。

細かい文字の羅列を見て、頭痛を感じ早くも次のページへ行く夕霧。

「これ……」

どうやらこの本はレディ・サタンについて書かれたもののようなのだ。

レディ・サタンを葬った勇者一行、というタイトルの章一番最初のページ。

そこに、勇者一行の絵が描かれていた。

この絵は不動のまま、五人が座って笑っているだけのもの。

きつと、勇者一行が過去に自らの姿を残すために描かせたものだろう……どこの世界でも考えることは一緒だな、なんて思いつつ夕霧がその絵を眺めていると、あることに気付いた。

「盗賊……黒髪じゃん」

そう、真っ黒な衣装に身を包み、顔を隠すような格好をしているのですぐには気付かなかったが、確かに黒髪だ。

「そうだよ、僕の父さんだ」

「え」

夕霧が振り返ると、いつの間にかリヴィがいて辺りには誰もいない。どうやら、リヴィと夕霧の黒髪コンビを見て知識ある魔法使いたち

は逃げてしまったようだ。

「ななな、なんでここにいるんだよ！」

ずざざざ、と音がしそうな勢いでリヴィから距離をとった夕霧を見て、リヴィは少し悲しそうな顔をする。

「……僕のこと、嫌い？」

実は恋愛経験どころか、異性と接することに慣れていない夕霧。対処法もわからず、おろおろとするばかりだ。

「き、嫌いじゃない。うん、嫌いじゃない。だからそんな悲しそうな顔するな。ほら、戻るから」

夕霧が元いた場所に帰ると、リヴィは夕霧の手元の本を覗き込んだ。「ああ、この本か。よく見つけたね」

先ほど数秒前のことなんてまったくなかったかのように、悲しそうな表情が微塵も残っていない。あれは演技だったようだ。

「……そこにあった」

そのことに気付き、不服そうな顔をしながら投げやりに回答する夕霧。

「……リヴィの父さん？」

今頃脳が処理を完了したようで、夕霧は盗賊とリヴィを見比べる。

「多分ね。僕は生まれてすぐあの城の前に捨てられていたらしくて、その後盗賊と踊り子は行方不明。……あ、盗賊は踊り子と婚姻関係にあったんだ、だから必然的に踊り子が僕の母さんだろうね。父さんは勇者と仲がよかつたらしいし」

リヴィは淡々と語った。そりやそうだろう、自分が捨てられた子供だなんて、いくら孤児が一般的な世界だからと言っても辛いことだ。「……黒髪って、そんなに珍しいのか？」

お世辞にも、盗賊や踊り子とリヴィが似ているとは思えない。むしろ、レディ・サタンの方がまだ共通点がありそうだと夕霧は思う。「まあね。黒に近い色をしている人はたくさんいるけれど、漆黑に近い黒をしているのはレディ・サタン、父さん、僕だけだ……そこに君が現れた」

リヴィがレディ・サタンと言うときの声は、どこか毒々しい。心から憎んでいるようだった。

「私の国では黒髪が基本だよ。だから私はその二人の血縁者であるわけがない。さっきも言ったとおり、私は別の世界から来てるからね」

夕霧はぱたん、と本を閉じる。

「帰ろうか」

別に気を悪くしたわけではない。しかし、リヴィの探るような目が怖かった。夕霧は、自分の過去を知られたくはなかった。

「……ごめん。トーガもきつと君を待ってるから、近道を教えてあげるよ」

外にでると、既に辺りは暗く、子供たちの声で溢れていた路地裏も静寂を保っている。

そういえば、と夕霧はリヴィに尋ねた。

「リヴィって魔法使いなのに飛べないのか？」

「君の世界では飛べるの？ 少なくとも僕は飛べないよ、氷系魔法が得意でそればかりやってるから」

どうやら、この世界の魔法使いはそんなに万能ではないらしい。

夕霧はリヴィに連れられてトーガの城に戻り、ぐっすりと眠りについた。

「この街に困ったことは特にないようだし、リンクスの村に行こうと思ってね。リオンからリンクスの間にはそう強いモンスターもないし、足慣らしにはちょうどいいよ」

と、リヴィ。

そんな訳で三人は朝食を済ませた後、早速リンクスの村へ向かって歩き始めていた。旅立ちの第一歩である。

「……トーガ？」

何度も後ろを振り返っては、城を眺めているトーガ。

そんな彼の様子を見て夕霧は声をかけた。

「あ……ごめんね、なんでもない」

トーガは力なく笑う。

「弱虫トーガ。いい加減に勇者っていう自覚を持ったら？」

「なっ」

冷たい口調のリヴィに、夕霧が反発した。

「そんな言い方ないだろ！」

朝食時、二人は幼なじみだと聞いた。しかし、いくら気心が知れた仲だといえど、あの言い方はひどい。性格は、生まれついてしまったものだから簡単には直せないことを夕霧は知っている。だからこそリヴィの言い方に腹が立った。

「いいんだ、夕霧。その通りだから……ごめんねリヴィ」

「……行くよ」

スタスタと先を歩くリヴィ、その後について歩くトーガ。その様子を見て、夕霧はトーガにこっそりと声をかけた。

「……よくあいつに付いていけるな」

臆病なトーガの性格上、リヴィとは絶対に気が合わないはず。そう思った夕霧は何故トーガがリヴィと仲がいいのか不思議に思ったのだ。

「うん、リヴィって本当は優しいんだよ」

にこ、とトーガは笑った。リヴィを庇うような言葉ではなく、本心からそう思っているらしい。

「……どこが？」

幼なじみに弱虫、と吐き捨てるような優しい奴なんて、いるのだろうか。そんなことを思う夕霧。

「オレ、王子だから。さんざん甘やかされて育ってきてるせいで叱ってくれる人なんていなかったんだよね。だからリヴィは叱ってくれる唯一の人なんだ。多分、リヴィがいなかったらオレは永遠に子供のままだったよ」

今も大人とは言えないけど、と苦笑いのトーガを見て、夕霧はなるほど、と感心した。

「それに、昨日夕霧を迎えに行ったのだってリヴィだよ？ 旅立ち

の儀があつて疲れてたのに、終わつてすぐに外が暗いからって探しに行つてて、すごいなーって思ったもん」

「トーガ、余計なこと言わないで」

遅れて歩いていたらトーガと夕霧を心配したのか、先を歩いていたはずのリヴィが戻ってきた。すかさず制止の声をあげる。

「だって、夕霧がリヴィのこと誤解するから」

しどろもどろと答えるトーガ。

「……さつさと行くよ。もうすぐモンスターが出る地域だから、死なないでね」

ぷい、とさつさと前を向いてしまふリヴィだが、心なしか耳が赤い。照れているのだろう、そのことに気付いた夕霧は声を殺して笑った。

「……何コレ」

しばらく歩くと、黄緑色の粘液が地面にへばりついている。ほんの僅かだが、動いているようにも見え、夕霧はバットでつついてみた。

「あ、夕霧それスラー」

「うわああああ！　！　！　気持ち悪う！　！　！　」

ぬちゃぬちゃ、と音を立ててバットに這い上ってくる粘液。それを振り落とそうと夕霧は力一杯バットを振り回すが一向にとれる気配はなく、むしろ徐々に夕霧の手へとその粘液が伝っていく。

「ーイムだよ、なんて……聞いてなさそうだね……」

夕霧を助けるべく、トーガは剣を抜くが、構えたまま動かない。否、動けない。

「……いい加減構えだけの勇者は卒業しなよ。グラキエース」

固まってしまったトーガの代わりに、スライムに向かって呪文を唱えるリヴィ。スライムはみるみるうちに凍結し、黄緑色から紺色へと変化した。

それと同時に、へばりついていたバットから勢いよく飛んでいく凍った粘液。

「な、なんだっただ……」

「スライムだよ。避けて歩けばいいものを、わざわざつくから襲われるんだ、気をつけてね」

リヴィはまた先を歩き始めた。

すでに先ほど言われたモンスターの出る地域、とやらに入っていたらしく、よく見ればスライムがあちこちにへばりついている。何が楽しくて生きているのだろうか、と夕霧はスライムを避けつつ歩いた。

「ここ、スライムの巣かなんか？」

あまりのも多いスライムの数に、眉をひそめる夕霧。

「……こんなにスライムしかないっていうのも、初めてだね……リンクスで何かあったのかも」

ニヤリ、とリヴィは笑う。早速仕事のおいを嗅ぎとったのだ。

「そうと決まれば、早く行くよ。」

旅は不慣れな三人だ。結局今日中にはリンクスに着けず、たき火をするため三人は木片を集めた。

「カリドウス・フラムマ」

トーガが集めた木片に向かって呪文を唱える。

相変わらず魔法は便利だ、とのんきに眺めていた夕霧はふとおかしな点に気付いた。

「トーガも魔法使えたのか？」

魔法使いであるリヴィと相談するでもなく、当然のようにトーガが火をつけたことに疑問を持ち質問する夕霧。

「普通科でも基本的な魔法は学んだ。使える数は限られてるし、生活に使うくらいしかできないけど」

「普通科？学校でもあるのか？」

「もちろんあるよ」

トーガはこの世界の学校制度について、簡潔に説明してくれた。まず、子供たちは六歳までに保育科に入り、その後十歳までは幼等教育科、それからは各自の適正に合わせて普通科、戦士科、薬術科、

魔術科、科学科、モンスター研究科に分かれるらしい。十七歳になると特に才能ある者だけが進める特別教育課程を受けることができるという。

「リヴィはスキップで魔術科の特別教育課程を終了したエリートなんだよ。オレは普通科しか出てないけど……」

「へえ」

感心したようにリヴィを見る夕霧。リヴィはというと、のんきに土の水分を抽出して簡易ベッドを作っていた。すごい、のかもしれない。

「あれ、トーガ戦士科じゃないの？」

「オレが勇者になったのはつい最近のことだよ」

それまでは保育科の先生になりたかったのだというトーガ。彼の人生がいきなり変わってしまったのは、城にしまわれていた剣を発見したところから始まったらしく、そのときのことを話し始めた。

「リヴィが退屈だ、なんて言うから城の倉庫を探検していいよって言ったんだ。そしたら、文献に出てきた剣を見つけたなんて言うから見に行って、手に取ったら持てちゃって」

リヴィは持てなかったんだな、と察する夕霧。

「そこを父さんに見つかって、晴れて勇者の誕生ってわけ。オレ以外は本当にだーれも触れないんだ」

困った剣だよ、とトーガはため息をつく。

「でも、勇者になったって魔王がいらないならそのまま勉強してれば良かったんじゃないのか？」

「剣が勇者を選んだってことは、どこかで魔王も産まれたんじゃないかっていう適当なことを父さんが言い始めたせいで、国民の皆さん総出でオレが勇者だって応援始めちゃって。答えないわけにはいかないでしょ、王子としては」

更に深いため息。しかし、国民のことを考えて自分の夢を投げてまで勇者になる決意をしたのだ。いい王子ではないだろうか。

「ふーん。じゃあ保育科の先生にはなれなくなっちゃってわけか……」

夕霧が呟くと、トーガはふるふる、と頭を横に振った。

「オレの両親、ずっと先生なんて反対してたんだけど、もし勇者として一回り成長して帰ってこれたら先生になってもいい、って……帰れたらなんだけどね」

唯一の救いが救い切れていないトーガに、同情の眼差しを送る夕霧。

「二人とも、もう寝るよ。モンスターが入ってこれないようにバリアを張ったから、勝手に出ていかないようにね」

鶴の一声ならぬリヴィの一声。

こうして、洞窟での夜は更けていくのだった……。

V S・山猫 リンクスの村

朝はあまりモンスターがいないらしい。夜行性のものがほとんどのようで、太陽がてっぺんに昇る少し前にリンクスの村にたどり着いた三人だが、一度もモンスターに出会うことはなかった。

西部劇の舞台にありそうな村の風景。今にもガンマンや保安官でも出てきそうな雰囲気だ。……しかし。

「……人気がないね」

リヴィの言うとおり、人っ子一人見あたらない。

立ち並ぶ家々もきつちりとドアが閉められ、誰かが出てきそうな雰囲気もない。

とりあえず何かがあったのだろう、と察した三人は情報集めをすることにした。

「喉が乾いた」

そうリヴィが呟くも、店が開いていないのではしょうもない。村をうろつくうちに、ようやく一軒の酒場にたどり着いた。

「……ん？ お客さんらない顔だね。どっから来たんだ？」

暇そうにタバコをふかしていた酒場のマスターは、見るからにやつれている。頬はこけ、無精髭が生えたその姿はとても商売人の姿ではない。

「リオンから来ました。あの、何かあったんですか？」

こういう時、前に出て話すのはトーガである。さすが王子だけあって話し合いの場などに慣れているのか、大人相手でも堂々としたたち振る舞いをする。

「あー、観光客？ 今はなににも見るものはないよ、猫が出るのさ。でっかい泥棒猫がな」

すぱー、と煙を吐き出すマスター。

「猫？」

リヴィが怪訝そうに顔をしかめる。

「ああ、そいつが村を荒らすもんで、村人たちは自分の財産を盗まれないように必死さ。おかげで商売あがったり、だ……君らも気を付けなよ」

マスターから見れば、三人の少年少女が旅をしているようにしか見えない。当然だ、夕霧は十九歳、トーガとリヴィはその二つ年下のだから。

しかし、見下されたかのように感じたリヴィは少しむっとして言った。

「……僕たちが猫、倒すよ。それなりの報酬はもらうけどね」

あわわ、とトーガ。初対面の人に不躰なことを言うのはいつまで経っても変わらないらしい。

「ほう。できるものならやればいい。あの猫は強いからな、怪我でもする前に戻ってくるんだぞ」

尚子供扱いのマスターに、更に膨れるリヴィ。そんなところがガキ扱いされる理由だって……と夕霧は苦笑いだ。

「……見てなよ」

リヴィはすたすたと店を出ていき、それを追いかける二人。夕霧が注意しようと口を開きかけると、リヴィは呪文を唱えた。

「コンクーシーティオ（探せ）」

すると、みるみるうちに地面から氷でできた、二十センチ程の人形が十六体わき出て、指示を仰ぐかのようにリヴィのまわりに集まる。「良い？ 君たちの仕事は、この村で盗みを働いている猫を探すことだ。行って」

あつという間に散り散りになった十六体を見送り、リヴィはくるりと振り返った。

「見つけ次第、行くよ」

だいぶ頭に血が上っているらしい。

「本当に大丈夫なのかよ……」

不安を感じる夕霧。村ひとつ閉鎖状態に追い込むような猫だ、相当強いだろう。なのに、実質リヴィと夕霧二人で戦わなければならな

いのだ。不安に感じないはずがない。

「スコルの堅い殻を殴り壊しておいてよく言うよ。あいつの殻を壊せるのなら猫の骨なんて軽いものさ、それに僕が凍らせるから動かないし」

大した自信である。トーガは恐怖ですっかり怯えているというのに、リヴィが勇者になった方が良かったのではないか。

夕霧は自分の武器であるバットを改めて見つめてみる。

これで猫をたこ殴りだなんて、はたから見ればただの虐待だ。割と動物好きな夕霧にしてみれば避けたい。

「猫か……」

この世界の猫が、元の世界の猫と遠く離れた姿をしていることを望むばかりである。

しばらく酒場の前にある広場で休憩していると、リヴィが何かに反応した。

「見つけた…… やられたよ、二体壊された」

ぶつぶつ、とリヴィは人形に指示を出したり呪文や独り言を呟いている。

「トーガ、…… がんばれ」

無理するなよ、と声をかけようとした夕霧だったが、それでは城の人間と同じになってしまう。それはきつとトーガにとって重荷になってしまっだろう、と考えての選択だった。

「う、うん……」

やはりトーガの顔は浮かない。

「行くよ」

リヴィが歩きだしても、トーガの足取りは重かった。

泥棒猫の拠点は、村から少し離れた林。

乾燥した大地から、空に向かってまっすぐ伸びるカサカサの木が、生命力のすごさを象徴している。

「ニャアアアア！　！　！」

そして、耳をつんざく猫のほうこう。あまりの猫の大きさに夕霧は絶句した。

「あれ、本当に猫かよ……」

悠々と木を薙ぎ倒し氷の人形を追い続ける猫。その姿は確かに元の世界で見た何かを追いかける猫とそっくりなのだが、規模が違う。

象程もある体に、木をもともしない肉球、鋭い目つき、そしてその目に縦に入った傷跡。どこをどう見ても可愛いとは形容しがたい。「山猫の一種だね、どうしてこんなところまで降りてきたんだろう。本来ならヴィペール付近に生息するはずだよ」

どこだよ、という言葉は出てこなかった。夕霧と猫の目があってしまった！

氷の人形からは興味が失せたのか、猫は数歩、ゆっくりとこちらに向かってくる。

「やばいぞ……」

夕霧はバットを構える。その瞬間猫はスピードを上げ飛び上がった。「グラク」

「わああああ！　！」

着陸した猫に、トーガとリヴィは吹っ飛ばされてしまった……リヴィは、呪文を唱える途中に。

凍っていない巨大猫と対峙するなんて予想外だった夕霧の頬に、冷や汗が伝う。さすがに、怖いようだ。

しかしそんなことも言っていられない、猫が前足を振りあげると、夕霧はそれをバットでガード、同時にその前足を蹴り飛ばす。

「シャアアアア！　！」

怒りの声をあげる猫。威嚇のポーズなのか、猫は後ろ足で立つとできるだけ体を大きく見せようと全身の毛を逆立て吼えた。

しかし夕霧はそれをチャンス、と猫の懐に入り一番柔らかそうなところ全力でバットを打ち付け、猫の口から血が吐き出される。怯んだ猫は後ろに跳び夕霧と距離を置いた。また、にらみ合う夕霧と

猫。

「……すごい」

戻ってきたトーガは呟く。夕霧の戦いっぷりがあまりにも洗練されていて、見惚れているのだ。

「トーガも見習いなよ」

たった二回の攻撃であの大きな猫にあんなダメージを与えるなんて、トリヴィも驚いている。

猫はまた夕霧に攻撃を仕掛ける。しかし、今度は慎重に、隙を見せないように。

だが夕霧の目には猫のどこをどのタイミングで攻撃すればよいのか、すべて映っていた。

腹を見せてはまた先ほどの攻撃をやられるだろうと判断した猫は、夕霧の少し手前に着地すると、前足を軸に後ろ足で蹴り飛ばそうとする。

しかし野球の構えでその後ろ足を迎え撃つ夕霧。ゴキ、という音がして猫が苦しみ始めた。骨が、砕けたのだ。

「ニャアアアアアアアアア」

ドスン、と地面に倒れる猫。象程もある猫だ、地面が揺れる。

「グラキエース・マキシム（骨の髄まで凍れ）！」

夕霧の頬に、冷気が走った。みるみるうちに凍っていく猫。

苦しんでいた猫は、完全に動かなくなった。

「っあー！疲れた！　っーか怖かった！」

ドサ、と音を立てて夕霧は地面に座り込む。彼女の手から離れたバツトが転がり、木とぶつかってこつん、と音を立てた。

「ごめん、君の戦いっぷりがあまりにも見事で見とれてたよ。怪我はない？」

夕霧に駆け寄るリヴィ。トーガは凍っていても猫が怖いようでおそるおそる近づいている。

「見事って……ま、私も必死だったからね、良かったよ倒せて」
地面に何も無いことを確認して横になる夕霧。だいぶ疲れたのだろ

う。リヴィは猫の状態を確認し始めた。

トーガが猫から目を離さずに隣に座る。

「夕霧、すごいね。あんなのを一人で倒しちゃうなんて」

「んー、偶然偶然」

こうやって自分より大きいのと戦うなんて初めてだし、と夕霧は言う。ええ、とトーガの目が見開かれた。

「初めてであんなに強いって……夕霧が勇者なら良かったのに」
ため息をつくトーガ。

「私は別の世界の住人だからね、そういう重要な役職につくのは御法度なんじゃないか？せいぜい手助けするくらいで」

この世界では、こういう風にする暴力なら認められている。もし元の世界なら、きっと動物愛護団体だとかが出てきて罪の意識に苛まれるだろう。夕霧は元の世界の生きにくさに苦笑した。

「そつかあ……あ、夕霧の武器」

トーガは転がっていったバットが少し離れたところに転がっているのを見つけ、無くしてはいけなさと取りに行く。

バットの手前、ほんの数センチ。

トーガが消えた。

「うわあああああ！」

ズザザ、と音がして、夕霧がそちらを向くと、なんと大きな穴が開いていた。落とし穴だろうか。

「い、痛いよう……」

涙声なトーガの声。大きな音がしたからか、猫から色々なものを剥ぎ取っていたリヴィも様子を見に戻ってきた。

「どうしたの？……トーガは？」

夕霧は穴を指さす。リヴィが覗くと、三メートルは下にトーガがいた。

「何してるの……」

穴に向かって言うリヴィ。

「リヴィ！　すごいよここ、宝石がいっぱいある！　えーと、フロ

ートフロウト（浮かべ）」

トーガは自力で魔法を使い穴から這い出ると、底の方からいくつかの宝石を持ってきた。持ちきれず、何個か地面に落ちる。

「これ、村人が持つて行かれたっていうやつ？じゃあ返さないと」夕霧が落ちた宝石の一つを拾い上げ、光に透かしてみると、とても綺麗だった。

「じゃあ、全部引っ張り出そうか。フロートフロウト（浮かべ）」どうやら穴は猫の宝物を入れておくものだったらしく、宝石、大きな骨、布切れなどさまざまなものが入っていた。

「ふうん、いい石があるね……何個か失敬しよう」リヴィがいくつかの宝石を懐に入れる。

「どうせなら全部持つていけば？」

持つていた宝石を寝ころんだままりヴィへ渡そうとする夕霧。

「そうしたら報酬がもらえないよ。それに宝石を返した方が後々感謝した村人たちが僕たちの噂を広めて依頼者が出てくるかもしれない」

なるほどー、と納得する夕霧。トーガはあまりに打算的すぎて苦笑いだ。

「さて、だいぶ猫の高く売れそうなものとか宝石だとかも大体集まったし、リンクスに戻ろうか。……マスターに一泡吹かせてやらないとね」

リンクスに戻ると、まず酒場に向かった。

タバコをふかし、戻ってきた夕霧たちに言ったマスターの言葉は、「どうだ、強かっただろう」

だった。勝てずに戻ってきたのだと思ったのだろう。

しかしリヴィは何も言わずに、マスターの目の前にあるカウンターに凍らせた猫の心臓を置いた。

「あんなのに苦戦してたなんて、大人も大したことないね」

その時のリヴィの誇らしげな顔、マスターの驚いた顔は見物だった。

あつと言う間に猫撃退の噂が町中に流れ、盗まれた宝を取りに来た者で酒場は溢れ返る。

「お、俺の宝だ！全部戻ってきたー！」

と喜ぶ者もあれば、

「大体は戻ってきたけど、一番価値のある魔石が戻ってこなかった・
・・」

と凹む者もあり。魔石とは、魔法力を上昇させる効果があるアイテムで、この村にあったと思われる魔石はほぼリヴィの懐にある。

「俺元々宝持ってたえやー！はっはっはー！」

なんて者もいた。猫の脅威に曝されることはもうないと思うと、村人たちのテンションもだだ上がりなのだろう。

猫の目玉や肉は、被害がたくさん出て猫に恨みを持ったのだろう富豪たちに破格でどんどん売られていったようで、リヴィの機嫌は上々。

猫を懲らしめた夕霧のバットも買い取りたいという者も数人いたが、それは丁重にお断りしたようだ。

しかしバットを拝む人多々現れ、よくわからない宗教のような図になっている。

トーガはというと、夕霧の戦いっぷりを語り、最後のオチで「オレは見てただけなんですけどね」という言葉でその場の笑いを誘っていた。

その日は夜明けまで宴が続き、疲れを見せ始めた三人は、この村一番の大富豪の家に泊めてもらい疲れを癒すのであった……。

V S・化け狐？ ルナールの村

夕霧が目覚めたのは、実に翌々日の朝だった。

しかし、そのことにまったく気付かず、自分よく朝から起きたかなんて考えていた。

家主にリヴィとトーガのことを聞くと、酒場にいるとのことだったので一人村を歩く夕霧。

次はどうするんだろう、なんて寝ぼけ頭で考えていた。

「……あ、今日は起きてきたんだ」

「夕霧おはよう！ 昨日はずっと寝てたみたいだね、疲れはとれた？」

リヴィとトーガだ。酒場に入った瞬間かけられた言葉。

「……私昨日起きなかった？」

ああ、道理でこんな朝早くから起きてるわけだ、夜中騒いでたのに、なんて思う夕霧。

「頭大丈夫？」

リヴィの辛辣な言葉は、寝ぼけ頭の夕霧にはよく刺さった。

「夕霧お酒飲み過ぎたんじゃない？」

「かもね……」

とは言ったものの、夕霧は酒を飲んでいない。この世界では十六歳を過ぎれば合法飲酒なのだが、異世界だからと酒の味を覚えてしまえば帰ったときに飲みたくなってしまうかもしれない、と思ったからだ。

「ん？ ねーちゃん、俺が酒勧めても断固としてオレンジジュースしか飲んでなかったよな？」

マスターがニヤニヤしながら言う。よけいなこと言うな、とマスターを睨む夕霧だったが、もう遅い。

「純粋な寝ぼすけだね」

「ねぼぎりだね」

と、リヴィとトーガ。話を逸らそうと夕霧は別の話題を考える。

「……次どこ行くんだ？ あ、あざす」

夕霧が何を言わずともオレンジジューズを出してくれるマスター。この世界のオレンジジューズのおいしさに感動し樽一つ開けてしまったのはつい二日ほど前の話だ。

「昨日の間に決まったよ。歩いて半日のルナール村に行こうと思う、どうやら化け狐が闊歩しているらしくてね。正式な依頼が出ているんだけど、誰も狐を見つけられないらしいよ」

「良いんじゃないか」

特に反対する理由はない夕霧は速攻賛成。

「じゃあ、それ飲み終わったら行こうか……バットがないね、取りに行かないと」
というわけで。

三人は酒場を後にすると、富豪の家に寄った。

屋敷に使えるエルフは数人いたが、その他は通常通り仕事だそうだ。リンクスは平和を取り戻し、またいつも通りの動きをしている。

エルフの一人に、富豪へお礼の伝言を頼むと三人はルナールへ向かった。

ルナールに近づくにつれ、道が悪くなっていく。林を歩いていたのだがいつのまにか森に変わり、木の根っこが地表に現れている。何度も足を取られ、夕霧のジャージの足下は泥だらけだ。

しかも、モンスターもどんどん襲いかかってくる。ステージレベル上がりすぎだろ……と愚痴る夕霧。

「文句言いながらでもよく付いてきてるよ、夕霧は……オレ初めてリンクスからルナールに行った時、途中で帰ったもの」

トーガだ。親に連れられて色々な国へ行ったことがあるらしいが、数回は挫折しているらしい。そんな話を聞きながら歩いていると、ようやくルナールの村にたどり着いた。

辺りはもう真っ暗だし、もうすぐでまた野宿をすることにんるか

思いきや、明かりが見えたことで一気に三人のモチベーションが上がったのだ。

へとへとになって到着したルナルの村は、リンクスの村と違い夜だというのにちらほらと人がいて、明かりはすべて優しい光だ。夕霧は不思議な雰囲気の村だ、と感じ辺りを見回す。

「旅の人ですか？ 宿屋ならあちらですよ」

優しいそうなお兄さんに声をかけられた。にこにこしていて、この村の雰囲気にぴったりとマッチしている人だ。

一刻も早く休みたかった三人はお兄さんの行ったとおりの道を進む宿屋、なんて看板はかかっていなかったが、警戒心がまるで働いていなかった三人はつきあたりの一軒家の扉を叩いた。

「ごめんください」

トーガが前にたち、宿屋の主人が出てくるのを待つ。

「はい、どなたさまですか……？」

小柄な女性だ。彼女は私たちを怪訝そうに見つめた。

「ここが宿屋って聞いたんですけど……」

トーガが不安そうに言くと、女性はああ、と納得した表情になった。「また被害者が出たんですね……ここは宿屋じゃありません、あちらにある建物が宿屋です」

女性が指さした先には、確かに宿屋とかかれた看板が立っている。

三人が来た道の反対側だ。

「困ってますのよ、村人に変化して嘘をつくので各々のすれ違いが生じて……。あなたたちはその討伐依頼を聞いて来たのかしら？」

一度騙されたようですけど、がんばってくださいね」

ぱたん、とドアが閉められる。

三人は黙ったまま女性の言うとおりの宿屋に向かい、本物であることを確かめてから戸と叩いた。

三つの部屋を取り、言葉を交わすでもなくそれぞれの部屋に入る。夕霧は泥だらけになったジャージを脱ぎ捨てるとシャワーを浴びた。元の世界と基本的な構造が一緒に助かる、と思う夕霧。リオンやり

ンクスでも同じだったが、そういえばどこもバスタブはなかった。さっぱりした体で浴室を出ると、脱ぎ捨てたジャージが綺麗になってきつちりと畳まっている。

これも魔法か……なんて思いつつ、ジャージをはおってベッドに潜り込むと、泥のように眠った。

朝、二人にたたき起こされた夕霧は、トーガが焼いたパンケーキを食べていた。ぎりぎりまで眠っていた彼女のために歩きながらも食べれるものを作ってくれたのだ。

「さて、狐を探す方法だけど……」

「氷人形は？」

「人に化けてるから使えないよ、ひたすら探すしかないね」
うーむ、と考えこむ三人。

「せめて、狐の目的がわかればな……」

トーガが呟く。

「困らせること、だと思っただけ……」

と、夕霧。

「じゃあ昨日の状況を再現すればいいのかな」
リヴィだ。

狐は困っている人を騙して更に困らせることを楽しんでいるのではないか、という結論に達した三人。

「困ったフリしておびき出せばいいんだな！」

ルナルの服屋で旅人から大人気というローブを購入し、ジャージの上からそれを羽織った夕霧が森の中で狐をおびき寄せる。そんな作戦を立てたのだった。

「おや？ 見ない顔ですね、旅人の方ですか？」

迷子のようにあっちへフラフラ、こっちへフラフラしていた夕霧に声をかけてきたお兄さん。彼は確かに昨日三人を騙したお兄さんだった。

「ええ、道に迷ってしまつて……」

俯きがちで声を出す夕霧。少し籠もった声で、昨日会ったことを最後までばれないようにするためだ。

「最寄りの村はあちらですよ」

ルナールとはまったく違う方角を指さすお兄さん。まったく困った狐だ……。なんて、夕霧は苦笑いだ。

「うそつき」

隠し持ったバットで足払いをかける。

先ほど買ったローブが邪魔だったので脱ぎ捨て、狐が変化したお兄さんの胸をバットの先で押さえつける。

「ぐっ……貴様昨日の旅人か……」

しゅうしゅうとお兄さんを煙が包み、本来の姿を現した狐。立派な尻尾が九本。九尾の狐か、と夕霧は警戒心を強める。

トーガとリヴィイは少し遠くから氷人形を使って様子を伺っている。

狐がひっかかったら壊せと渡されていた人形を握りつぶす夕霧。

狐はその隙にバットの下から逃げ出し、戦闘態勢に入った。

「この儂を怒らせたこと、後悔させてやろう」

ぐわ、と口を開け飛びかかってくる狐。

「っ……狐にしては立派な牙をお持ちで」

予想外のその牙。夕霧はぎりぎりで肌に突き刺さりそうになるそれをくい止めた。ひび割れたバットがみしみしと音を立てる。

「武器を犠牲にするとは、主なかなかやりおるの……だが二度目はないぞ」

一度退いた狐だが、バットがもう限界だということを悟るともう一度同じ攻撃を仕掛けてきた。

やられる、と判断する夕霧。あのバットではもう防御できないだろう。せめて少しでもダメージを与えてやろうと握り拳を作る。

「危ないっ！」

ガキッ

鋭い金属音。

トーガだ。

「……トーガ？ あれ？」

いつもの彼ならば、こんな戦闘の場に出てくるはずはない。驚いた夕霧は、まだ戦闘中だというのに呆けた顔をした。

「ゆ、夕霧が攻撃を受ける気だっと思ってたら…… どうしてバットでガードしようとしなかったの？」

少し怒っているような口調。しかし、トーガの手は震えている。剣はさすが勇者の剣といったところか、夕霧のバットが耐えきれなかった攻撃をあっさりと跳ね返していた。

しかし狐は剣に噛みついたせいで電流が流れ、無様にも伸びている。

「……こいつ、弱かったね」

「狸寝入りかも」

つんつん、とひび割れたバットで狐をつつく夕霧。すると、また狐は煙に包まれ、現れたのは……子狸だった。

「……狸だね」

「狸寝入りだけに狸？」

可愛い子狸なこと、と夕霧がつまみあげる。完全に伸びているようだった。

「つまり、狸のイタズラだったってこと？」

と、トーガ。

「さあ、もしかしたら主犯がいるのかも…… ってあれ、リヴィは？」

「なんかきな臭そうな獲物を見つけたとかでいなくなっただけ……」

ふーん、と返す夕霧。まじまじと伸びた子狸を眺める。

「あ、こいつ雄だ」

「何見てるの!？」

「いや、なんか可愛いから連れていこうかなと」

「……元の世界に戻るとき、辛くなっちゃうよ？」

「……それもそうか」

でもせめて意識が戻るまでは保護してやろうと、ジャージのチャックを少し開けて胸元につっこむ夕霧。腕を引っかけていい具合に子

狸をぶら下げた。

「さて、リヴィ探しに行こうか」

「その必要はないよ」

ずるずる、と何かを引きずって登場するリヴィ。

「……でかい獲物手に入れたな」

「狐だよ。よく肥えてるし魔力のある強い狐だから夕霧の防具にいいかなと思って……それだけじゃ頼りないし」

ジャージのことを言っているのだろう。確かに夕霧は前衛でどんな敵にかかっていく割にはジャージという薄く弱い服しか着ていない。今まで怪我の一つも負わなかったのが不思議なくらいだ。

「ありがとう、リヴィ」

と、夕霧。

そのとき、夕霧の胸元にいた子狸の鼻がひくひく、と動く。

「……夕霧、何それ」

「ルナールを困らせてた化け狐。正体は狸だったけど……子供だったし可愛いから目が覚めるまで私のペット」

「随分と短いペット期間だね」

別に連れてきてもいいのに、とリヴィ。

「あとで辛くなるからね、帰るとき。……あれ？目が覚めた？」

まんまるの大きな目が、今の現状を把握しようとあちこちに動き回っている。

それを覗き込む夕霧と目があつた子狸は慌てて夕霧の胸元を飛び出した。

そしてリヴィの引きずる狐を見ると、驚いてまた夕霧のもとへ戻る。

「……何がしたいんだお前」

呆れた口調の夕霧。頭からつつこんだせいで、ぷるぷると震える子狸の小さな尻。

「この子、その狐が怖いのかも」

トーガだ。

「大丈夫だよ、もう中身ないから」

さらりと恐ろしいことを言うリヴィ。

その言葉に、ぴよこつと再び顔を覗かせる子狸。

狐をじーっと見つめ、まったく動かないことを確認すると再び地面に降り、狐の体に触れた。

「！」

あまりの冷たさに驚く子狸。夕霧はうーん、と考え込み、もう一度子狸を拾い上げた。

短い手足をバタつかせ、子狸は抵抗するが夕霧はものともしない。

「一人立ちするまで私が育てる」

絶対明日辺りのたれ死ぬ。確信した。と夕霧。

「……夕霧がいいならいいけど……」

トーガは少し不満そうだ。別れの時、育ての親である夕霧が辛いのはもちろんだが、子狸だって辛いに違いない。

「名前決めないとな……こいつびるびるするからびるびるで」

「いいのかい、そんなてきとーで」

「いーのいーの。な、びるびる」

夕霧はびるびるに笑いかけた。

びるびるはよくわからないような表情をしているが、こくこくと頷き、夕霧のジャージに入り込むと、定位置に体を置く。

「さて、話がまとまったところで戻ろうか。報酬をもらいに行かないとね」

リンクスのときのような盛大な宴は行われなかったが、毛皮を持ち歩いていたからか、村長に報酬をもらった後は村人たちに声をかけられた三人。

毛皮は無事夕霧の上半身を守る防具になったし、宿代も無料。びるびるは仇敵である狐の毛皮にくるまることを嫌がり、夕霧の頭にしがみついたことにはしたようだ。

「びる、おいで」

風呂上がり、ついでにびるびるも洗ってしまおうとした夕霧は、布

団でうとうとしていたぴるぴるを呼んだ。

水滴が滴る夕霧を見たぴるぴるは、窓際に逃げる。

嫌だ嫌だと首を振るぴるぴる。

「大丈夫、暖かいから……臭いまま私の頭には乗せないからな!」

結局折れたぴるぴるは、桶に汲まれたぬるま湯で洗われた。

「気持ちいいだろ」

じゃばー、と毛皮を洗った泡を流され、名前の通りぴるぴるぴる、と水を吹き飛ばす。

「あー、すぐ拭くから我慢しろよな……」

服濡れたじゃねーか、とわしゃわしゃとぴるぴるを拭く夕霧。

タオルの摩擦熱で頭の毛が短いところがほんのり赤いぴるぴるを見て、夕霧は吹き出した。ぴるぴるは抗議するかのように夕霧を見上げ睨みつける。

「よしよし、ごめんな」

夕霧は布団にぴるぴるを持っていき、一緒に横になった。じゃれ合ううちに眠くなってしまった一人と一匹は、いつの間にか眠りにについていた。

ぺちぺち、と小さな手が夕霧の頬を叩く。

「ん……」

反応を示した夕霧に、ぴるぴるは更にぺちぺちぺち、と彼女を起こそうとがんばった。

しかし、また眠りの世界へと引きずり込まれていく夕霧。

ぴるぴるの努力虚しく今日も寝坊するかのように思えた……が。

白い煙がぴるぴるを取り囲んだ。

「夕霧! 起きて!」

人間の子供。ぴるぴるは、子狸の状態では喋れないが言葉を話す動物に変化したときのみ、喋ることができる。

「んー……あと五分。……誰お前」

一度起きかけ、再び寝ようとした夕霧だったが寝室に見知らぬ子供

が入っていたことで目が覚めたのだろう。

「なんだよ、昨日夕霧がおいらのこと拾ったんじゃないかよ。ぴるぴるだよ、忘れたの？」

唇をとがらせるぴるぴる。

「ああ、変化の術か……そっぴや狐になつてたもんな……」

どさ、と夕霧はまたベッドに横になった。

「ああもう、起きてー！」

お腹すいたよー、と騒ぐぴるぴるだが、夕霧は一向に起きようとする気配がない。

「……いいよーだ、夕霧がそっぴやつて起きないなら、トーガのぱりぱり剣借りてきてやるんだから」

「……わかつたよ」

よく考えればぴるぴるがトーガの剣に触れるはずがないのだが、寝起きの夕霧にはよく効いたらしい。

五分後、身なりを整えた彼女はトーガの部屋を訪ねた。

「トーガ、リヴィ、おはよう」

リヴィの部屋の方が近かつたので一度ノックしたのだが、既にいなかったのだが、やはりトーガの部屋にいたらしい。

「おはよう、夕霧」

「おはよ、夕霧にしてははやいね……ぴるぴるかな？」

勘の良い奴だ、と夕霧は苦笑い。ぴるぴるは、リヴィの飲んでいる紅茶のカップと対になっているソーサーの横に立つと、えっへん、と胸を張った。

「ふうん。君、やるじゃないか」

そう言つてぴるぴるにバスケットを与えたリヴィ。ぴるぴるはうれしそくにそれを食べる。

「あ、腹減つたつて言つてたんだっけ……」

基本的に、この世界の宿は止まるだけだ。ご飯等は自分で調理しなければならぬ。解放されているキッチンはあるものの、材料も自分で買つてこなければならぬので夕霧は自分で作ることを避けて

いた。

「あ、オレタ霧の分もぴるぴるの分も作ってるから、良かったら食べて」

しかしトーガは料理が好きならしく、ほとんどの食事をトーガが作っている。タ霧がトーガの指さす箱を開けると、まだ湯気が出ているホットドックが二つ入っていた。普通サイズのものど、ぴるぴるサイズのものだ。

ビスケットを食べ終わったぴるぴるにホットドックを渡すタ霧。

「熱いから気をつけろよ」

ぴるぴるがホットドックを食べることができているのを確認したタ霧は、自分も朝食を取り始めた。

「そうそう、タ霧。昨日はトーガも狐退治に一役買ったって、本当かな」

「ん」

口に入っている分のホットドックを飲み込むと、リヴィの質問に答えるタ霧。

「本当。私のバットが狐の牙にやられて、次は防げないって思って攻撃に切り替えたらトーガが私と狐の間に入ってガードしてた」

狐っていつかぴるぴるだけど……とトーガは苦笑いだ。

「ふうん。じゃあ、君も成長してるんだね。……次もがんばってと言いたいけれど、次はがんばってどころじゃないんだよね」

軽くため息をつくりヴィ。トーガはさつと青ざめる。

「ど、どういうこと……？」

「次はヴィペールっていう街なんだ。大魔法使いソラニテがいる……ということとは、何か問題があるとすれば彼でも解決できない大問題だ」

ホットドックを食べ終わったタ霧は、不思議そうに訪ねた。

「じゃあ後回しとか、問題なさそうならいく必要なくね？」

そしてそれに答えるリヴィ。

「魔法使いって、踊り子の兄なんだよね」

少しの間があり、夕霧は納得した。

「ああ、そういうことか。リヴィのおじさんだから、会ってみたいんだな？」

「そういうこと」

リヴィは孤児だ。つまり、自分と血の繋がった人間と会うのは初めてに近いのではないか。なら仕方ないか、と夕霧は次の街ではやることないかもな……と考えつつ、ぴるぴるの朝食を見届けた。

V S・巨大水蛇 ヴィペールの街1

ヴィペールへ続く道は、更に鬱蒼と茂る木々に囲まれていて、道とは言いがたいものだった。

コンクリートジャングルで生まれ育った夕霧にはきついものがある。しかし一度行くと行ったのだ、撤回するわけにはいかない。

唯一の救いは、木々が高すぎて、葉が茂りすぎて、日差しがほとんど遮られていることである。

夕霧は気を紛らわせるため、トーガに話しかけた。

「トーガとリヴィって、完全に主従関係成り立ってるけど、なんで？」

素朴な疑問だ。確かにリヴィの方が気も我も強いけれど、トーガは王子様なのだからもう少し威張っていても良いように思える夕霧。国民の声に応えて、自分の夢までなげうつような王子なのだから。

「オレ、虐められっ子だったんだ。王子なのに気が弱いから、意地悪な子に目を付けられてさ。それを助けてくれたのがリヴィ。まあ、他にもたくさん助けられてるけどさ」

いわゆる幼なじみ、というやつだ。

「別に、あいつの顔が気に食わなかったただだよ」

「っん、と会話に入るリヴィ。出た、リアルツンデレ……なんて夕霧は思う。」

「オレのことを虐めてた奴、リヴィと仲が悪かったんだ。いつもリヴィの髪の毛のことをからかって」

トーガが顔をしかめる。珍しく怒っているようだ。

「真っ黒の髪の毛ってきれいだと思うんだよね、オレ。夕霧もさ」
トーガの手が夕霧の髪の毛に伸びる。いつも一本にまとめられている彼女の髪は、リアルジャングルを進むうちにかなり崩れていた。

「ちょ、ちょっと待て、私そんな展開求めてな」

顔が赤い夕霧。彼女の男性耐性は0だ。ちなみに髪の毛を褒められ

たのだったってほぼ初めてに近い。

「トーガ、夕霧が使いものにならなくなるよ」

べり、と効果音がつきそうな勢いでトーガから引き剥がされる夕霧。助かった、と思ったのもつかの間、リヴィが放してくれない。

「あ、あの、リヴィ、リヴァイアさん、放していただけないだろうか」

「やだ、夕霧がこんなに狼狽してるのも面白いし」

ニヤリ、と意地悪な笑みを浮かべるリヴィ。

「ややややめろ！ た、助けてびるびる！」

夕霧の頭でおろおろしながら事の成り行きを見守っていたびるびるは、先ほど夕霧を起こそうとしたときよりも更に高速でぺぺぺぺぺとリヴィの頬を叩いた。

「……わかったよ、放すよ」

実際痛くも痒くもないのだが、必死になるびるびるの姿が可愛らしいということとで夕霧は解放される。

「はあ……もう、疲れた……」

げっそりと疲れ切った様子を見せる夕霧。

もうしばらく進むと、人一人寝転がれそうな切り株を発見した。

「ちよつと休憩、もう疲れたよ」

さつき一日分の体力持つて行かれたしさあ、と夕霧は文句を言う。

「……悪かったよ、僕はその辺でモンスター退治してくるから夕霧は休んで……トーガは来るんだよ」

一緒に休む気満々だったらしいトーガは慌てて剣を背負い直した。

夕霧はというと、歩き疲れも手伝って既にうつらうつらとうたた寝している。

「びるびる、夕霧のこと頼んだよ」

リヴィはトーガの準備ができたことを確認すると、再び歩きだした。

切り株で眠る夕霧の傍に、一匹の九尾の狐。言うまでもなくびるびるなのだが、必死に眠気をこらえている。

しかし眠ってしまったっては何かが現れた時に反応できない。しかも子狸の姿に戻ってしまう。

そんなことをすれば二人が戻ってきたときに怒られてしまうだろう……それは嫌だった。

「ん……」

夕霧が身じろぐ。

どうしたのだろう、と彼女をのぞき込むびる。

『あら……私がちょっと居眠りしている間に、ペットなんて飼い始めたのね』

「！」

どこからともなく声がする。というよりも、夕霧から……しかし、彼女はこんな喋り方ではない。びるびるは辺りを警戒した。

『あら、私を警戒するだなんて笑えちゃうわね。誰よりも夕霧の味方だっというのに……早く思い出さないかしら』

うふふ、と笑う謎の声。

「誰だ、貴様は……」

重低音の声で唸ってみせると、謎の声はくすくすと笑った。

『ファーチャよ、そのうちまた会うこともあるだろうから、覚えておきなさい……あら、誰か来たわ』

ファーチャと名乗った声の言っており、確かに一人の少女がこちらへ向かって歩いてくる。

「あらあ？ 先客う？ ここ、私の場所なの……」

不満そうに唇を尖らせる少女は、夕霧を見て驚いた。びるびるも、少女を見て驚いた。

「あらあ！ あなたのご主人様、私とそっくりねえ！」

髪の毛と目の色こそ違うが、顔立ちや体格がそっくりだし、なにによりびるびるの鼻に届く匂いが、彼女たち二人酷似している。

「私とそっくりならあ、ここの切り株が気に入るのも仕方ないけどお……」

「ん……」

うるさいな、と夕霧は不機嫌そうに目を覚ました。

そして目の前にいる少女を見ると、首を傾げる。

「誰？」

びるびるは夕霧が目覚めたのもういいだろうと、子狸の姿へ戻り彼女の陰に隠れた。

「私い、ソワレ。貴方、私とどんな関係でいらっしゃるの？」

間延びした喋り方に、少しいラッとした夕霧だが、ここはひとつ我慢だ、と自分に言い聞かせる。

「私は夕霧。君とはまったくの他人だと思うけど……なんで？」

「だってえ、貴方私とそっくりじゃなあい？」

夕霧は黙った。そしてソワレの顔をまじまじと見つめると、

「……確かに」

と認め、不思議そうに彼女の顔を見つめる。

「貴方あ、私の代わりに生け贄になつてくれなあい？」

「は？」

いきなりの突飛な質問に固まる夕霧。

しかし、この世界では普通のことなのかもしれない……んなわけないだろうが。なんて思いつつ、

「わ、私の仲間が戻ってくるまで待つてくれるなら、話し合おう。な」

ということ、二人と一匹は切り株に腰掛けてトーガとリヴィの帰りを待つことになった。

「……なるほどね」

「本当にそっくり……」

戻ってきて生け贄の話聞いた二人の反応はこんな感じだった。

トーガはひたすら夕霧とソワレのそっくりさに驚いていたが、リヴィは頭の中でどうすれば得になるか考えている。

「とにかく、その君が生け贄に捧げられる化け物の話を聞こうじゃないか」

「じゃあ、私のおうちに来てえ。お父様が話してくれると思うのお」
ちよい、とスカートの裾をつまんで歩き出すソワレに続き、歩き出す三人。

どうやらソワレは、目的地であるヴィペールの住人のようだ。

ソワレは魔法使いだったようだ。雷の魔法が得意なようで、モンスターたちを感電させては道を譲らせている。

「あの子強いね」

夕霧はソワレとリヴィが魔法を連発するせいで楽に歩けることを喜んでいた。

二人とも負けず嫌いなようで、目に留まったモンスターを早いもの勝ち、とでも言うかのごとく倒していく。

ヴィペールに着く頃には、二人とも魔法の使いすぎでだいぶ疲れていた。

「……君、やるね」

「貴方こそお、私についてこれるなんて何者お？」

ソワレは今まで、街で一番の天才と言われていたせいで人に勝てないことが嫌いらしい。

しかも、道中の発言でとんだお嬢様だということがわかった。なんと、ソラニテの娘だという。

「ここからは飛んでいくのお。ちょっと待ってねえ」

ソワレは小さな鈴を取り出すと、チリンチリンと鳴らした。

すると、箒に乗った絵に描いたような魔法使い……ではなく、エルフが現れた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。ご友人たちも、ようこそいらっしやいました」

トーガの国では絨毯だったが、この国では箒なようだ。

「バウアール、お父様にお客様よう。大蛇退治をしてくれるかもしれないわあ、実力も折り紙付きよあ。至急、お通ししてえ」

「かしこまりました」

パチン、とバウアールが指を鳴らすと数人のエルフが現れる。

「どうぞお乗りください」

箒に乗り込み、上昇する四人。

ぴるぴるは落とされまいと必死だ。

「ちょ、ぴるぴる痛い！ 私の髪の毛がマツハなんだが！」

「うるさいよ夕霧」

「あ、見て見て！ ヴィペールだよ！」

トーガの声に顔を上げた夕霧。

そこには、元の世界ではありえないような樹上街が広がっていた。魔法で組み合わされた樹が固定され、その上で生活する人々。たくさん箒が飛び交っている。

今までの街の中で、一番ファンタジーだ。

箒のままソワレの家へ向かうようで、ヴィペールの中心地へ向かっている四人は、それぞれの興味を惹かれた場所を見ている。

そうこうしているうちに、ソワレの……大魔法使いソラニテの家に着いた。

「お父様あ、ただいま帰りましたあ」

既に来客の知らせを聞いていたソラニテは、応接間のようなところで四人を待っていた。

「いらつしゃい、リオンの王子トーガ、天才氷魔リヴァイア、そして……異世界からの来訪者、夕霧」

す、と立ち上がると一人一人に握手を求め、座るように促すと自らもまた同じところに腰掛けるソラニテ。

「……なんで私が異世界から来たなんてわかるんです」

座ってすぐに、思わずそう問いかける夕霧。生け贄の話なんてすっかり忘れている。

「魔法使いだからさ。本当に君は……そっくりだ」

ソラニテは目を細める。娘とそっくりな顔をした人間を見た父親はこんな風になるのだろうか。

「さて、君たちは我が娘ソワレを、ひいては街の娘たちを救うため

に一肌脱いでくれるそうじゃないか。言っておくがあの蛇は手強いぞ」

ソラニテは、ヴィペールのすぐ傍にある泥沼に住む、毒を持った巨大な水蛇の話をしてくれた。

泥沼にいる水蛇に、ソラニテの得意とする雷系の魔法は効かない。泣く泣く、水蛇が要求する年頃の娘を捧げることで街の平和を守っているのだという。

「泥沼から出た蛇には魔法、効くんじゃ……？」
トーガの疑問だ。

「あの泥沼には水神が奉られている。あいつはわざわざ街へ来なくとも、祠を壊すことで街を破壊することくらいならできる」
なるほどね、とリヴィ。

「これまで他の人に助けを求めようとか、思わなかったの？」

確かにその通りで、大魔法使いともなれば人脈も相当のものだろう。それなのに、なんで。

「私が倒せないものを、倒せるなどと意気込む馬鹿が今の世にいると思うか？ 勇者はその馬鹿だったが、今はもういない」

ソラニテは頭を抱えた。

大魔法使いといえど、娘を失うのは辛いのだろう。むしろ、この大魔法使いが娘を甘やかして育てたのは、ソワレを見ていればわかる。

「ソワレは今夜大蛇の元へ行く……ああ、もし大蛇を退治する者があればどんな物でも差し出すというのに！」

きらん、とリヴィの目が光った。

夕霧もリヴィの考えていることがわかった気がして、口について出た彼女の言葉は、

「任せて。」

だった。声をそろえた二人に、トーガはすぐく面食らった顔をしていたが、とうとう覚悟を決めたのだらう。少し遅れて、小さな声で「任せて……」

と呟いた。

ソラニテは、自分の娘とそっくりな夕霧を見つめ、何も言わない良いのだろうか、こんな年端も行かない娘たちに任せて、と悩んでいるらしい。

「年頃の娘なら誰でもいいんでしょう？　じゃあ、私でもいいわけだ。なんの偶然かわからないけれど、ソワレと私はそっくりなわけだし」

そう言うと、リヴィとトーガにとっては予想外のことだったようで、二人とも慌て始めた。

「何を言ってるの、夕霧。おとり作戦なんて僕は嫌だよ。……間に合わなかったら、どうするのさ」

「そうだよ！　夕霧、頼むからいつもの通りリヴィが凍らせて夕霧がぼこぼこにする作戦で……あ、今回はオレも、手伝う……けど」

トーガが自信なさげなのはいつもだが、リヴィまで気弱な発言だ。しかし、夕霧は自分がおとりになる作戦が一番だと信じて疑わない。「大丈夫だよ。ソワレ、あんまり気に入っていない服貸してくれるか？　さすがにこの格好じゃ大蛇も怪しむだろうし」

夕霧がジャージの上着を脱ぎ捨てると、リヴィその上着を彼女の肩にかけ直した。

「許さないよ、君がそんなことするなんて。大蛇なんて油断させなくても、僕が一瞬で凍らせてみせるから」

夕霧の表情が驚きと、どこか照れのようなもので染まる。

しかし彼女の思いは変わらないようで、三人の間で折れることのない戦いが始まった。

「……私い、食べられなくてもいいならあ……途中までえ、生贄のふり、するよあ？」

その戦いを開始数秒で終わらせたのは、ソワレだった。

恐怖を押し殺したような、震える声。しかし、その音には確固とした決心が現れていた。

「……それでこそ、私の娘だ」

ソラニテはソワレを優しく見つめると、夕霧の方を向いた。

そこで感じる違和感。夕霧は、ソラニテが何か、自分に特別な感情を抱いているように思えた。親の愛に限りなく近いが、どこか違うもの。娘にそっくりというだけで、そんな情を会ってすぐに持つものだろうか。

「夕霧。そして……リヴァイア、トーガ。娘を……この街を頼んだよ」

ソラニテは小さく何か呪文を唱えた。

数秒後、四人の体が軽くなり宙に浮き始める。なんだなんだ、と夕霧は不思議そうに自分の体を見つめた。

「私にはこれくらいしかできないが……君らの助けになればいいな」
リヴィも驚いている。

「他人に浮遊魔法を、しかもこんなにいつぺんにかけられるなんて……」

くつくつく、とソラニテは笑った。

「大魔法使いの名ははりぼてではないぞ。あの大蛇だって、相性が悪すぎたというだけで泥にさえ浸かっていなければ……」
「……」
「きつとあいつは私の弱点が泥だと知って沼に住んでいるのだろうかね」

「あちらの方が一枚上手だったわけだ、と呟く。大魔法使いだ、プライドも相当高いだろう……この事態が一番悔しいのはこの人なのかもしれない。」

「ならば、できるだけ完璧に任務を完遂し、この大蛇の記憶を過去の物にしてあげること、それが自分たちにできる最善のことだ、と夕霧は決意を固くした。リヴィのおじさんのために、いっちょやってみるか、と。」

夕霧は少し不安そうに自らのバットを見たが、大丈夫だろうと思いき直した。

「ぴるぴるはどうする？ 待っててもいいんだぞ」

小さく弱いペットに選択権を与える夕霧。しかし、ぴるぴるはぎ

ゆう、と彼女の頭にしがみつき離れようとしないう。

びるびるの覚悟に触発されたのか、トーガも剣を肩にかけ、紐を握りしめた。

準備は、万端なようだ。

「じゃあ……行くか！」

夕霧の号令で、三人はソラニテの家を飛び出した。目指すは泥沼、水蛇の巣だ。

V S ・巨大水蛇 ヴィペールの街2（前書き）

ちよつと蛇さん怖いかもしれない。

V S ・巨大水蛇 ヴィペールの街2

「じゃあ……ちゃんとお、助けてよねえ」

ソワレはソラニテの魔法を解き、泥沼の縁に浮かんでいた船に座った。

「任せて」

夕霧が唇の端を釣り上げると、ソワレもまったく同じ表情をする。戦闘開始だ、とトーガとリヴィに目で合図する夕霧。

水蛇に気付かれぬよう、高い木の陰に隠れ、先程決めた持ち場に着く。

しばらくすると、泥が盛り上がり、大きな蛇が沼から顔を出した。頭だけで直径三メートルはありそうだ。

『おお……こいつは上玉。魔力も上々だ。ソラニテめ、やっと自分の娘を差し出したか』

蛇の言葉なんてわからないはずだが、もうこの世界では動物の言葉がわかるのが当然のようだ。元の世界に帰って犬とかに話しかけたら恥ずかしいな、なんて夕霧は思った。

しかし、そんなことを考えている場合ではない。水蛇の舌がソワレの頬をなぞった。

彼女の表情が恐怖にひきつりそうになるが、そうなのは水蛇の思う壺だと、平静を保とうとするソワレ。

一刻も早く助け出してやらねば、と夕霧は焦る。同じ女の子だ、爬虫類が嫌いな気持ちはよくわかる。

作戦は至ってシンプル。リヴィが凍らせて、トーガと夕霧がダメージを与え、倒す。

水蛇はソワレに夢中で、リヴィが背後にいることに気付くそぶりも見せない。リヴィは少し意識を集中させ、水蛇に向かって手をかざした。猫の時よりも、真剣な顔で。

「グラキエース・マキシマム（骨の髄まで凍れ）！」

ひゅう、と沼全体に冷氣が漂う。

氷の魔法に関しては天才、というのも頷けた。泥沼全体を氷で包んでしまい、一瞬で氷河に來たようだ。

「こ……こわかったぁー……」

ソワレは水蛇が凍ったことを確認し、凍った泥沼の表面を歩き縁に戻ってきた。ソラニテの娘だけあって、常人よりは肝が据わっているらしい。

「ほら、トーガ、夕霧。早く」

やはり強い魔法だったらしく、リヴィの額にはうつすらと汗が滲んでいる。

「はいはい、今行くよ」

なんだか戦いらしくなくて、拍子抜けだな、なんて夕霧が思っている。

『馬鹿共め！ この私がそう易々とやられると思っておるのか！』
恐ろしい声が凍った沼に響き、沼の表面がびきびきと音を立てて割れた。

そこから飛び出してきた大蛇の尾は自らを凍らせたリヴィに巻きつく。

「っ……」

苦しげに顔をひきつらせるが、けして声を上げようとしないリヴィ。

それが気に障ったのか大蛇は更に力を込めた。

『その程度の魔法力で私にたてっこうなど、甘い！ かの大魔法使いソラニテも手出しできぬのだぞ、わきまえる若造！』

凍らせられたことに随分とお怒りのようで、夕霧やトーガのことはまるで眼中にない。ソラニテが手を出さなかったのは相性が悪いからだというのに、水蛇はかなり思いあがっている。

しかし水蛇は思いあがる程に強くなるタイプのようで、ギチギチとリヴィを締め付ける。

「ぐ、は……っ」

とうとうリヴィの顔に苦痛の色が宿った。頭に血が上り、がんとバットを振り下ろす夕霧。

「一瞬でも凍らせられたのはお前だろ、このデカブツ！ リヴィを離せ！」

少しでも気をそらせればと、バットで殴りつける。全力を出しても、鱗に傷一つつく気配もない。トーガも剣を鱗に押し付け電流を流そうと試みるが、まったく無駄な行為のようだ。

『っは、なんだそれは！ 痛くも痒くもないわ！』

「うわあああ！」

水蛇は胴体をくねらせ、二人を吹き飛ばした。

夕霧は木に激突し、一瞬息ができなくなるが、なんとか、生きている。

「あんなやつ、倒せるか……？」

呟く夕霧。今までの敵とはレベルが違う。できることならば逃げ出したいが、リヴィが捕まっている。トーガは……気絶。

ソワレだって危ない。いつ蛇にぱくつとやられてしまつかわからないのだから。

……戦うしか、ない。バットを握りしめる夕霧。先程水蛇の鱗を殴りつけたせいで、ひびが大きくなってしまった。しかし、彼女の武器はこれしかない。これで、水蛇を倒すしかない。

木の陰から蛇を覗き見る夕霧。

水蛇はリヴィを締め付け、苦しむ顔を眺め楽しんでいる……夕霧のことはまったく考えていない。トーガのように気絶したと考えたのだろう、人間も舐められたものだ。

夕霧は必死にできることを考えた。

水蛇にできなくて、自分にできること。戦略は常に自分が有利になるように考えるものだ。

まず、最悪でもやらなければいけないことは、リヴィを取り返すこと。気絶したトーガを回収すること。ソワレは……。夕霧が辺りを見回すと、既に身を隠していた。下手に動かれるよりも都合がいい。

よし、と作戦を思いつく夕霧。ぶんぶん飛び回り、リヴィイから意識を逸らさせる。

思いついたら早かった。大蛇の頭の周りを旋回し、挑発し、蠅になった気分と笑う夕霧。

「お前みたいな奴、ソラニテが出る幕じゃないんだよ！魔法も使えないような私で十分だ！」

元の世界で培った、ネット印の煽り技。

調子に乗った水蛇には良く効いたようで、尾の力が緩み、大蛇の目が夕霧を睨みつける。

一瞬、体の働きが停止するほどの恐怖を与えられた夕霧は、あちらから見えないように、高度を下げて木々に隠れる。

『五月蠅い……まずはお前から殺してしまおう』
ずるっ……ずるっ……

沼から這い出る水蛇、それと同時に鼻が曲がるような悪臭。長いこと泥沼に姿を隠していたせいで、体に付着していた泥水が腐ったのだろう。予想外の展開に、夕霧は焦りを隠せない。

大蛇は大きく口を開け、紫色の液体を吐き出した……木が溶ける……毒だ。

『この私の毒で、骨の髄まで溶かしてやろう』
恐怖に夕霧の頬がひきつる。死ぬかもしれない……生まれて初めて、強くそう感じた。

バットを握る手に力が入る。

『お前をずたずたに切り裂いてやる……内臓を貪って……血を啜って……』

ズル……ズル……

体を引きずる音が、夕霧の耳にやたら大きく響く。

奴は動物なのに鼻は利かないようだ。

まあ、自分の体から彼女の判断力を鈍らせるほどの腐敗臭をさせているのだから、仕方ない。

『どこだ……どこだ……』

木の陰から大蛇の姿を窺う。

軽く十メートルはある巨体に、貫通したらひとたまりもないような立派な牙。

黒と紫の禍々しい胴体から尻尾にかけてはしなやかに撓り鞭のように彼女を叩きつけるだろう。

勝機は——ない。

夕霧がが持っているのはひび割れたバット一本だ。体も牙も臭気でさえも味方に付けている水蛇を相手にに何ができると言えよう。

視線を下に落とす。怖い。

大蛇が毒を撒き散らし、周囲の木々を溶けさせている。ジャージしか着ていない夕霧なんかが触れたら、即効あの世行きだ。狐の防具だつて毒には勝てないだろう。大蛇は毒たまりの上を悠々と歩いている。あの分厚い鱗には屁でもないのだろう。

禍々しい紫色の液体があちらこちらに水たまり状に溜まっている。それを見て、ぴんと来た。

——勝てる！

一番近くにあつた毒たまりに近付き、バットにその液体をべつたりと付けた。ひび割れたところにどろりと流れ込む毒。シュワシュワとバットを溶かし始めたため、急いで仕事に取り掛からないといけない。

夕霧は大蛇の前に姿を現す。

『とうとう観念したか！』

飢えた大蛇は嬉しそうに彼女に向かって大口を開けて突撃してきた。

「くっらえ！」

バットを口の中につっこむ。鱗に毒が効かないとはいえ、体内に入ってしまったば回らないはずがない、生き物なのだから。

自らの毒でやられるとは思ってもみなかつたであろう大蛇は、驚きに目を見開いた。

しかし、それだけ。

やはり、こいつ自身の毒は効かないのか——絶望に包まれる。口から毒を吐いていたのだ、これは納得の結果だったのかもしれない。牙は夕霧の目と鼻の先。毒付きバットを水蛇の口に放り込むために、自ら死に近づいてしまうというミスを犯した。

せめて元の世界で死にたかった、なんて思う夕霧。……しかし。

『ぎゃあああああああああ！』

断末魔の叫び。

水蛇の長い体がのたうちまわり、氷の混じる沼の表面を荒らす。いつの間にかリヴィイは水蛇の尾先から消えている。ポカンとその姿を見つめる夕霧。

暴れる水蛇から逃げようと、ぴるぴるが髪の毛をひっぱった痛みで我に返り水蛇から離れた。

毒は、効いたのだ。粘膜が焼けただれていく臭いがする。

少し離れて見ると、ものすごい光景だ。

巨大な水蛇が凍った沼で暴れまわり、木々を倒す。

水蛇の勢いが段々となくなっていき、体が地に伏した。そして目から光が消える。

勝った、のだ。

呆けながら水蛇の亡骸を眺めていると、トーガが泣きながら近寄ってくるのが夕霧の目に入る。

ソワレも、あの呑気なお嬢様が、少し青ざめているようだった。

そこではつと気付く。

リヴィイだ！ 尻尾に捕らえられていたリヴィイは、この調子だとどこかに叩きつけられているだろう。

最悪、死んでいるかもしれない、と夕霧は血の気が引いていく音を聞いた。

「リヴィー！ リヴィイ、返事しろー！」

水蛇の尾の辺りを飛び回り、リヴィイの姿を探す三人。

しかし黒い髪の毛に黒いロープのリヴィイが目立つのは街中だけだ。この薄暗い沼ではまったく目立たない。

もしかして、凍った沼の底に沈んでしまっているかも……

ほとんど悪い方向に走っていく思考を振り切るかのように、スピードを上げる。

しかし、ソラニテの魔法も万能ではない。

飛行魔法はだんだん力を失ってゆき、とうとう浮遊していることもままなくなってしまうた。

「リヴィー——！」

声を限りにして叫ぶが、返事はない。

必死に足を動かすが、飛んでいた時程の距離は一気に動けない……必然的に、探すペースが落ちて行く。

トーガもソワレも、リヴィーを探すのに必死だ。

「リヴィー！ リヴィー！ リヴィー！」

「リヴァイアさぁーん！」

ただでさえ薄暗い沼が、陽が落ちてくるとどんどん視界が悪くなり、とうとう十センチ先も見えなくなった。それでもリヴィーは見つからない。

「今日はあ、もう無理よあ……明日ならあ、お父様に手伝ってもらってえ、見つけ出せると思うのお……」

ソワレが疲れ切った様子で言った。

確かに、今日はもう見つかる見込みはないだろうしソラニテに助けてもらった方が効率的だ。

しかし、

「私はもう少し探してみるよ」

夕霧はこういう時、頑固だ。

普段はそこまで熱い人間ではないけれど、誰かがいなくなってしまうと、いてもたってもいられない。情に厚いのだ、彼女は。

「お、オレも！ リヴィーが死んじやうかもしれないっていうのに、オレだけ帰れないよ……オレだって心配で死にそうなんだ。」

弱弱しく微笑むトーガ。

当然だ、数日一緒にいただけの夕霧よりも何年も過ごしてきたト

ーガの方が心配だろう。

「……そんなのお、私だって帰れないじゃない……」

ソワレも、少し電波が入っているとはいえ基本的にお人よしだ。

「いや、ソワレは戻ってほしいかな。ソラニテに報告して、明日リヴィを……」

「その必要はない」

聞き覚えのある声と共に、沼が一気に明るくなった。

——ソラニテだ。

彼と共に、数人の有能な魔法使いや魔女が沼の周りに浮いている。

「御苦労だった、我が姪夕霧と、その仲間トーガ、リヴァイア……」

そして我が娘ソワレ。お前らのおかげで我々の街は救われた！」

両手を広げるソラニテ。

夕霧の表情が驚きに満ちる。

ソラニテが何か大演説をしているが、彼女の耳には入らない。

夕霧がソラニテの姪だとすれば、つまり両親は盗賊と踊り子ということになる。

しかしそのポジションはリヴィイのものだ。

それに、夕霧は異世界から来たのだ。元々この世界にいる存在ではない。

彼女の頭の中が、ごちゃごちゃになる。

「お父様あ！ 御託はよろしいですわあ、早くリヴァイアさんを！」
見てらしたんでしょお、とソラニテを睨むソワレ。

「彼なら救出済みだ。無事だよ、私たちは全部見ていた。……君の戦い方は、お父さんそっくりだ、賢く、強く、勇気がある」

すう、とソラニテが夕霧の傍に移動する。

「私……私は、違う世界から来たんだ！ 異世界の住人である貴方と血が繋がっているはずが——」

ここで一つの仮定が、夕霧の脳裏をよぎった。

ソラニテは、大魔法使いだ。

異世界に人を飛ばすなど、容易いのではないか。

盗賊と愛し合っていた踊り子を、何らかの理由であの世界に隠した。

そう考えれば、つじつまが合う。

それに、ソワレ。

夕霧とそっくりな姿をした、ソワレ……

彼女がソラニテの顔を見上げると、優しく微笑んでいた。

「君はお母さんに似て聡明な子のようだね。その通りだよ、君の考えている事は正しい。私が君と君のお母さんをあの世界に送った」

また君が戻ってきているのはどういうことかわからないがね、と微笑むソラニテ。

しかし夕霧の顔は浮かない。リヴィの事が心配なのだ。彼女がその二人の子供で、この世界の住人だとすれば、リヴィは。

盗賊と踊り子が自分の親だと思うことで孤児だというコンプレックスを解消していたリヴィは。

「リヴァイア君のことが心配かな。大丈夫だよ、彼には私から言うておこう。今、君たちがすべきことは……」

ソラニテの手が彼女たちの眼前にかざされる。眠りの魔法だ。

「ゆっくり、おやすみ」

『ゆうちゃん、ゆうちゃん！』

若い女性が森の中を一人歩いている。ゆうちゃん、という誰かを探しているようだ。

誰か……いや、彼女が探しているのは幼いころの夕霧だ。

夕霧がゆうちゃん、なんて呼ばれていたのは遠い昔、十五年以上前だ。

女性は見覚えのある場所に辿りついた。

『もう、ゆうちゃんはこの切り株が大好きね。ほら、帰るからおいで』

ヴィペールにある切り株。夕霧とソワレが出会ったあの場所だ。そこで、まだ幼き日の夕霧が遊んでいた。

『夕霧。夕霧』

今度は、男の声だ。しかも、つい最近聞いた声。これも記憶だろうか、と夕霧はぼんやりと声に意識を向ける。

『夕霧、夕霧』

……違う、と夕霧は、今度の声が記憶ではないことに気がついた。ソラニテの声だ……ふわふわした意識の中で、彼の声を頼りに、彼女は自分の体へ戻る。

背中が痛い、と感じる夕霧。眠りから覚め、感覚が戻ってくる……暖かくて、緑の香りに包まれている、そう、ここは……あの切り株。

「起きたね」

ソラニテは魔法でオレンジジュースの缶を浮かせ私に渡した。

「飲みなさい、喉が渴いただろう。話がある」

プルタブは既に開けられていて、夕霧はそのまま口を付けて飲み干した。大分、水分が足りなかったらしい。

「ここに連れてきたのは正しかったかな。君はよく家を抜け出してはその切り株で眠っていた……たった三歳の子供がだよ」

よく一度もモンスターに襲われずに済んだ、と笑うソラニテ。確かに、ここは普通にモンスターも現れるだろうし危険だ。

「事が起こったのは君が四歳になる直前だ。勇者が尋ねてきた。君の母親はどこだ、とね」

ぞわり、と夕霧の背筋に悪寒が走る。

ソラニテの口調が、憎しみや悲しみ、その他もろもろの負の……いや、腐の感情を帯び出したのだ。

「私は言った。あいつなら夕霧を迎えに行っている、と……君が来るところなんてここくらいだとね」

後悔しているのがわかる口調。言わなければよかった、と。

夕霧は何も言う事が出来ない。ソラニテの放つ空気が、彼女の声を奪っていた。

「そしてあいつはいつも通りの笑顔で……ありがとな、と言った。

私は特に何も考えずに妻と談笑していた。あんなことになっているとは知らずに」

ギリ、と齒を食いしぼる音が聞こえた。

「あいつは妹を襲おうとした。この場所で。君が寝ている、その場所です」

衝撃が走る。

勇者が、盗賊と好き合っている踊り子を。子供までいる踊り子を。しかも、夕霧が気に入っていた、今でも安らぎを感じているこの場所です。

「しかしそれは未遂に終わった。君のおかげだ、夕霧」

ソラニテの雰囲気が少しだけ和らぎ、彼女はやつのことで声を出すことができた。

「私の……？」

夕霧は思い当たるさまざまな勇者阻止法を考える。しかし、当時三歳の自分にできることといったら、泣き叫ぶくらいしか思い浮かばない。彼女はソラニテの次の言葉を待った。

「君はお父さんの才を受け継いでいるようだ。彼は盗賊という肩書きを好んで使っていたが、本当は召喚術の使い手だった——一種の魔法だよ」

地面にガリガリと魔法陣を描きだすソラニテ。夕霧はそんなの三歳児にかけるわけがないじゃないか、と疑いの目で彼を見る。

「私はこの陣を描き、呪文を唱えてやっとな小さな召喚獣を出すことができる。しかし、君のお父さんは陣や呪文に頼らず思いつままの召喚獣を出せた……君もだよ。」

ソラニテは、かつての友を懐かしむように笑って見せる。

「お母さんが隣で嫌がっているのを見て、君は勇者を悪者だと勘違いした。仕方のないことだ、勇者は君が産まれた時に一度顔を見せたつきり妹に会わなかった」

彼の話聞きながら、魔法陣をそっくりそのまま描き写す夕霧。構わずソラニテは続けた。

「君は勇者を倒すべく当時の君の二倍もの大きさのイフリータを召喚し、見事に勇者をお母さんから遠ざけ、君とお母さんは逃げ帰ってきた。そしてその話を聞いた私は君とお母さんを勇者の手の届かぬところ……つまり君が住んでいた世界に送った。大変だったよ、あの魔法は」

ふう、とソラニテはため息をつき夕霧に目をやった。

「で、君はどうしてこの世界にいるのか説明できるかい？ 気が付いたらここにいた、だとかわからないのなら無理はしなくてもいいが……」

迷う夕霧。神が飛ばした、なんて言っただけで信じてくれるものかどうかが。横でまだ眠るぴるぴるの頭を撫で、考える。

しかし、ソラニテの話も突拍子の無いものだ。きつと、こちらの話も信じてくれるだろう……そう思った夕霧は、素直に話すことにした。

「私は、トーガを立派な勇者にするために神を名乗る者にこの世界につれて来られました。何故私だったのかなどの詳細は知りませんが母は私にこの世界の話はしなかったし、神もしませんでした」

ふと、夕霧は神がこのことを知っていて自分をここに送ったのだろうか、と考える。

ならば随分と意地悪な話だ。彼は夕霧が元の世界に戻る前提で話をしていた。最初から元々はこの世界の住人だということを教えておいてくれてもよかったのではないか。

……信じなかったかもしれないけれど、と自嘲気味に笑う夕霧。社会不適合者なのは重々承知していたが、まさか世界不適合者だったとは驚きだ。確かに、あの世界でこの世界のように暴力をふるってしまっただけは問題になる。それが夕霧を苦しめた……つまり、あの世界で生きていくには夕霧の力は大きすぎたのだ。

それにしても、軽く引き受けた話が随分と大きな話になってしまった……なんて苦笑いする夕霧。そしてそこで、もう一つ大きな問題があることに気付く。

弟の薫の事だ。水蛇に止めをさし、今までも大活躍してくれたバツトの持ち主である。

あいつも、世界不適合者なのではないか。

「君の考えている事はわかるよ。弟のことだろう」

姪っ子の考えくらいお見通しさ、と笑うソラニテ。

「君が眠っている間に、失礼だとは思ったのだが申し訳ない、妹のことが気になり少々記憶を覗かせてもらった。元氣そうで何よりだよ……元氣に第二子まで産んで。彼もまた世界に適合できないことは知っているだろうに」

やっぱりそうなのか、とため息をつく夕霧。

薫も夕霧と同じで有り余る力を持て余していた。男の子だから特に、友人とじゃれあっているだけで怪我をさせてしまう。

いつしか、弟の笑顔を見る回数が減っていたことを、夕霧は気付いていた。

「……勇者って、どうなったんですか」

彼女にとって、諸悪の根源ともいえる勇者だ。ソラニテは仕返しでもしにいくのかと、慌てて、

「死んだよ。君ら一家を飛ばしてすぐ、自暴自棄になり自殺した」と言った。

「じゃあ、私の家族をこの世界に戻すことって……できますか」

夕霧のまっすぐな目。ソラニテはううむ、と考え込んだ。

「わからん。しかし、調べてみよう」

約束だ、と笑うソラニテ。

そこまで確認すると、夕霧はごろん、と切り株に寝転んだ。

完全にキヤパシティを超えているのだ、実際。彼女の頭は混乱し、必死に情報をまとめ自分を納得させようとフル活動している。

ソラニテはそんな彼女の心中を察したのか、いつの間にか消えていた。

まったく漫画みたいに色々な事が重なる。

……いや、違う。と、夕霧は目を閉じた。

すべてが揃っていたパズルが、一枚だけ抜け落ち不完全になった世界に、残りのピース（夕霧）がはめ込まれたことで、一つの物語ができた……そういうことだ。

なら、受け入れるしかないだろう、元々これは決まっていたことなのだ。目を開く夕霧。

緑の世界が視界を満たす。

「……イフリータ」

何も起こらない。

けれど、体中の血がざわめくような、不思議な気持ちになる。

そうか、と夕霧は笑う。私はこっちの世界の人間なのだ、と。

リヴィヤトーガは、さっきのソラニテの口ぶりからして元気なのだろう。

でも、悪いけどもう少しだけ、ここにいさせてほしい、きっとここが私の故郷なのだろう、と夕霧。

ヴィペールというこの樹上街が。

ならば少しくらいゆっくりしていたって、いいだろう。

夕霧は頭の中を整理するために瞳を閉じた。

V S・巨大水蛇 ヴィペールの街3

夕方。

緑の木々が赤い夕陽に染まり、夕霧が眠る切り株も赤い。

そこに近付いていく二人の影。トーガとリヴィイだ。珍しくリヴィイが刀を持っている。

水蛇が飲みこんでいたものだ。毒で溶けた夕霧のバットを発見したりリヴィイは、この刀は売り払わずに夕霧に渡そうと取っておいたのだ。

しかも、この刀は毒蛇が飲みこんでいただけあり、切った物に毒を与える付与要素がある。きつと即戦力になるだろう。

眠り込んで目覚めない夕霧の頬にぺちぺちと刀を当てるリヴィイ。

「ちよ、リヴィイ！ 危ないよ……」

毒にかかったちゃったらどうするのさ、と怒るトーガ。

「大丈夫だよ、切らない限り毒にはかからないから」

起きないなー、とぺちぺちするリヴィイ。ぴるぴるも中々目覚めない。よっぽど怖かったのだろう。

リヴィイが少々飽きの色を見せ始めた時、夕霧の目が開いた。ぱちちりと。

「うわあああああああああああああ！」

叫び声と共にリヴィイを跳ね飛ばす夕霧。今の勢いなら水蛇も一発でひっくり返せただろう。

「っ……耳が……」

跳ね飛ばされたリヴィイは、放してしまった刀を取り戻ってきた。

トーガは耳をちゃんと塞いだようで、苦笑いを浮かべていた。

「まったく、本当に君は男耐性ないよね……異世界人じゃなくなっただんだし、僕と恋愛してみる？」

にやり、と意地の悪い笑みを浮かべるリヴィイ。

「慎んで遠慮します」

リヴィはつまんないの、とぼやく。

一気に目が覚めた夕霧は、リヴィの親が今まで信じてきた二人ではないということが発覚してしまったことを思い出し、ちらりとリヴィの表情を窺う。

いつもと変わらない。

変わったことと言えば……魔法使いのリヴィが、刀を持っていることくらいだ。

「ねえ夕霧、夕霧は刀って使える？」

トーガだ。

「多分ね」

すると、リヴィがずい、と持っていた刀を差し出した。

「じゃあ、使うといいよ。トーガが大蛇の体から見つけたんだよ、これ」

夕霧が受け取り、少し振ってみるとバットと同じくらいの重さで振りやすい。

柄の部分もちょうどいい太さで握りやすく、まるで夕霧のために作られたような刀だ。

「ふうん、似合うんじゃない、様になってるよ」

「うんうん！ オレ、それ見つけれて良かった！ ちょっとは役に立てたんじゃないかな」

刀似合うって言われても……と苦笑しつつも、満更でもなさそうな夕霧。

武器がなくなってしまったところにこれはとても助かる。

「トーガ、ありがとう……リヴィも」

持ってきたのは僕だよ、とむすつとしたリヴィにもお礼を言い立ち上がる夕霧。これ、どうやって持ち運ぼうかね……と頭を悩ませる。

「次はどこに行くんだ？」

「決まってるじゃないよ、蛇が予想以上に色々なものを飲み込んでいてね。ついさっきまで作業をしていたんだ」

にやり、とリヴィが笑う。そうかそうか、大漁だったんだな、と夕霧。トーガは疲れたのか、少しげっそりしている。

「もう一晩だけソラニテのところに泊めてもらって、明日近くの村に行ってみようって話してたんだ」

何も無ければいいなあ、と思っているのが見え見えなトーガ。

今回もトーガなりに頑張っていたことだし、次は実践でも大丈夫ではないだろうか。それに、剣に対して刀を入手した夕霧。手合わせなんかもできるのではないか……なんて考える。

「夕霧ー！ 何してるんだよ、置いていっちゃうよ？」

「今行くよー！」

考えるより動け、だ。夕霧は明日にでもトーガの実践練習の相手をしてやろうと心に決めた。

「随分と立派な刀を手に入れただな、夕霧。似合っているぞ」

ソラニテは夕霧たちが帰るなり、風呂に放り込んだ。相当汚れていたのだろう。そして夕霧が風呂から上がり、ぴるぴるを乾かしているところにやってきた。

「ありがとう。刀似合ってるっていうのもちよつと複雑だけど」

わしわしとぴるぴるの水分を拭き取りながら言つと、ソラニテがふつ、と笑った。

「こうして風呂上がりの君を見ていると妹のことを思い出すよ。元気にしているのかな……あの子もしょっちゅう小動物を拾ってきていてね」

少し遠い目をしたソラニテは、夕霧の返事を待っているようには見えなかった。きっと自分の思い出に浸っているのだろう。

「そうそう、君にプレゼントがあるんだ。私が作ったものだから、そうそう壊れはしまいよ。」

「え？ ありがとうございます」

ぴるぴるが赤くならないように優しく細心の注意を払い拭いていた夕霧は、ソラニテが差し出した物を不思議そうに受け取った。

「その刀をしまうといい。そのまま持ち歩くのは危険だし、刀も悪くなってしまう。それに何より、君が間違っただけを怪我をしてはいけなからね。大蛇の皮をなめして君の服の色に合わせて作らせてもらったよ」

なるほど、と頷く夕霧。なるほど、これは便利だ。水蛇の刀は切れ味がいいので、戻ってくる途中にも色々な草や木を切っては毒で犯していた。

「助かります」

「さて、では髪の毛をとかして広間に来なさい。……宴会だ！」

宴会は昨日の夜から続いていたようで、だいぶ出来上がっている人が多かった。

これまで亡くした娘たちを悼む人もいたようだが、一晩も騒いでいればそれに交わり娘たちの写真を拝む人はもう少ない。

……その数少ない人の中に、トーガ、リヴィ、ソワレもいた。

「夕霧、君はお風呂も長いんだね」

少し呆れたように言うリヴィだったが、まだ髪の毛が湿っている。

「あらあ、リヴィアさんだつてえ、今来たばかりじゃなあい」

ソワレのナイスツッコミに顔をしかめるリヴィ。

「夕霧よりは早かったよ」

つん、とそっぽを向く。そんな様子を見てトーガは傍で苦笑い。

「楽しんでるかな」

いつの間にか現れたソラニテが飲み物を持ってやってきた。宙にたぐさんの飲み物を浮かせまるでマジック人間だ。

「君たちのおかげで、子のいる家庭に笑顔が戻ったよ。……女の子が増えたかな」

生贄にさせないため、男の子として育てられていた女の子も、普通に女の子らしい恰好で宴会に参加しているようだ。

「……おや、何か来たようだ」

ふわりふわりと飛んでくる何か……小さい筈。

ソラニテは小纂に取り付けられた羊皮紙を慣れた手つきで取り外し、読み始めるが目が文字を追うにつれて顔が青くなっていく。

「どうしたのお、お父様あ？」

ソワレが羊皮紙を覗き見ると、ソワレの顔もソラニテと同様の色になる。

「……何かあったの？」

リヴィは覗き込むことはしなかったが相当気になるらしく二人を急かした。

「ど、ドラゴンがあ……近くの山にい、住み着いたんですってえ」

「しかも炎属性ときた。ドラゴンの中でも最強のドレイク種かもしれない……私の力が及ぶかどうか」

夕霧はよくわかっていないが、とりあえずまた何かがあったのだらうと悟った。

「最強のドレイク種、なんてゾクゾクするじゃないか」

トーガの顔がひきつる。リヴィは逆境に燃えるタイプのようだ。

「しかし……いや、でも止めても聞かないのだろう？ リヴァイア君も気が強そうだし、何より夕霧はクリーズとリュクスの娘だ。……

……強い者に挑戦するのは、大好きだろう」

クリーズ、リュクス。

夕霧の両親の、こつちの世界での名前だろう。あつちの世界では源氏と葵と名乗っていた。

「……大好きです」

こんなに血が騒ぐのは、きつとこの世界の住人だということを感じたからだ、なんて思う夕霧。

「トーガ君は……苦手そうだが。まあ、勇者だからな。戦いとなれば果敢に挑むのだろう……三人に、任せよう」

そうと決まれば早く休んだ休んだ、とソラニテは夕霧たちをそれぞれの部屋へ移動させた。

呼びだしたのソラニテのくせに……と文句を言う夕霧だが、疲れていたのには変わらない。上着を脱ぎ、ベッドへ入った。

ふと彼女が周りを見渡すと、すぐ近くにベビーベッドがあった。
なぜかそれが異常に気になり、ベッドを抜け出しそれに近づく夕霧
ネームタグがついている。筆記体の文字なんて大体しかわからな
い。眉間に皺を寄せながら、彼女は名前を読み取った。

「……ゆうぎり、夕霧。私か」

本当に自分がこの世界の住人だったのだな、という実感。もしか
すると、夕霧がこの部屋に泊まったのも、ソラニテがすべて仕組ん
だことなのかもしれない。

それとも、わざわざベビーベッドを引っ張り出してきたのか。

どちらにせよ、このベッドに寝ていた時代の記憶なんて夕霧には
ない。明日も早いし、今は寝よう、とベビーベッドに背を向けた、
その時。

『り……え、つとー!』

誰かの声。

しかし、その声の主は現れることなく部屋には夕霧とびるびるし
かない。

「お前？」

びるびるにそう尋ねてみる夕霧だが、びるびるは一生懸命首を横
にふる。違うようだ。

気のせいだったのかもしれない。

まあいいか、と疲れていたことは確かなのでもう一度ベッドに潜
り込むと、夕霧とびるびるは今度こそ眠りの世界へと落ちて行った
……

VSDラゴン！ ドウラーゴの戦い

朝。

顔に朝日を浴びたぴるぴるが目覚めると、既に夕霧はベッドにいなかった。

浴室からシャワーの音が聞こえる。人間ってやつは朝にも風呂に入るのかぁ、なんて思うぴるぴる。

まだ少し眠い彼は、夕霧が上がってきたら起きようともう一度ベッドに入った。

すう、すう、と安らかな寝息。

しばらくして、浴室からの水音が途絶える。

ちやぶん、と音がしてそれっきり。

ぴるぴるは目覚めない。

そしてそのまま、ぴるぴるから数十センチ離れたところに日溜まりができた頃。

「夕霧、いい加減起き……いない」

リヴィだ。ノックもせず部屋に入った彼は夕霧の姿を探す。しかしベッドにいるのはぴるぴるだけだ。

「……ぴるぴる」

ん、と寝ぼけ眼をこすりながら目覚めるぴるぴる。

「夕霧は？」

先ほどのように辺りを見回し、ぴるぴるは思い出したかのように浴室を指さした。

「……お風呂か」

はぁ、とため息をつくりヴィ。

さすがに浴室に入るのは忍びない。というよりもさすがに夕霧も怒るだろう。

「あとでまた来るよ」

お風呂にいるなら起きてるんだろっしね、と部屋を出る。ぴるぴる

はひとりでもつまらないのでリヴィの肩に飛び乗った。

「君がいなかったら夕霧は心配するんじゃないかな？ まあ、そうしたら急いで出てくるかな」

夕霧の部屋の隣はトーガだ。しかし彼は既に起きて、ソラニテの蔵書にかじりついている。彼は意外に読書好きで、珍しい本が大好きだ。その点に関して、トーガとリヴィは似たもの同士といえるだろう。

「……お腹すいてるよね」

リヴィがふと口にした言葉だ。ぴるぴるはこくこくと頷く。

「じゃあ、何か作ってあげるよ、かき氷なんてどうだい？」

あまり嬉しそうな顔をしないぴるぴるを見ると、リヴィが一言、

「……僕、かき氷くらいしか作れないよ」

ぴるぴるの朝食はもう少し先になりそうだ。

遅い。

トーガも蔵書室から出てきたというのに、夕霧は何をしているのだろうか。

あれから、リヴィは時間を置いて二回ほど夕霧の部屋へ行ったがいなかった。既に上がってどこかへ行ったのだろうかとも考えたが、その割には部屋の中はまったく変わった様子がない。

とすれば、残るは……

「お風呂場で寝てるのかもしれない……」

トーガだ。リヴィもその答えにたどり着いていたようだが、二人とも男だ。ちなみにぴるぴるも雄。

入っていつて起こすわけにはいかない。

「ソワレに頼もうか」

ということ、ソワレを連れてきたトーガ。

「まあ、私まだ眠いのにい……」

ねばすけは血筋らしい。ソワレは眠そうに目をこすりながら夕霧の部屋へ入っていった。

「夕霧？ あ、お風呂だっけえ」

ぶつぶつとひとりごとを言いながら浴室に入ったソワレ。

「きゃああああ！夕霧、恥じらいを知りなさい！」

なにがあつたのかと見に行きたいが行けない二人。

「そ、ソワレ？ ！ わわわ、ごめん！ 出る、今出るから待って！」

ばしやばしやと水音が聞こえて、そのすぐあとにソワレが部屋から出てきた。

「どうしたの？」

トーガが不安そうに尋ねる。

「夕霧つたらあ、女の子なのに大股開きでお風呂に入ってたのお。

私い、びっくりしちゃったあ」

なんとも言えない気まずさが二人を包んだ。

それから少し遅れて、中からばたばたと準備をする音が聞こえて、夕霧が飛び出してきた。二人の顔を見るやいなや、

「すいませんでしたあああああ！」

ぺっこり九十度、謝罪の言葉を口にする夕霧。

髪の毛を乾かすどころか櫛も通していないように頭はボサボサ、ジャージの上着もきちんとしていない。刀も背中にかけられるように紐を通したというのに、右手に持ったまま。焦った感じがありありと見て取れる夕霧の格好に二人は、

「だ、大丈夫だよ、夕霧頭上げて？」

「……次はないからね」

と、怒る気が失せてしまった様子。

それを見届けたソワレはふわあ、とあくびを一つして、

「私はあ、もうちょっと寝るわねえ。おやすみい」

と、自室に帰っていった。

ぴるぴるは夕霧の肩に飛び乗ると、彼女の髪の毛のハネを一生懸命直し始める。

「あ、ありがとうぴるぴる」

よしよし、と頭を撫でた。

「……出発がだいぶ遅れたね。また野宿かな」

はあ、とため息をつくりヴィ。

「あ、ソラニテが移動呪文かけてくれるって言うてたから、ソラニテのところ行こう！」

トーガの言葉で、一行はソラニテの部屋へと向かった。

服装を整え、刀もしっかり背中にかけた夕霧は、この村ともお別れか……と少し感傷に浸る。

数日しかいなかったが、ここが自分の故郷なのだ。仕方ないのかもしれない。

ソラニテの部屋をノックしようと、トーガが手を出すと。

「夕霧のねぼすけは母さん譲りで私譲りだ。許してやってくれ」と、ドアが開いてソラニテが笑った。

だいぶ眠そうだ。

「寝てしまつては起きれないから、少し眠そうな顔をしていて申し訳ないが起きていさせてもらったよ。さて、では君たちをドウラーゴの村へ送ろうではないか」

ソラニテはソワレとまったく同じ仕草で目をこすり、呪文を唱え始める。

やはり強い魔法のようで、少し詠唱に時間がかかるようで夕霧にはまったく意味がわからなかった。

「ドウラーゴ山」

三人の体が光る。

ソラニテが、しまった！ という表情をした。

トーガとリヴィも青い顔だ。何もわかっていない夕霧とびるびるは、魔法すごいなあ、なんて暢気なことを考えている。

時既に遅し。

三人は、ドウラーゴの村ではなく、そのすぐ近く、ドラゴンが出たというドウラーゴの山に飛ばされてしまったのだ。

ごつごつした岩場。世界が赤い。溶岩が地表に出そうになっている。

卵でも乗せたら一瞬で焦げた目玉焼きになってしまいそうだ。

そんな所に三人と一匹は飛ばされてきた。

「熱い！ 暑いじゃなくて、熱い！」

夕霧が叫ぶ。ちりちりとジャージが焦げているような気さえする。

びるびるは落ちた瞬間焼き狸だろう。美味しく頂かれないためにも彼は夕霧にしがみついた。

「夕霧」

リヴィだ。

珍しくぽかん、というアホ面を晒している。

「ゆ、ゆ……」

トーガは夕霧の名前すら呼べていない。顔が恐怖でひきつっている。「なんだよ」

眉間に皺を寄せ答える。二人の視線はどうやら夕霧の後ろを向いているらしい・・・そつと後ろを向く夕霧。

黒いつぶらな瞳と目が合った。

そしてその瞳とは対象的に、大きくてごつごつした赤い鱗。

もしかして、と夕霧の頬を冷や汗が伝う。

「……ドラゴン」

実物は初めて見る彼女だが、本能がこう告げている。逃げろ、と。

大きく吼えたドラゴン。山が轟き足下が揺れ、岩が割れて溶岩が吹き出す。

「逃げるよ！」

リヴィの一声で走り出す三人。

後ろで飛翔する音が三人の耳に届いたが、振り返る暇はない。

少しでも遠く、遠くへ、ドラゴンの鋭い爪や炎が届かないところまで。

背後からゴォ、と熱風が押し寄せる。

炎だ——もうおしまいだ、そう思ったが、リヴィが厚い氷の壁を作り出し炎を遮った。ドラゴンはその壁にぶつかり更に吼える。

「さすが」

聞こえたかどうかはわからないが、夕霧が呟いた。

「僕だからね」

ちゃっかり聞こえていたようである。

トーガは何も言わない。ひたすら足を動かしている。しかしその表情は何か考え込んでいるようにも見えた。

少し平坦な登山道に出ると、ドラゴンの翼音が聞こえなくなり振り返ると、もう追ってきてはいないらしい。

「はあ……はあ……もう、無理……」

刀を降ろすと、ごろんと寝ころぶ夕霧。

「とんだ災難だね、ソラニテが行き先を間違えた上、飛んだところにドラゴンがいるなんて」

リヴィも肩で息をしている。

「……………」

トーガは少し息が切れているだけで、ドラゴンがいた場所を見つめていた。何か、思い悩んでいる様子だ。

しばらく休憩して、三人の体力が戻ってきた頃、リヴィが、

「逃げ切れたことだし、そろそろ行ってドウラーゴの村に降りようか。準備もしないといけないし、あのドラゴンはやっぱり一筋縄ではいかなそうだよ」

リヴィと夕霧は下の方に向かって歩き出す。

しかしトーガはぼーっと山の方を見つめ、動かない。

「トーガ？」

夕霧が声をかけると、トーガははっとしたように二人に駆け寄ってきた。

「ご、ごめん。ちょっと疲れちゃって」

と、苦笑い。いつもなら、こんな危険なところにいるときは一刻も早く立ち去りたがるトーガだ。どおうしたのだろう、と心配になる夕霧。

しかし、尋ねてもきつと教えてくれないだろう……と悟った夕霧は、何も言わずにリヴィの後に続いた。

V Sドラゴン！ ドウラーゴの戦い2

村に着いてからも、トーガの様子はおかしかった。

何がおかしいって、ドラゴン討伐に明日早速行こう、とリヴィが言ったときにも、うん、なんて少しも怖がるそぶりを見せなかったのだ。

心ここにあらず。まったく、その言葉がこんなにもぴったり合う状態は見たことがない。

夕霧はリヴィとトーガの様子について話し合うが、これと言った意見は出なかった。そもそも、長年誰よりもトーガの近くにいたリヴィに心辺りが無いのならば、数日一緒にいた夕霧にわかるわけがないのだ。

そんな二人の心配を余所に、トーガはぼんやりと空を見つめている。買い物を終え、宿へ行くと既にソラニテが話を通してくれていたらしく、一番いい部屋が用意されていた。

こんな若輩者が・・・？と、宿の主はじろじろと不躰な視線を投げつけてくるが、トーガの心配をする二人はそれに怒る余裕もない。しばらくして、食事の時間だと呼ばれた。

「これおいしいね」

こちらの世界の食べ物なんてよくわかっていない夕霧でも、上等な食事であることがわかる。なんと、ぴるぴるの分も用意されていて、ソラニテの心配りに感謝した。

夕霧はこれが元はどんなモンスターだったのかをなるべく想像しないように食べる。一度、見覚えのあるハサミが出てきたときは少しげんなりしたが、出された物は残さないと言う彼女の信条のもと、思い切って口に入れた。

「夕霧、いくらおいしくてもそれは飾りだよ」

リヴィの言葉にシヨックを受ける夕霧。

「早く言ってくれよ・・・」

堅いハサミを噛み砕こうとして、がりつと歯をやられてしまった。幸い丈夫な歯をしていたからか、欠けてはいないらしい。

カニみたいなもんか、とハサミを皿の端に置くと、何かのステーキに取りかかる。使い慣れないナイフとフォークを使って、肉を切る夕霧。

「・・・使い慣れてないね、君の国ではどうやって食事をしていたの？」

リヴィは今まで気になっていた質問をした。

「箸だよ。知ってる？」

二本棒があつて、それを使って食べる、と夕霧は箸を使うジェスチャーをした。

「・・・はし、ねえ。初めて聞いたよ。そのうち君の国の食事を食べてみたいな」

ぴんとこないようだが、少し興味を持ったらしいリヴィは目で夕霧に作つてよ、と訴える。

しかし夕霧の料理レベルなんて子供に毛が生えたくらいだ。そこまです上手くはないが、作った物が炭になったり毒煙を出したり爆発したりはしない。普通すぎておもしろくないのだ。そもそも、

「材料がまったく違うからね・・・」

この世界の食べ物は、元の世界にはいないモンスターが主だ。野菜は少し似ているが、元の形はわかったものではない。もしかしたら夕霧がキャベツだと思つて食べているものが実はゴーヤのように実っているのかもしれない。

カチャカチャと、控えめな音が静かな部屋に響く。

三人で食事をしていると、一番喋るのは決まってトーガだ。

しかし、食事が始まりいただきますを言ってからトーガは一度も発言をしていない。

夕霧は少しの気まずさを感じながらも、気を使ってかのリヴィの言葉に感謝しながら話をしている。

だが、トーガは話に入ってこない。

元々あまり自分から話題を振ったりしないリヴィに、話題を見つけるのが不得意な夕霧だ。

その日の食事は、いつもより豪華だったが、味気ないものだった。

昨日は逃げるのに必死でわからなかったが、ドウラーゴの山はものすごく歩きにくい。

よくもまあこんな道を走り抜けたと感心すると共に、それだけドラゴンが与える恐怖感の凄まじさが思い出される。

山道なんて歩き慣れていないどころか、経験すら片手で数えられる夕霧は疲労が顔に出ていた。

しかしトーガはまだぼんやりしているし、リヴィに至っては気を使う気もないらしい。どんどん二人と夕霧の間に距離ができていく。

「ちょ……二人とも待って……」

ぜえぜえと息を切らす夕霧。

「あ……ごめん、ちよつと休憩しようか」

ようやくトーガが振り返る。リヴィも仕方ないな、とでも言うように立ち止まった。

「あー！ 疲れた！」

夕霧は手頃な岩に腰掛ける。だんだん転がっている岩が大きくなっていた。昨日のドラゴンがいた場所も近くなっている。

「昨日ドラゴンがいたのはもう少し先だったね」

リヴィが言くと、トーガが先の方を見つめ、また深く考え出した。

「……昨日からトーガおかしいよ。どうしたんだ？」

口について出た言葉。もう夕霧は黙っていることなんてできなかった。しかしトーガはゆっくりと首を横に振る。

「なんでもない」

そう言つて頑として譲らない。

三人の間に、沈黙が流れる。

「……行こうか。夕霧は大丈夫？」

それを破つたのはリヴィだ。

「大丈夫だ、問題ない」

キリッとした表情を作る夕霧。ぴるぴるは不安げに夕霧を見る。主人の憂鬱感を気取ったのだろう。ああ、ネットやりたい・・・なんて呟く夕霧だが、やはりトーガが心配なのだ。

しばらく無言のまま歩き、とうとう昨日のドラゴンがいた場所にたどり着く……が、ドラゴンの姿はなかった。

「熱い……」

誤字にあらず。もし巨大なガスコンロの近くにいたらこんな感じだろう、と夕霧は思う。多分もうすぐ死ぬ。なんて口走る夕霧。

「……仕方ないね。夕霧、おいで」

リヴィが手招きをする。汗だけで死にかけている夕霧とは裏腹に涼しい顔をしている、もちろん汗などひとつもかいていない。

「なんでお前そんな涼しい顔してるんだよ！」

「言わなかったっけ？ 僕のロープの中は常に十六度設定だからだよ」しれつと言い放つリヴィ。ちなみに、トーガは考えごとをすると周りが見えなくなるタイプなので、周囲がやたら暑いことなど気付いていない。

「ほら、早く。夕霧のジャージの中も涼しくしてあげるから」

救世主！ とでも言わんばかりの表情で夕霧はリヴィの傍に駆け寄った。溶けかけていたぴるぴるもすっかり元気になっている。

「リヴィ優しい！」

夕霧の頭の上で小躍りするぴるぴる。だんだん飼い主に似てきている、なんてリヴィは思った。

「本当現金な性格してるよね……ほら」

呪文も唱えていないのに、夕霧の汗ばんだ体にひんやりとした空気が纏われる。

「な、なんで呪文……？」

あまりの驚きに夕霧の言葉は後半、言葉になっっていなかった。

「一番得意なんだよね、これ。だから詠唱の手間を省くことができるのさ」

にやり、と笑うリヴィ。

「本当に天才なんだな……」

涼しさで正常な思考回路が戻ってきた夕霧は、リヴィが天才だということを変更して認識するとトーガに目をやった。

こんなに暑くて、汗だくだというのに彼の歩くスピードはまったく衰えていない。むしろ先ほどより上がっている気さえする。

「リヴィ、ドラゴンってマインドコントロールとかする？」

夕霧が導き出した答えだ。トーガの変化は、一日や二日で現れているレベルのものではない。もしあれがトーガが本心から動いているのだとしても、いつか壊れてしまうだろう。

本心ではないとすると、何者が……昨日の状態で行くと、ドラゴンと考えるのが正しい。彼はドラゴンに操られているのだ、夕霧はそう考えた。

「聞いたことないな……そもそも、マインドコントロールなんていう精神に干渉する類の技を使うモンスターは力が弱いからそっちの能力に進化するようになったんだ、ドラゴンにはそんな必要ないしね」

「なるほど……」

必死にたどり着いた答えがあっさり否定され、少し凹む夕霧。しかし今のトーガを見ている限り、そんな暇はない。

どうしたのか、はつきりさせないと……と夕霧は焦る。

リヴィも柄にもなく少し焦っているようだ。トーガをちらりと見る回数が増え、落ち着きがなくなっている。

「ここにもいない……やっぱり、もっと奥だ……」

トーガは何かに取り憑かれたかのように進む。リヴィと夕霧のことなんて気にせず、先へ先へと。

「待って」

痺れを切らしたリヴィがトーガにつかつかと歩み寄ると、肩を掴み強引に振り向かせた。

「君が何を考えているかは知らないけれど、何があったのかは教え

てくれてもいいんじゃないかな」

恐ろしい程にまっすぐな目。トーガは俯き眩く。

「……二人にはわからないよ。特にわからない」

悲しげな声。

なんのことだ、と二人は顔を見合わせる。

「あの子に会えばわかるよ。行こう、多分もう少し進んだら会えるから」

この先にいるのはドラゴンくらいだ。とすれば、トーガはドラゴンをあの子、と言った。

小さな弱い子を連想させるが、まったく理解できていない二人。

トーガは苦笑いを残して先を急ぎ始めた。

まるで、誰かを助けようとしてもしているように。

リヴィと夕霧は、意味がわからないままトーガを追いかけた。

V Sドラゴン！ ドウラーゴの戦い3

いた。

丸くなり眠るドラゴン。

「好都合だね、凍らせてしまおう」

リヴィが呪文を唱えようと息を吸うと、

「だめ！」

口を塞ぐトーガ。

予想外の行動だったようで、さすがのリヴィも驚きに目を見開いている。

「オレに任せて。考えがあるんだ。それに、あの子に害があるとは思えないんだ」

そう言い残してドラゴンに歩み寄っていくトーガ。

ぽかんとする二人。

昨日、逃げる三人に向かって炎を吐きつけてきたドラゴンに害がない、と。そう言った。

リヴィは岩場に隠れ、

「知らないよ、まったく」

とため息をつく。

「昔から吹っ切れるとんでもない行動に出るんだよ、トーガは」なんて言いつつも、命の危機があれば助けるつもりなのだろう、こつそりと様子を伺いつつ、魔法をかける準備をし始めた。

夕霧はこうドラゴンに距離があつては何もできないので、トーガの様子を眺めるだけだ。ぴるぴるも固唾を飲んで見守っている。

ドラゴンに向かうトーガは、背中 of 剣を握りしめると、なんとその場に突き立てた。何をしているんだ、と声が出そうになる夕霧。

トーガはそのまま眠るドラゴンの顔の近くまで行くと、手を伸ばし頬を撫でる。

ドラゴンはゆっくりと目を覚まし、トーガを見ると驚いて翼を開き

宙へ飛び上がろうとした。風圧でびるびるが飛んでいきそうになるが、夕霧はさすがの反射神経で彼を守る。

「待って！オレは君に何もしないよ。武器だってそこに刺さってる。お願い、話を聞いて！」

ずる、とリヴィーが滑る。トーガの作戦は、話し合いという至極平和でなんともしトーガらしい作戦だった。

しかし、ドラゴン相手にそれが通用するかどうかは話が別だ。

ドラゴンにはトーガをじっと見つめると、なんとどんどん小さくなつてゆき、最後には小さな女の子になった。

夕霧は顎がはずれそうになっている。さすがに見苦しかったのか、そっとそれを戻すリヴィー。

「そういえば、ドラゴンにも変身能力があつたね」

君と同じだよ、びるびる、と、飛んでいかなないように夕霧に握りしめられているびるびるを撫でるリヴィー。

しかしびるびるも夕霧と同じ顔をしていた。リヴィーは再びそれをそっと戻す。

夕霧の目から見た女の子は、白地に赤い大きな花柄のワンピースを着ていた。彼女の弟である薫よりずっと年下であろう。フラフラとトーガの方に倒れ込んだ女の子。

トーガは彼女を抱き抱えたとリヴィーと夕霧の元に連れてきた。

「手当してあげなきゃ」

近くで見ると、大きな赤い花を描いていたのは、女の子の血だということがわかる。

トーガはてきばきと彼女の手当を進めた。

「いつもこんなの持ってたっけ？」

夕霧がガーゼを一枚持ち、女の子の血を拭いてやる。そつとやればできなくもない。力を入れないように、そつと。

「昨日買ったんだ。オレ、この子が小さい子供で怪我してるってわかって、どうすればいいのかずっと考えてて」

村の人からしてみれば、倒しちゃうのがいいんだらうけど……と

悲しそうに呟くトーガ。

しかし、眠るドラゴンを前にするとどうしてもリヴィや夕霧が攻撃するのを見ていられなかったらしく、こうなってしまったのだという。

夕霧的にも小さな女の子に斬りかかった挙げ句毒に犯すなんていう悪魔のような所行をせずにすんで良かった、なんて思っていたところだ。

知らずに殺して、あとでわかってしまったときの翌日の目覚めはひどいものだったであろう。

「……言えば良かったのに、僕だってそれくらいの良心はあるよ」
君は僕をなんだと思っているんだい、と唇を尖らせるリヴィ。

「だって、オレがいきなりさ？ あのだらごんは小さい子供で、手負いだから助けてあげようなんて言って、リヴィは信じる？」
少しの沈黙。

「……次からは信じるよ」

ぷ、と夕霧は吹き出す。

何笑ってるの、と鋭い目線が飛んできて、慌ててきりつとした表情を作る夕霧。

手当が終わり、呆然と痛みが収まった怪我を見つめる少女は、とても不思議そうな表情をしている。

「で、君はどうしてこんなところにいるの？ 見たところ君はまだ子供のドラゴンだ。ドラゴンは自分の子供は責任持って誇り高い一族の一員として育てると聞いているけど」

リヴィはいつも通り話しかけたつもりだ。

しかし少女には怖かったらしく、トーガの後ろに隠れてしまう。少しシヨックを受けるリヴィ。

「ダメだよ、子供には優しくしないと。……君、お名前は？ お母さんとはぐれちゃった？」

さすが保育園の先生になりたいだけあって、子供の扱いがうまい。よしよし、と頭を撫でて彼女の緊張をほぐそうとしている。

「フェイ…… フェイアロウ・ドレイク。お母さんは、ここでフェイを傷だらけにして、どこかに行っちゃった。もう戻ってこないの、フェイが弱いから」

三人の間に、緊張が走る。

「……ドラゴン、特にドレイク種は稀少が荒い。子供が産まれても自分の思う強さに達していないとこうして捨てちゃうとは聞いてたけど、本当だったなんて……」

トーガは悲しそうに目を伏せた。

詳しいね、トリヴィがトーガに声をかける。

子供たちが好きだからね……と心ここにあらず、という感じで答えるトーガ。よほどシヨックだったのだろう。

でも、トリヴィが呟く。

「この子は炎も吐けるし空も自由に飛ぶことができる……子供にしては強いと思うんだけど」

確かに……とトーガは首を傾げる。どうしてこの子が捨てられたのか解せぬ、という様子だ。

「フェイが、怖がりだから……」

彼女は涙声になりつつも一生懸命言葉を紡ぐ。

「フェイは、自分より小さいモンスターでも、怖いから……それに、ママは一族の中でも特に勇敢で、ドラゴン全体で見ても有名だったみたいなの。なのに、こんな娘じゃ一族に顔向けできないって……」

そうか、と夕霧はやつと理解する。トーガはフェイに自分と同じ匂いを見いだしていたのだ。だから、あそこまで放心するまで悩んだ。リヴィもそれを理解したようで、トーガをにやにやしながら見つめる。

「な、なんだよ…… どうせオレも小さいモンスターが怖いし勇者の甥っ子なのに臆病ですよ」

あ、そういえばそうか、と夕霧。

今のリオンを治めている国王は、トーガの父親でありかつての勇者

の弟だ。レディ・サタンに誘拐されていた経歴を持つとんでもない国王だが、民衆は優しい国王を心から慕っている様子。良い国だったなあ、と思い返す夕霧。

「さて、ここにはもう用はないわけだし……帰ろうか」

リヴィがそう言つと、フェイがびくりと体を震わせた。

「帰っちゃうの……？」

一人にしないで、とフェイの瞳が訴える。

「帰るよ」

トーガが笑う。フェイを抱き上げ、肩に乗せた。

「フェイも一緒に行くでしょ？ オレ達は君を見捨てたりしないから」

一瞬驚いた顔をしたフェイは、みるみるうちにまた泣き出した。

「うん……！ フェイ、お兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒に行く……」

「！」

まったく、と呆れたようなため息をつくりヴィだったが、表情はそこまで嫌そうではない。むしろ、嬉しそうにも見える。

一人仲間が増えた一行は、意気揚々と山を降りると、ドラゴンを仲間にしてきたことに驚愕の色を見せる村人たちを笑いながら、次の旅路をどうするか相談するのだった。

VSドラゴン！ ドウラーゴの戦い4（前書き）

VSとか言いながら、まったく戦っていないドウラーゴ編。

V Sドラゴン！ ドウラーゴの戦い4

夕霧とびるびるが眠る部屋。

すうすうと寝息だけが響くその場所に、たたたた、という可愛らしい足音が近づいてくる。

「お姉ちゃん！ 夕霧お姉ちゃん！ びるびるも、起きて！」
んー、と夕霧が気たるそうに寝返りを打つ。

そんな彼女の隣で、ばたばたとびるびるが慌てて逃げ出した。

「もー！ 起きてー！」

「ごお、と火を吐くフェイ。まだ制御が完全にできるわけではないらしく、怒ると出てきてしまうらしい。」

ドラゴンの時の比ではないが、それでも火は火だ。

「熱っ」

夕霧は何事かと飛び起きる。そしてフェイを見るなり、

「うわー！ フェイが燃えてるー！」

ベッドサイドに置いてあるコップ一杯の水（夕霧は寝起き一番水を飲む習慣がある）をぶっつけた。

「ひゃあ！ 冷たい！ もう、夕霧お姉ちゃんしつかりして！ フ

エイはドレイク族なの、火はお友達なんだからー！」

なんだなんだ、と駆けつけたトーガとリヴィに一頻り大笑いされながら朝食を済ませた後、一行はドウラーゴの村を出た。

「あー、おかしい。まだ思い出すと笑っちゃうよ、ねえトーガ」

「リヴィは笑いすぎだよ。でも、フェイが燃えてるって……ぷぷっ」

トーガにまで笑われた夕霧は、いつか仕返しを誓いつつ結局焦げたびるびるの毛繕いを手伝っている。手足が短いので、届かないのだ。

「でも、お寝坊さんだから起こすのは大変だよってトーガお兄ちゃんから聞いてたのに、お姉ちゃん結構すぐ起きてくれたから、よかった」

すっかりトーガの肩車が気に入ったらしいフェイはとてもはしゃいでいる。

「今度から夕霧を起こすのはフェイにやってもらおうか」

リヴィが言くと、うん、任せて！ と返事をしたフェイだが、すぐに渋い顔になり、

「でも、毎朝お水かけられるのは嫌かも……」
と言った。

その発言がまたツボに入ったらしいリヴィはまたしばらく爆笑していた。失礼な奴め、と愚痴る夕霧。

「わー、見て見て、おっきいね、鳥さんかなあ」

フェイが空を指さす。

みんなでその指先を見ると、確かに大きな鳥のようなものが飛んでいる。

そんな感じでのほほんと一行はリオンに向かい始めた。

グリフォンを見つけだして戦うのはいいが、フェイを巻き込むわけにはいかないとトーガが言い張ったためだ。リオンなら安全に生活できる。

ヴィペールの方が近いので、そちらへ行つてソラニテの力で飛ばしてもらうことも考えたが、正直三人ともまたとんでもない場所へ飛ばされるのではないかと気が気ではなくなってしまっただろうと、その案は却下された。

「そうだ、少しリンクスの村が気になるからちょっと寄ってみようか」

リンクスの村はまた前のように戻ったのだろうか、なんて言う三人フェイにも山猫との戦いの事を語った。ぴるぴるも初耳なので一生懸命聞いている。さすがに、夕霧がバットで山猫を打ったことを聞いたときはフェイもぴるぴるも引いていたが。

VSグリフォン リンクス再び

ドウラーゴを出て二日が経ち、だいぶ三人と打ち解けたフェイ。ぴるぴるとも仲良くなり、たまにぴるぴるはフェイの頭にも乗っていた。

「さて、もうすぐでリンクスに着くね」

リヴィが楽しみだよ、と言った。夕霧もオレンジジューズの味を思い出しにやにやし始める。

「またオレンジジューズのこと考えてるの？もう、お姉ちゃんの食いしんぼ」

と、笑うフェイ。リンクスの話題が出るたびにオレンジジューズのすばらしさを語っていたのだ、仕方ないだろう。

「うるさいな、人間食えることは超大事なんだよ」
口を尖らせる夕霧。

しかしにやける表情は変わらない。もうすぐでリンクスの村に着くのだ、仕方ないだろう。風景が見覚えのあるものになるにつれて、三人は違和感を覚え始めた。

もうすぐ着くはずの村が見えてこないのだ。

「道、間違えたかな」

と、トーガ。

「そんなはずないでしょ、いつも通りに歩いてきたんだから」

この辺もリヴィの庭らしい。彼は学生時代、ヴィペールくらいまでなら一人で足を伸ばし探索をしていた。

しかし、リヴィも不安に思ったのか魔法でリンクスを探し始める。
「コークシーティオ（探せ）」

氷人形に指示を出す、人形たちは困ったように動かない。

「どうしたのさ」

リヴィは眉をひそめる。

「なあ、ここもしかしてもうリンクスなんじゃね？」

夕霧が少し青ざめた表情で、とある場所を指差す。

そこは確かに酒場があった場所だ。少し手前の広場にあった噴水の跡がその証拠。

夕霧が指差す噴水の跡は、見るも無残に破壊されている。

荒地。リンクスは、その言葉がぴつたりと似合う土地になっていた。

「一体誰がこんなこと……」

呆然と呟くトーガ。リヴィは辺りを見回し警戒心を強める。自然災害でここまでなるわけがない、誰かが故意にやったとしか思えない程にリンクスは荒れ果てていた。ぴるぴるは怯え、夕霧のジャージに入り込んでしまっている。

辺りを見回しながらリンクスだった場所を歩きまわると、フェイが街の外れに瓦礫の山を発見した。

「これ、リンクスの村の建物だったんじゃないかな……」

トーガが呟く。確かにリンクス特有のこげ茶色をした木片が多く積み上がっている。

これで確定した、リンクスを襲ったのは悪意ある誰かだ。

「村人たちは逃げられたのかね……」

山猫事件でできた、何人かの友人。マスターだって心配だ。夕霧が呟くと、ぴるぴるがもぞり、と動く。大丈夫だよ、とでも言うかのようにぺちぺち、と夕霧を優しく撫でるぴるぴる。

「ん、ありがとう」

夕霧はジャージ越しに彼を撫でた。

「死体が残ってない以上、生きてる可能性があるよ」

瓦礫の山を見る限り死体は刺さっていない。

どこかへ逃げたのだろうと三人が話していると、いきなりフェイが、びくん、と体を跳ねさせ辺りを見回し始めた。

「やだ……怖い、怖い人がいるよ！」

指差した方向に、いつの間にかチンピラ風の男とマッチョの男が立っていた。

「誰……？」

リンクスの村に、こんな二人組はいなかったはずだ。三人はフェイを守るように二人組に向かい立つ。

チンピラ風の男が、動いた。

リヴィの前に立ち、目を合わせると。

「探してたんだぜえ？ リヴァイア君よあ」

と言った。リヴィは眉間に皺を寄せながら彼を睨んだ。

「僕を、探す？ なんの目的があつて？」

くつくつく、と笑うチンピラ男。

「知らねーの？ オレたちみたいな奴がお前を探す理由……一つしかねーだろ」

なあ？ と、リヴィの反応を見て楽しんでいるチンピラ男。

「レディ・サタンの一人息子、リヴァイア君よあ」

ピシリ、と空気が凍った。

まだそう決まったわけじゃない、と反論しようとする夕霧だが、それを手で制すリヴィ。

「どうしてそう思うの？」

彼の眼光が強くなる。チンピラ男はそれを見て楽しそうに笑った。
「そりゃ父親がこのオレだからだよ。レディの右腕であるこのオレがな」

凍った空気が割れる音がする。少しの間が空いた。

「……嘘だ」

リヴィが絞り出すような声を出す。

「嘘なもんか、オレが真正銘てめえの父親だ……見るよ、目つきなんて超そっくりだろ、鏡でも見てるのかと思つたぜ」

確かに目つきはそっくりだ。しかし……

「僕の父は貴方じゃない。何故なら僕はただの魔法使いで、貴方の属性を受け継いでいない。レディ・サタンは魔法使いだった、けれど人間だ。人間と幻獣が交わってできた子供には強く幻獣の属性を引き継ぐ。幻獣の血が強いから……ねえ、フィオル・グリフォン。」

レディ・サタンの右腕であり一番の狂信者だ」

すらすらとチンピラ男を論破していくリヴィ。話すにつれてフィオルの澄ました顔が崩れていった。

「っち。レディの息子を手に入れようとこんなつまねえ場所まで来てやったっていうのに……」

「この村は犬死につてわけだな」

マツチヨがニヤニヤしながら三人を見る。その言葉を聞いて、夕霧が刀を握った。

「お前らがリンクスを……」

怒りに震える夕霧。今にも刀を抜いて飛びかかって行きそうだが、それを必死にトーガが抑えている。

しかし、ジャージの中に隠れていたぴるぴるにまで気が回らなかった。

ジャージから白い霧が溢れだし、それと共に化け狐が飛び出した。

「貴様、よくもリンクスを！」

象のように大きな牙を突き立てようとフィオルに飛びかかるが、フィオルはまったく動じない。

「はははっ！ 低俗な獣がちょっと長生きしたくらいでオレに立つこうとはな！」

フィオルは狐に化けたぴるぴるに手を伸ばし、首に手を掛けると

……

ボキィ

乾いた空気は音を良く伝える。ぴるぴるの首の骨が折れる音が、夕霧の耳に響いた。

「あっけねえもんだぜ……ん、まだ子供か。持って帰って鍋にするのも良さそうだな」

即死。フィオルに投げ捨てられ、地面に当たるまでにぴるぴるの変化は解けていた。苦しむ間もなく、息が途絶えたのだろう。

「ぴる……！ おいてめえぴるぴるに触んな！ 離せ、トーガ！

あいつを殺してやる！」

夕霧はもう周りが見えていない。見えるのは、フィオルがぴるぴるを殺した、その事実だけ。トーガを振り払うと、刀を抜きフィオルに切りかかった。

「夕霧！」

「お姉ちゃん！」

トーガとフェイの止める声も彼女には届かない。フィオルの怖さを知っているリヴィも、彼女を止めようと魔法を放つが、間に合わなかった……ガキィ、と刀が硬いものに当たり弾き飛ばされる夕霧。「人間の刃ごとき、オレに届くかよ……」そんなこの汚え子狸が大事か」

フィオルはプレゼントだ、と倒れる夕霧にぴるぴるの死体を投げ捨てた。

「おっと、人間ごときがこのオレに斬りかかってきたんだから、その程度の怪我で収まるとは思ってないよなあ」

チャキ、と二丁の銃が夕霧に向けられる。

それと同時にマツチョがトーガとフェイの動きを封じようと二人を襲った。

リヴィは二人を凍らせようとしたが、フィオルの方が早い。

夕霧の足を撃ち抜くと同時にリヴィに襲いかかりローブを破った。「ちょ……僕そんな趣味ないんだけど！ レディ・サタンに相手されなかったからって、僕に性欲向けるのはおかしくない？！」

抵抗しようにも、手を抑えつけられているリヴィ。これでは魔法を使っても狙いが定まらないため、攻撃魔法をしても仲間に当たっては意味がない。

「黙れ、俺だってそういう趣味はねーよ！」

口ではそう言っても、どこかにやついているフィオル。

誰に当たってもいいから魔法を乱発しようか、なんて思うリヴィだったが、ちらりと夕霧を見た。足元に血だまりができていて、気を失っているらしくぐったりとしている。もし彼女に当たってしまったら止めを刺すことになりかねない……魔法は使えなさそうだ。

リヴィのローブがどんどんはだけていく。

「あつた……」

フィオルはリヴィの持ち物から宝石を取り出した。太陽の光を浴びて、怪しく青く光る。

それは、リヴィがリンクスの村で、山猫と戦った時に失敬したものだった。

「見つけたんだな、フィオル！」

マツチヨがそれに気を取られ、隙を作る。

それが仇となったようだ。

フェイは元の姿に戻り、トーガを傷つけないようにマツチヨだけを狙い彼を切り裂いた。

「うわ……うわああああああああ」

マツチヨマンは元に戻る暇もなくご臨終。

さすがに分が悪くなつたと感じたのか、フィオルは元の姿に戻り空高く舞い上がり逃げの姿勢に入る。

みるみる小さくなっていくフィオルの背を、フェイの咆哮だけが空しく追っていった。

V S イフリータ リヴィの爆弾発言、夕霧の新武器

気を失った夕霧は、フェイを処置した時に使用した道具の余りで応急処置がなされ、傷口をリヴィが凍結させ化膿を防ぎリオンに運ばれた。

トーガは夕霧のために国中から医者を集めるため東奔西走、フェイもトーガに付き添い、リヴィは責任を感じているのか、着替えの時以外はほとんど夕霧の傍を離れていない。

その甲斐あつてか、彼女の容態はどんどん良くなり、あとは目覚めを待つばかりだ。

しかし、一向に夕霧は目覚めない。

夕霧が目覚めるまで待とうと言っていたのだが、ぴるぴるの遺体をいつまでも凍らせておくわけにはいかなかったので目覚めを待たずに葬儀を行った。

普通の人間と変わらぬ、化け狸のものとは思えないほどきちんとしたものだっただ。

ぴるぴるの骨は、夕霧のジャージと同じ柄に染められた布に包められて埋葬された。トーガが気を使って、国で一番の染め物職人を呼び作ったもので、ぴるぴるも気持ち良く天に昇っていったのではないかと、フェイは思う。

「夕霧お姉ちゃん……」

リヴィがお風呂に行っている間、フェイが夕霧の部屋にやってきた。トーガも行ききたがったのだが、王子としてやらなければならぬことが溜まりに溜まっていたので、フェイだけが来たのだ。

夕霧はあいも変わらず眠っている。

「お姉ちゃん、見て？ フェイ燃えてるよ？ 水、かけなくていいの……」

「ごお、と初めて起こした時のように火を吐いてみせるフェイ。この数週間でフェイはグリフォンを倒すため、トーガに隠れて特訓を

していた。そのため炎を吐く量も完全に調節できるようになっているし、爪だつていつ誰に襲われてもなんでも切り裂けるように研いでいる。

あとは、夕霧が目覚めるだけなのだ。そして、グリフォンへの復讐心を燃やしてぴるぴるの仇を取りに行こう、と言ってくれるだけでいいのだ。

フェイだけがそんなことを言っても、リヴィいだけなら賛成してくれるだろうが、トーガは断固反対するだろう。

「ねえ、お姉ちゃん……」

ガタン、と窓が開く音がした。

「……フェイ、来てたの」

リヴィいだ。髪の毛が濡れている。お風呂から上がってすぐにまた来たのだろう。

「お姉ちゃんが心配なのはリヴィいお兄ちゃんだけじゃないんだよ？」

困ったように笑うフェイ。トーガが言っていた。リヴィいの夕霧に対する執着が異常だ、と。あんなリヴィい初めて見た……と。

「そうだね。トーガだつて心配しているだろうし、僕だけじゃない

……わかつてるよ」

リヴィいが特等席に腰かける。眠る夕霧の右側だ。

「……ねえ、夕霧。君は少なくとも三人の人間に心配をかけているんだ、さつさと目を覚ましなよ」

語りかけるような口調。

「……夕霧お姉ちゃん、早く目を覚まさない……リヴィいお兄ちゃんが死んじゃうよ……」

ぽつり、と呟くフェイ。

何を言っているの、とリヴィいはフェイを見るが、その目には力がない。夕霧が怪我をしてから数週間、リヴィいはほとんど食事もとっていない。衰退していく様子を近くで見ているトーガとフェイは、夕霧と同じくらい、リヴィいも心配だった。

泣きそうなフェイを見て、リヴィいはベッドの中に手を入れ、夕霧

の右手を握りしめる。

「早く……目を覚ましてよ」

ぎゅう、とリヴィの手に力が入った。

その時。

「ん……」

リヴィの手が握り返される。夕霧の左手が持ち上げられ、ごしごしと目をこする。

「……フェイ！ トーガ、呼んできて！」

リヴィが声を上げる。フェイは窓を飛び降りると、ドラゴンに変化した。今やフェイはドラゴンの姿でも大きさは自由自在である。

「夕霧、夕霧。気がついたんだね」

目を覚まし、一瞬時が止まったかのようにリヴィと見つめあう夕霧。

「うわあああああ！ な、なんでお前私の手なんて握ってるんだよ！ 恥ずかしいだろ！」

振り払おうと躍起になる夕霧だが、数週間眠っていたままだったのだ。衰弱しているとはいえ、リヴィの力に勝てず振り払う事のできない右手。その右手にこっん、とリヴィは額をくつつける。

「良かった……本当に、心配かけるんだから」

泣き出してしまうような声に、夕霧は茶化すこともできずに、困ったような、嬉しいような表情でリヴィを見つめた。

「……びるびるは？ ！」

はつと我に返り、愛狸の姿を探す夕霧。首の骨を折られたのだから、生きているはずはないのだが、確認をしないことには諦めきれないのだ。

「夕霧が眠っている間に葬式が済んだよ。夕霧のジャージそっくりに作った布で骨を包んで埋めた。多分、彼は幸せだったと思うよ」

その言葉を聞いて、夕霧はがっくりと頂垂れた。やっぱりか……。と。そして、自分の足がまったく痛みを感じていないことに気が付き布団をめくろうとした。

「……リヴィ、右手使えないと不便だから離してくれ」

無言で離すリヴィ。今度こそ布団をめくった夕霧は、自分の足に銃痕がないことを確認すると、首を傾げた。

「私、撃たれたよな？ よくある漫画とかみたいなお守り持ってた！　みたいなことしてないし」

それを聞いて呆れるリヴィ。

「君、三週間は眠ってたんだよ。怪我也完治するに決まってるじゃないか」

ええ、と夕霧が眉間に皺を寄せる。

「そんなに寝てたのか。ごめん、迷惑かけたな」

「違うでしょ」

リヴィがすかさず突っ込みを入れる。ここで突っ込むか、と驚く夕霧。まったくもって突っ込まれた意味がわからない。

「僕たちは迷惑なんてかけられてないよ。でもものすごく君が目覚めるのを今か今かと待ってた、心がすりきれそうだったよ」

ジロ、と夕霧を睨むリヴィ。夕霧は少し考えて、

「待たせてごめんな、心配かけた」

と言った。それで良いんだ、とリヴィは笑う。

その時トーガとフェイが窓を破らん勢いで飛び込んできた。

「夕霧！」

「お姉ちゃん！」

良かった、良かった、と繰り返す二人。夕霧は二人に待たせたこと、心配掛けたことを謝罪すると次の行動を考え始めた。

「ぴるぴるの仇をとりたい」

夕霧がそう言うと、やっぱり、という表情のトーガとフェイ、困ったような表情をするリヴィ。

「夕霧は怪我で動けなくなっただばかりなのに、そんな無理しない方がいいよ」

フェイの予想を外して、グリフォンに挑むことを否定したのはリヴィだった。

トーガは夕霧の性格上、絶対にぴるぴるの仇を取ると言いだすとわかっていたのだろう、王子としての仕事の合間に、騎士たちに混じって訓練をしていたのだ。フェイには言わなかったし、ずっと夕霧の傍にいたリヴィには言う暇もなかった。だから、トーガが夕霧の案に反対しなかったのを見て一番驚いたのは、誰よりもリヴィなのかもしれない。

「オレ、マツチヨに対しても何もできなくて、フェイが手を出すのを見てただけなんだ。オレ、もう見てるだけは卒業しようと思ってちよつと遅くなったのはこれを取りに行ってたからなんだ、と剣を取り出すトーガ。数週間経っているのに、埃一つついていない。本当に訓練に打ち込んだのだろう。」

「夕霧がまた怪我をするのも嫌だしね」と、トーガ。

「フェイもー！ フェイも、あいつ倒したい！」

ぴるぴるの仇、打つ！ と、やる気満々の様子。

しかし、リヴィは頑として首を縦に振らない。よほど夕霧が長い事目覚めなかったのが堪えたのだろう。

「……じゃあ、夕霧は直接戦わない戦法身につけてね」

こんな無茶を要求した。刀しか持っていない夕霧に、それは不可能な話だ。

「ねえ、リヴィ夕霧に過保護すぎだよ。どうしたのさ、リヴィらしくもない！」

とうとう怒り始めるトーガ。流石に目に余ると判断したのだろう。

「僕らしくない、ね。君は僕が恋したのを見たことがあるの？」

ぴし、と凍るつくトーガ。フェイはきゃー、と恥ずかしそうに顔を覆い隠したし、当本人の夕霧は事態を飲み込めていない。

「そういうことだから。僕は安心したらお腹もすいたし眠くなってきたから、先に休むよ、おやすみ」

ドシルを呼ぶと、ひらりと出て行くリヴィ。残された三人は呆然としたり恥ずかしそうにしたり現実逃避したりと大忙しだ。

話も進まないし、あとは明日片付けようということで、三人も結局すぐに解散。

夕霧は一人になった部屋でリヴィの言ったことを考えていた。

恋した、の事も重要だが、その辺は後々考えるとして、今は直接戦わない戦法の話だ。

何か忘れている気がする、と考え込む夕霧。自分で戦わない戦法。ぴったりの才能があつたはずだが、使い方がわからなくて封じ込めたもの。

リンクス……ルナル……ヴィペール……と、順番にこの世界に来てからのことを思い出し、ソラニテの話を聞いたことを思い出した瞬間、夕霧は、ぴかん、と自分の脳が光つたような気がした。

「召喚術だ！」

そう呟いた瞬間。

「……の？ ゆ……！」

どこからか、声が聞こえた。

隣の部屋で誰かが話でもしているのだろうか、と思ったがここはリオン。防音はしっかりされている。

そして思い出した、この単語。

「……イフリータ？」

恐る恐る呟いた夕霧の周りで、しゅうしゅうと水色の煙が巻き上がる。

そしてその煙は一か所に集まり二頭身くらいの毛玉のようなものになった。

「……毛玉のお化け？」

「毛玉って何よ失礼ね！ まったく、十数年ぶりに反応したと思つたら、私の名前まで忘れてるの？ まったく、失礼しちゃうわ！」

毛玉はものすごく怒っているようだ。短い手で髪の毛をひとつにまとめ上げると、毛玉は女の子だということがわかった。デフォルメされたキャラのようだ、小さいなあなんて考える夕霧。

「……ちよっと。小さいって何よ小さいって。あんたが力を私に流

してくれないからでしょ！　もしかして、そんなことも忘れたわけ？　子供のころのあんたの方が数倍マシだったわ！」

よく回る口だな、と思う夕霧。

「長いこと無視され続けられてた私の気持ちわかるわけ？　言っておくけどねえ、私はずつとあんたの中にいたの。あんたの考えていることなんて全部お見通しだしあんたのことは何でも知ってるの！

例えば、あんたのデータフォルダに入ってる画像の傾向とか……」

「うわーっ！　やめて！　やめるべき！」

ばたばたと手を振る夕霧。

「……その変な言葉遣いの大元も知ってるわ。で、あんた強くなりたいんでしょ？　どうすればいいか教えてあげる」

イフリータはベッドサイドのミニテーブルに腰かけた。

「あ、あと私のことはイフリータっていう種族名じゃなくて、ファーチャって呼んで頂戴。夕霧だって人間って呼ばれるの、嫌でしょう？」

彼女の名前を聞いて何かが引つ掛かる表情をする夕霧。

「……ファーチャん」

ファーチャは驚いた表情を向けた。

ファーチャんというのは、夕霧が昔彼女を呼ぶ時に使っていた愛称だ。

「ちょっとだけ思い出したようね。でもあんたは学ばなければいけない。チータの国に行きなさい、あんたのパパの故郷よ」

「父さんの？」

そう言って夕霧はハツとする。

「……そうか、召喚術……」

幼いころにイフリータを召喚できていたというのなら、きっと力の使い方を学べばまた自由に呼び出せるようになるだろう。

今日のように、たまたま呼び出せるというだけでは心許ない。

「まったく、クリードもとんだ仕事を任せてくれたものだわ。」
え、と夕霧は言う。

「ファーちゃんは元々父さんに従ってたのか？」

もしそうだとしたら、昔の話とかも聞けるかも……なんて夕霧の心が躍る。

「残念ながら、私はあんたに前の契約者のことについて教えてあげることができないの。そういう決まりなのよ。でも、まあ……そうよ、私は元々クリードの召喚獣だった」

話を聞くと、ファーチャ（幼い頃だったから許したが、ファーちゃんという呼び名はあまり好きではないらしい）は夕霧が産まれたとき、父親のクリードに頼まれ彼女のおもりを頼まれ渋々契約したらしい。

というのも、召喚獣の力は完全に契約者の能力に依存する。契約した者が強ければ強いほど、召喚獣も強い技が使える……らしい。信頼関係も大事だという。

しかし幼い夕霧の潜在能力はクリードを超えていて、ファーチャは最初大喜びだった。

夕霧が産まれてから三年間は、最強の召喚獣を言っても過言ではなかった……ということだが。

「あつちの世界だと力を分け与えてもらえなくて、ずっと具現化もできないしあんたは私の事忘れちゃうし。こつちの世界に戻ってきたかと思えばあんたの力に蓋がされていて少しずつ漏れいしている力をかき集めてやっとこの姿よ」

元の姿に戻りたいわ、なんてため息をつくファーチャ。

できることならば、戻してあげたいけれど……なんて考える夕霧。しかし、彼女はまだ力の蓋を取ることすらできないのだ。

つまり、チイータの街に行くことは決定事項のようなものである。

「ファーチャは私以外にも見えるの？」

「具現化すればね。最低このレベルまで実体があれば、見えるはずよ」

良かった、と安堵する夕霧。見えない人と話すようになったなんてトーガたちに知れたらとんでもないことになる。 ￥￥￥

「なるべく具現化させてあげたいけど……。蓋を取っ払う方法ってあるのかな？ 私の心の問題とかならなんとかなりそうだけど」

「んー、とファーチャは顎に手を当て考え始めた。与え方を忘れてる、とかならば夕霧が調べればいい話なのだけれど。」

「あつちの世界で力を使えないだけで、こつちに戻ってきたのならなんら問題はないはずなのだけれど……。力はえいってやれば私に流れ込んでくるはずよ」

「ふんわりしてるなあ、と夕霧は苦笑い。しかし言われた通りにしてみようと、彼女はファーチャに手をかざし、

「……えいつ」

言われた通りにやってみた。ファーチャに力を流すようなことをイメージしてやったのだが。

「やる気あるの？」

無理だったようだ。

やはり調べなければならぬ。そう思った夕霧は早速ベッドから抜け出そうと布団をめくる。

「もう遅いわ、明日にしたら？ 書庫の鍵も閉まってるでしょ」

外を見ると、もう真っ暗だった。

「そうだな、と呟いた夕霧は明日を待つことにして、布団をかけ直した。」

VSリヴィ 教えて先生！

夕霧が起きたころには、ファーチャはもういなかった。

具現化するだけの力がもうないのだと頭の中に直接響いてきたので、早いところ力を与える方法を見つけ出さなければならぬ。

正直、ファーチャの二頭身の服装がとてめセクシーだったので早くちゃんとした頭身のファーチャを見たいというところもある。

朝食の時間になり、頭の中で騒ぐファーチャが煩いので夕霧はトーガとリヴィに尋ねた。

「召喚術の基本が載ってる本ってわかる？」

リヴィの食事をする手が止まる。

「……そう来るの」

実を言うと、リヴィは夕霧に魔法を教えてあげたかったのだ。随分と下心のある発言だったのだが、夕霧は華麗に避けたようだ。

しかし、召喚術も一応魔法の一種である。

「僕が教えるよ」

基本は全部一緒だからね、と言うリヴィ。

彼は小さな氷の龍しか召喚できないためあまり使用頻度は高くないが、一応召喚獣である。

「ん、ありがと。早速なんだけどさ、召喚獣に力を与えるってどうやるんだ？」

カチャカチャ、と食器が当たる音が響く。

「……朝食が終わってからにしようか」

ということで、朝食後、リヴィの授業が始まるのであった……

授業開始。

リヴィの教え方はスパルタだが、わかりやすく一通りの事を教えてもらい、三時間経った頃にはファーチャを自由に召還できるようになっていた。

力を与え、元の姿に戻してやることもできた。それでもクリードの力の三割程度しか出せていないという。その上、幼い頃の夕霧に比べようものなら足元にも及ばないらしい。

「ふうん、陣無しでここまで強い幻獣を呼び出すなんて、夕霧もやるじゃないか」

リヴィは君にそんな才能があつたなんて、と少なからず驚いているようだ。

「クリードの娘なんだから、当然じゃない。それに私が認めた力の持ち主よ？ あんたの召喚術なんて子供の遊びよ」

……リヴィとファーチャは少し……いやかなり、仲が悪い。そりが合わないようだ。

確かに二人ともタイプは違えど気が……というよりも、我が強いから、衝突するのも仕方ないのかもしれない。

結局ファーチャはリヴィの前には姿を現したくないと勝手に戻ってしまったし、無理に出しておく必要もないのでそのままにしておいた。

「君と違ってずいぶんと腹が立つ女だね」

召喚獣は契約者に似るんじゃないのかい、と口をとがらせるリヴィ。

「元々は父さんの召喚獣だからさ。多分ファーチャは私より父さん寄りの性格なんじゃないかな」

しかし、父親がああいう高飛車でプライド高そうな性格なのは嫌だな……と夕霧は苦笑い。

「君のお父さん、ねえ……僕とは気が合いそうにないな」

クリードの悪口は許さないわよ、と騒いでいるファーチャを心の中でのため、話を変えて今日の食事はなんだろう、なんて他愛もない話をする夕霧。

「さて、基本的なことは教えたし、あとはあの女が教えてくれるんじゃないかな。僕はグリフォンの事を調べてくるよ」

夕霧の表情がころころ変わるのを見て、ファーチャと話している

のだろうと判断したりヴィは席を立ち、書庫へと消えて行った。

VS召喚術 チィータの街

「グリフォンに天敵はいない。けれど、弱点はある。スピードだよ」
翌日、夕霧がトーガとフェイと共に朝食を食べていると、リヴィ
が現れそう言った。

今まで寝ずに文献漁りをしていたらしい。

「スピード……ってことは何？ スピードを上げる魔法でも習得するの？」

トーガは首を傾げる。そんな魔法があるのか。

「いや、夕霧が召喚術を使っているのを見て思いついたんだ。僕はペットを飼うよ」

一瞬の間。

「ペット？」

天才の考えることはわからない、と夕霧。

「だから、僕はそこまで召喚に強いわけではないから、召喚しなくても良い方法……つまり、ペットだ」

フェイは、自分と似たような仲間が増えるのね、と目を輝かせる。
しかし夕霧は反論した。

「リヴィ、ペットを飼うって大変な事なんだぞ？ ちゃんと毎日餌やって、散歩して、糞の始末して……」

ちなみに、夕霧は昔犬を飼っていたのだが、本当に大変だった。
噛まれるし吠えるし躡がなっていないと言われればそれまでだが、
罰として餌をやらなかったら脱走した。

そんな罰を与えた彼女も母さんにご飯を作ってもらえなかった。
自分も脱走しようかと思ったのは、ファーチヤしか知らない彼女の
黒歴史の一つである……。

「あつちの世界とは違うんだよ。散歩なんて勝手にするし、餌だっ
て自分で取れる。糞はもししても魔法で消せばいい」

不満げな夕霧。穴を探そうと必死に頭を回転させ、閃く。

「飽きたからって捨てたらだめなんだぞ！」

捨てられた犬や猫がどんな末路を辿るかわかってるのか、と涙ながらに語る夕霧。

「捨てないよ、絶対的な戦力を手に入れるんだ、そう簡単に手放しはしないよ」

にやり、トリヴィのいつもの笑い方。

「な、何を飼うの……？」

トーガが恐る恐る尋ねた。

「白虎だよ」

白虎。四聖獣の一角を担う西を司る神だ。ペットと言っていいものなのか、疑問なところである。

「だから、これからの道順は決まったよ。まずチータの街に向かう。そして、僕の白虎を捕まえに最西の地ザパードに寄って、グリフォンを仕留めに行く。その間にトーガはそれなりに敵に立ち向かえるようにならないといけないし、忙しいよ。」

既に決定事項らしく、口をはさむ暇もない。

「フェイは、何をすればいいのー？」

白虎って強いのかなー？ とフェイは楽しみだと跳ねまわる。臆病だと自分で言っていたが臆病らしいことは一度も言っていない。

ドラゴンの一般的な生活を見てみたいものである。

「フェイは、トーガを見守ってて。フェイが応援すればトーガもきつと頑張るから」

別にロリコンではないのだが、何故か夕霧の中でトーガは小さい子供の応援で頑張れるというどこか間違った認識がなされている。

「うん！フェイ、トーガお兄ちゃんの応援、頑張るね！」

「よしよし、フェイは可愛い……な……」

フェイの頭を撫でようと近くに移動する夕霧だが、とんでもないことに気がつく。

出会ってまだ三週間ちょっと（眠っている期間含め）のはずの彼女が、出会った当初よりずっと成長している。

もしかして、と夕霧はフェイの頭を撫でながら考えた。
ドラゴンの成長スピードは、人間なんかとは比べ物にならないものではないか。

ならば、グリフォンに挑む際立派な戦力になるのではないか。実際、マツチヨを倒したのはフェイなのだ。

「フェイ、私たちと一緒にグリフォン倒したい？」

そう尋ねると、トーガが少し怒った表情になる。やはりトーガはグリフォンと戦う事に賛成でもフェイは置いていくつもりだったのだろう。

「え？ うん！ フェイ、お姉ちゃんとお兄ちゃんと一緒に戦う！ いいの？ 足手まといにならないかなあ？」

ファーチャも夕霧の中で言っている。この子を戦力に加えないのは馬鹿だ、と。

ならば加えるべきだろう。トーガを言いくるめるのも、きっと自分の仕事だ、と夕霧。
グリフォンなんて大物を倒したら、魔王にだって立ち向かえるだろう。

「大丈夫、フェイはとっても強いから。トーガを守ってあげて」
につこりと笑う夕霧。

「ふうん……。夕霧も気付いたんだ」

ぼそり、とリヴィが呟く。

リヴィも夕霧と一緒にの考えを持っていたわけだ。

トーガは一人不満そうな顔をしていたが、フェイが喜んでいる手前余計な事は言いたくないのだろう。

あとでこっそり何か言ってくるかもしれないが、ここで衝突するのは仕方のないことだと思うし、必要だ。

フェイは戦士だということを、トーガにわからせなければならぬ。それが、今の夕霧の仕事だ。

「じゃあ、早速行くか。まずは、チーータだ！」

そう言つと、フェイがつんつん、と夕霧のジャージの裾を引っ張

った。

「フェイ、お姉ちゃん達三人くらいなら乗せて飛べるよ?」

驚く夕霧。しかしトーガが慌ててフェイの肩を抱く。

「無理しなくてもいいんだよ、フェイ。まだ小さいんだから……」

トーガだ。でも、その言葉を聞いてフェイの耳がぴん、と尖る。

「大丈夫なの! トーガお兄ちゃんだっていつぱい肩車してくれたじゃない! 今度は、フェイの番だよ!」

ぷくー、と膨れるフェイ。

その辺はまだ子供だけれど、なぜかこの光景が微笑ましく感じ、どこか寂しくなる夕霧。何故だろう? と考えた時、自分の弟の顔が浮かんた。フェイと薫の姿をだぶらせ、夕霧は目を細めた。

「じゃあ、フェイに頑張ってもらおうか。でも、無理はしないって約束ね。辛くなったらすぐに降りる事。誰も怒ったりしないから」

「うん!」

役に立てるのが嬉しいのだろう。早く早く、と外に飛び出そうとするフェイ。

「……夕霧、いくらなんでもフェイにそれは……酷じゃないかな」

トーガだ。フェイに気付かれないようにこっそりと夕霧に話しかけた。

「トーガは、多分これからフェイの成長にものすごく驚くよ」

その後ろからリヴィが言う。

「どういうこと? フェイはまだ子供だ、そんな大きな成長なんて

――」

そこまで言っただけを嚙んだトーガ。

気付いたのだろう、子供時代が一番成長するということに。

そしてはしゃぐフェイの背が明らかに高くなっていることに。

「ドラゴン、かあ……」

そう呟きトーガは困ったように微笑んだ。

「ドラゴンだよ。ドラゴンだから特別扱いするわけじゃない、ただ人間の定規で見たら可哀想だって言ってるんだよ」

リヴィの意見は正しいと思う。ドラゴンには、ドラゴンの定規がある。

フェイはそれに外れてしまったかもしれないが、それでも人間の定規で見るとはあまりにも強すぎる。

「……そうだね。フェイはオレが思っている以上に成長しているみたいだし」

節穴だったよ、と頭を振るトーガ。

「じゃあ、行くか。フェイ様がお待ちかねだよ！」

ドウラーゴの山の麓でドラゴン化したフェイは、出会った時よりもやはり大きかった。

それは人型でいるときよりも差は歴然で、三人とも驚いている。ドラゴンというのは、どこまで大きくなるのだろう。

よじ登るのは大変そうなので、一度人型になつてもらい、リオンで三人が入れそうな籠を買った。簡易気球のようなものだ。

「振り落とされないでね！」

人型から再びドラゴン化するとき、そう言ったフェイの言葉通り、気球なんて生易しいものではなかった。

勢いよく籠につけたロープをひつつかみ、どんどん上昇していく。「……これは……改良する必要があるね……」

リヴィの声に頷く二人。さすがにこっちの世界に住み飛行に慣れている二人でもこれは辛かったらしい。生身で飛行機にへばりついているようなものだ。

しかし、あつという間に目的地であるチータの街に辿りつき、まったく空気が違うことに驚く三人。

リオンも、ヴィペールもドウラーゴも、それぞれ違う雰囲気を感じていたが、ここはまったくの異質なものだ。

全体的に薄暗く、街全体が路地裏のような雰囲気なのだ。

「随分と重苦しいところだね、ここ」

リヴィは顔をしかめたが、正直よくこの街に似合っている。

「オレ、ここ苦手だな。」

確かにトーガには向かないかもしれない。

どちらかと言うと老人が多く、子供はほとんど見当たらない。

多分、もうすぐで滅びてしまっただろう……そんな場所。

「……私はちよつと召喚術について調べてくるよ。三人とも先に宿に行つてて」

フェイは久しぶりの長距離飛行が楽しかったのだろうが、少し疲れている感じがする。

それを見破っていたトーガは、フェイと共に先に宿を探しに行くことになり、リヴィはいつの間にか消えていた。

まったく足の速い奴だと呆れ半分感心半分の夕霧。

とにかく、彼女は早速ファーチヤを呼び出しチータの探索を始めることにした。

「ふうん、まったく変わってないわね」

辺りを見回したファーチヤは伸びをして夕霧の隣に並んだ。

片やジャージを着ただっさいボサボサ女、片や綺麗な水色の髪の毛に、それに合わせたセクシーな衣装。美しさに大きく差が出ている事を少し気にする夕霧。

もう少しまともな格好してればましに見えるのかな、なんて考えていると、ファーチヤと目が合う。召喚獣は、主人の考えることがわかってしまうらしい。その事を思い出した夕霧は、

「なんだよ、夢は見ないって」

「……べつにー」

何か言いたげなファーチヤを問いただすことはせず、彼女にひたすら着いていく。

しばらく歩いていると、ファーチヤの歩調が速くなる。

ファーチヤの歩幅は夕霧よりも長いので、だんだん小走りになっていたが全速力になる手前でファーチヤの動きは止まった。

「クリフ！」

真っ赤な髪の毛に、同じ色の瞳をした背の高い男に出会った瞬間、ものすごく弾んだ声。

そのままファーチャはその男に抱きついた。

「ファーチャ！ どうしてここに……？」

知り合い……というよりも結構深い仲なのだろう、ファーチャを抱き止めると、そのまま抱きしめ返した。映画のワンシーンのようである。

矢継ぎ早に質問するファーチャに、いちいち細かく答えを返すクリフと呼ばれた青年。

律儀な人、なのだろう。

「待て、ファーチャがここにいるということは、夕霧ちゃんが……？」

いきなり話題に上った夕霧は驚いて顔を上げるとクリフと目が合う。気まずくて目を逸らしていたのだ。

「そうよ、戻ってきたの。……力の使い方は忘れてしまってるけれど」

残念そうに首を振るファーチャ。

「で、夕霧ちゃんは……彼女かい？」

クリフはファーチャを離すと、夕霧に近付いた。

「……お久しぶりです」

初めまして、は違うだろうと、まったくこれっぽちも覚えていないがとりあえず挨拶をする夕霧。無難な挨拶だったが、クリフは涙ぐみ始めた。

「ああ、夕霧ちゃん……こんなに大きくなって……俺も歳をとったわけだ、師匠が亡くなってから、幾年数えただろうか……」

クリフはクリードの弟子だ。昔の話だが、彼がクリードを見つけ出し弟子入りするまでにはものすごい努力と時間がかかれたのである。

「弟子ね……父さんってすごかったんだ」

夕霧にはまったく実感がわかない。

「何当たり前の事言ってるのよ」

ファーチャが当然でしょ、と言わんばかりな態度をとった。

「こら、ファーチャ。師匠のお子さんに対して失礼な口を利くな」
クリフさんこっわ……なんて青ざめる夕霧。本当にクリードを心から慕っているのだろう。

「で、力の使い方を忘れたとは……？」

クリフはさっそく本題に入った。ファーチャは眠い、と戻ってしまったのであるべく手短に話している間、多少の驚きは見せたものの、話に割って入るようなことはなくものすごく話しやすい人だと夕霧は感じた。

「クリフさんは、父さんに色々教えてもらったんですね？ ……」
それを、私に教えてもらえませんか？」

最後にそう言つと、またクリフは涙を見せた。涙腺が相当緩んでいるようだ。

「喜んで、俺でよければ喜んで教えよう」

師匠がいなくなつても尚修行を続けていてよかった、と手のひらで涙を拭うクリフ。

その手の甲に、なにかが書いていることに夕霧は気付いた。

その視線に気付いたのか、クリフはにっこりと笑つて、

「これは普通の術士が召喚術を使う時に必要な陣というものだ。師匠や君は必要としないみたいだけれどね」

と言つた。長年の相棒でもあるらしく、クリフは愛しげに陣を撫でた。

「夕霧ちゃんは今どこに泊まるのかな？ もし良ければ、俺の家でゆつくり術を教えられるし修行用の部屋もある。どうだい？」

考え込む夕霧。他で外泊するなんて言つたらリヴィは怒るだろうし、トーガとフェイも心配するだろう。しかし、召喚術の修行も捨てがたい。

「仲間がいるので、ちよつと知らせてきます」

結論。伝えておけば問題ないだろう。

「ああ、夕霧ちゃんはもう仲間がいるのか。さすが師匠のお子さんだ。じゃあ、その仲間たちも連れてくればいい。どうせ部屋は余っ

ているのだし」

優しさ感動した夕霧は、さっそくみんなを呼びに来た道に戻った。

VS召喚術 チィータの街2

「……おかしいな？」

先程から夕霧は同じところをぐるぐると回っている。ずっとときよるきよるしながら街を徘徊している彼女は、きっと街の人から見れば不審者のように映っただろう。

夕霧の図太い神経がガリガリと音を立てて削れていき、か細くみそつかすだけが残り、心が折れかけたころだった。

「何迷子になってるの？」

救世主の声が、夕霧に降りかかる。

「リヴィー！ 助かったよ、このままもう会えないのかと思い始めてたし……」

ストレスで神経がマツハだったよ……なんていう夕霧。

「……そんなわけないでしょ、帰ってこなかったら氷人形で探すまでだし、夕霧を見捨てるわけがないじゃないか」

よしよし、とここぞとばかりにリヴィーは頭を撫でる。

「それはそうと、私の父さんの弟子っていう人を見つけたんだ。その人に色々教えてもらうから、私はそっちに泊まる。リヴィーたちはどうする？ もう宿とつたならそれはそれでいいけど、仲間を連れてきてもいいって言われてさ」

リヴィーの眉間に皺が寄る。

「君のお父さんの弟子、ねえ…… トーガとフェイはもう寝てるから、僕だけ行くよ」

まじか、と呟く夕霧。

しかし大分心細くなってきていた上疲れていた夕霧は思考回路が正常に働かず、

「じゃあ、戻るか」

と。しかし。

「もしかして、夕霧道わからないの？」

呆れた声を出すリヴィ。

「……ごめん」

「はあ、仕方ないな。グラキエース・ドラコ（氷龍召喚）」

リヴィが少し大きめな陣を描き、小さな氷の龍を出した。ファーチヤのように話せたりはしないが、記憶を辿って道案内をしてくれる便利な案内人だ。

「この子がさつきまでいた場所に連れて行ってくれるよ」

氷の龍は夕霧の頭のまわりをくると回り始め、しばらくして彼女と目を合わせ首を傾げた。

「何か情報を与えてあげて。場所の名前とか」

夕霧がうろろしすぎたせいで場所が特定できなかったらしい。

「人の名前とかでも大丈夫かな？ クリフさんって言うんだけど」
ふうん、男なの、なんてリヴィが呟く。一度自覚してからは気持ちを隠そうともしない。

氷の龍はぴん、とまっすぐ体を伸ばすと、ゆっくり宙を泳ぎ始めた。

「わかったようだよ」

二人で氷の龍についてゆき、二十分くらい歩いたところでクリフの家に辿りついた。

四時間は彷徨っていたのに、と少しショックを受ける夕霧。

落ち込んでいると、クリフが家の窓から顔を出した。

「おや？ 夕霧ちゃんの仲間って、男の子一人なのかい？」

彼の眼光が、少し鋭くなった。

「いや、あと二人いるんですけど寝てしまったらしくて、リヴィだけついてきてくれたんです」

あ、彼リヴァイアって言います、と軽く紹介をする夕霧。

「ほう……。夕霧ちゃんの保護者として、これは黙ってられないな

……」

リヴィは眉間に皺を寄せる。

「貴方が夕霧の保護者？ どうして？ 貴方はただ夕霧の父親の弟

子というだけでしょう?」

何故かここで喧嘩腰になるリヴィ。

「保護者も同然だよ、夕霧ちゃんがまだオムツもとれてないころから知っているんだ」

二人の間に火花が散る。

「クリフさん、召喚術教えてください! なるべく早くマスターしたいんで!」

この場を収めようと、夕霧が言った苦し紛れの一言だ。

「ああ、ごめんね夕霧ちゃん。じゃあ、すぐに始めようか」

クリフがついておいで、と手招きをする。

「……僕も。召喚術は魔法の一種だし、強化するにこしたことはないからね」

ひく、とクリフの表情がひきつる。よっぽどリヴィが気に食わないのだろう。

「構わないけど、俺の教え方はスパルタだからね」

「別にいいよ」

この二人の間にいると焼かれそうだな、なんて思う夕霧。こんな時、びるびるがいてくれればいいのに、なんて亡き友人を思った。

修行場は地下にあり、ものすごく広くて頑丈だ。

「昔は、ここいっぱい陣を書いてやっとな型くらいの大きさにできた。俺はただの凡人だったからね」

東京ドームが何個も入ってしまいそうな陣である。

「でも、修行によってこの手の甲の陣で」

肌色より少し暗い色で描かれていた陣が、うつすらと光りだした。「ここまで……成長した!」

赤く輝く右手の陣を地面に押し付け、クリフさんは呪文を唱える。「イグニス・ウルラ（炎鷲召喚）!」

陣から炎が飛び出し、その炎はどんどん大きくなり、巨大な鷲の形になった。

フアーチャなんて比べ物にならない。

足の爪にひっかけられて攫われてもおかしくないような大きさだ。
「どうだい、俺でもこんな大きな召還獣を出す事ができる。師匠なんて山ほどもある亀を召喚したこともあるんだ、夕霧ちゃんならそれを超えることができるよ」

国が壊れてしまうのではないか、という程のクリードの力。もしかして、その気になれば世界征服なんて軽かったのかもしれない。それを超える夕霧の力とは、一体世界をいくつ制圧してしまうのだろうか。

「山より大きい、ファーチヤなんて……」

山ほどもあるファーチヤの、ガミガミ攻撃。夕霧は想像するだけで身震いしてしまった。

「普通の人は一匹しか召還獣と契約はできない。それは知っているかな？」

リヴィの基本授業で教わったことだ。

「知ってます」

氷龍のリヴィに、炎鷲のクリフ。

かつこよくて羨ましい、と呟く夕霧。

「でも、師匠は最大五匹の召還獣と契約していた。多分、夕霧ちゃんもそれくらいは余裕だ」

自分の力以上の召喚獣と契約してしまうと、精神を食い荒らされて廃人になり、最後には死んでしまう……それを知っている夕霧は身震いした。くれぐれも自分の力を超えるものと契約してはならないと、リヴィにきつく言われているのだ。

「私、自分の力の底が見えてちゃんと召喚獣を収めきれることがわかってから契約したいです……」

意外と夕霧はチキンである。

「力の底、か。大丈夫だよ、夕霧ちゃん。俺は人の能力の限界を見る力があるんだ」

それに食いつくリヴィ。

「……ふうん、興味深い能力だね」

夕霧は、リヴィのその笑顔の意味がわかってしまった。いくら仲が悪くとも、金になるとわかれば最上級の笑顔を見せるのだ。

「リヴァイア君の氷系魔術に關しての才能は底知れないものがあるね。小さくても龍を召喚できるだけのことはある」

クリフは意味ありげな笑みを見せた。小さくても、というところを強調していたのはきのせいだろう。

「そして夕霧ちゃんは……俺には見えない。底がないようだ」

夕霧は一気にクリフに対するふ

「信じてないね？ 本当だよ」

試しに数匹契約してみよう、今日は夜明けが過ぎても寝かさないよ……なんて、クリフが笑顔で言い放った言葉を冗談と受け取った夕霧だったが、これが本気であることを知るのは、夜が更け、眠気を訴えた際に笑顔で「寝かさないって言ったでしょ？」との言葉を聞いた時だった……

V S 召喚術 チィータの街3

「本気で…… スパルタだねえ」

「…… そうだね」

しかし、夕霧は複数の召喚獣と契約することに成功した。

コツさえ掴めば契約は簡単で、力の強さを見せつけられればいい、それだけ。

つまり大きな召喚獣を後ろに控えさせていればいい…… 増えていくにつれて、あっさり契約されていった。

そして今日、夕霧が契約して使えるようになった召喚獣は、

ブリッツ・パンテラ（稲妻豹）

ジェノサイド・レオー（虐殺獅子）

この二匹。

かなり厨二臭い、と夕霧は思ったが契約してからはまったくそうは思わなくなった。どうやら夕霧は動物にとっても弱いらしい。

ちなみに、スピードがありそうなものを中心に探していたがクリフの全体攻撃があると便利、という言葉でレオーと契約した。

絶対怖い、と腰が引けつつ召喚してみたのだが、契約して具現化してみたら結構甘えん坊だったというギャップ萌えの持ち主だった。パンテラも中々に可愛い。一緒に修行をしていると、だんだんと愛着が沸いてくる。

リヴィの氷龍もヴィペールの大蛇程の大きさまで育てることができた。

こうやって結果だけをまとめてみると一日でよくやった、という感じだが、夕霧はもうここで体と魂がバイバイするのだと思っただし、リヴィも疲れ果てて憔悴していたから、クリフのスパルタ加減がわかる。

夕霧は不安を感じる。絶対に、起きれない。

じつくりと疲れを取って次のところへ行きたいのだが、それは無

理そうだ。

夕霧はちらりとリヴィを見る。クリフのスパルタ教育もだが、火花を散らしていたリヴィは夕霧以上に疲れているはず。

しかもリヴィはこれから白虎と契約するのだ。体力は完全に回復しておきたい。

クリフが用意してくれたという部屋に向かって今、交わした会話はさっきの一言だけだ……相当疲れているだろう。

「リヴィ」

「なに」

「私今日起きないから」

「そう」

重傷だ、と夕霧は冷や汗を流す。

しかしそこまでリヴィに鎌ってられる程、夕霧も体力が残っていない。ネームプレートがかかっている部屋に入ると、風呂も入らずベッドに倒れこんだ。

「夕ちゃん大丈夫？」

パンテーラだ。スマートで、金髪をポニーテールに纏めている。

釣り目で八重歯がある、きつそうな見た目をしているが、実は世話焼きで心配性だ。

「うん、だいじょぶ、だいじょぶ。眠い」

呂律が回っていない。夕霧は心配そうに見つめるパンテーラを気にかける余裕もなく、眠りの世界に落ちて行った。

夕霧の耳に、周りで誰かが話し合いをする声が聞こえる。

「主、起きねえな……どうする……」

レオーだ。高校生くらいの年齢だが、金髪の髪ををつんつん立てて、数本落ちてくるらしい前髪はカチューシャで止めている。特徴的な釣り目は心配そうに揺れていた。

「でも、夕ちゃん疲れてるから……」

パンテーラもレオーと同じく心配そうに夕霧を見つめる。

「夕霧が寝ぼすけなのは今に始まったことはないけどねー。」

ファーチャだけは悠々と夕霧の眠るベッドに横たわりくつろいでいる。しかし夕霧の頭を撫でたりと、結構甘やかしているのは否めない。

「でも主、もう二日くらい寝てるぜ？ いい加減やばいんじゃない？人間だし」

レオーはあまり人間の知識がないが、夕霧と契約したことでこの二日で人間について学んだようだ。覚えたての知識をフル稼働だ。そのレオーの言葉を聞いて、夕霧はがばつと飛び起きる。

「二日寝てたのか？ 嘘お！」

起きないと言ったけれど、本当に自分が起きれないとは思ってもいなかったようだ、前科があるだけに学んでも良さそうだが。大慌てで身支度を整えると、ばたばたとクリフを探し始めた。

彼は中央の部屋でオレンジジュースを飲んでいて、夕霧が

「クリフさんおはよう！ リヴィは？」

そう尋ねると、クリフさんは首を振った。

「俺は知らないよ？」

邪魔ものが消えた、とでも言うようなすがすがしい笑顔。夕霧はパニックに陥っていてそんなことには気がつかない。

「主、主」

慌てて追いかけてきたレオーだ。

「どうした？」

髪の毛をいじるのが彼の癖らしい。指で髪の毛を弄びながら彼は言った。

「リヴァイア君なら、先にトーガ君とフェイちゃんのところに行くって言うってたぜ？」

一瞬安堵の表情を見せる夕霧だが、また苦悩の表情に戻ってしまふ。一人では宿に戻るなんて不可能に近いからだ。

そんな主を見て、

「夕ちゃん、私がいるじゃない！」

とパンテーラが自分の胸を叩いた。

「うつわああああ！ パンテーラすげえ！」

稲妻豹の名は伊達ではない。

ものすごいスピードで（それこそ稲妻のように！）クリフの家を飛び出し、夕霧が感動の叫びをあげている間に、宿に着いてしまった。

「トーガさんやフェイちゃんの匂いはわからないけど、リヴァイアさんの匂いなら覚えたからね！」

見た目に反して超良い子だ、契約して良かった。なんて思う夕霧。欲を言えば狸も契約したかったのだが、ぴるぴるに勝る愛着を湧かせられる程の狸はいなかった。

「あら、私だつてやろうと思えばそれくらいできるわ」

つん、とファーチャが言う。

「やらないや意味ないぜ？」

レオーは結構毒舌のようだ。

宿に慌てて入っていくと、召喚獣達は自然に夕霧の精神へと戻っていく。

賢いな、と彼女が感動しながらロビーに入っていくと、

「あ！ 夕霧、危ない！」

「え？」

トーガの声と共に、真つ白な獣が夕霧の上に跨っていた。

現状把握、と呟く夕霧。

眠っている彼女を置いて、勝手に白虎を捕まえに行っていたのだ。「グリス、待て。……待っていようかとも思ってたけれど強くなった氷龍を使いたくなってね。一人で行ってきたんだ」

一人？ と夕霧が怪訝な顔をする。ならば、トーガとフェイはどうしていたのだ。

「あ！ 夕霧お姉ちゃん！」

フェイの声がして振り向く夕霧。

「……フエイ？」

あまりにも変わったフエイに驚きを隠せない夕霧。離れていた二日間、眠っていた三週間の三倍は成長していたのだ。ドラゴンとは恐ろしいものである。

「私、トーガお兄ちゃんといっぱいモンスター倒したよ！」

えへへ、と嬉しそうに笑うフエイ。

遅れて到着したトーガも、恥ずかしそうに笑う。

「オレ、もうあんまりモンスター怖くないかも……」
と。

「夕霧。……準備はできたよ、君が寝てる間にね」

リヴィが意地悪く笑う。

「ありがとう。何もしてない分、私はグリフォン討伐に全力を注ぐよ」

自分の父親を思い、握りこぶしを作る夕霧。召喚獣たちがざわめく。

刀はレオに預けた。彼は毒で敵を溶かして行くことを得意とするので、似たようなものだろうと預けたのだ。

「……ちよっと待って、何も、っていうのは間違いじゃない？」

「え？」

思わぬところで反論が来た夕霧は間抜けづらだ。

「そうだよ！ 夕霧がいなければ、オレたちはずっと旅に出ることはなかった。つまり、ヴィペールの大蛇は倒されることもなくソワレも食べられちゃうし、フエイだって一人ぼっちだった」

リンクスは助けられなかったけど、と悲しげな表情をするトーガ。夕霧は、いるだけで回りを動かす不思議な力があるよね。だから何もしてないなんて、言わないで」

世界不適合者の私に何を言う、と苦笑いの夕霧。しかし、トーガとリヴィは自分を必要としてくれている。フエイも懐いてくれているし、召喚獣達だって、自分についてきてくれている。

「これでいいんだ」

元の世界にいたときよりもずっと生きがいがある。夕霧は迷っていた。グリフォンを倒せば元の世界に帰れるだろうことは気付いている。トーガが戦えるようになった今、グリフォンは仕上げだ。それを終えたら仕事納めだ……

少し寂しい思いが夕霧の胸をよぎったが、ふるふると夕霧は頭を振り、そんな考えを頭から追い出して、顔を上げた。

「……ありがとう。じゃあ、パーっと、グリフォン倒しに行くか！」
頼もしい仲間たちの顔。
いざ、出陣だ。

VSグリフォン たった3ページのラスボス

フェイの飛行能力は前より格段に上がっていて、同じ飛び方をしたのにも関わらずまったく揺れを感じなかった。

成長したのは、戦闘能力だけではないということだ。ドラゴン末恐ろしい。

「さて。ここがグリフォンたちが根城にしているという名もなき北の地なわけだけれど」

辺りを見回しても、何も無い。

もしかして、デマ情報だったのだろうか。

そんな不安が首をもたげ始めた、その時。

「うん？ お前ら、見かけない顔だな」

目の前に、斧を持った大男が立っていた。

いつの間に——なんて思う暇もなく、大男は斧を振り回し始める。ギリギリ回避したが、突然すぎてどうすれば良いかわからない——ピンチだ。

「夕霧！ 落ち着いて、あんな奴夕霧の敵じゃない」

トーガだ。剣をしっかりと装備して、しっかりと敵を見据えている。

本当に成長しているじゃないか、と驚くと共に自分も負けていけないと俄然やる気になる夕霧。

「パンテーラ！」

稲妻豹は召喚され、一度大きな伸びをすると黄金の体を目にも止まらぬ速さで大男に突っ込ませる。

「グラキエース・ドラコ（氷龍召喚）……君は待機ね」

リヴィも氷の龍を召喚し、グリスにも命令を忘れない。確かに大男と言えど、あのサイズに三匹も突っ込んだらこちらにも被害が出てしまうだろう。

大男は氷龍の力でみるみる内に凍らせられてしまった。

「なっ……なんだこいつら……」

私たちにほぼダメージを与えることなく動けなくなってしまった大男の目には、恐怖の色が浮かんでいた。

「この調子なら、グリフォンを倒すのもあっさりいけるかもね」

リヴィが不敵に笑う。

夕霧も笑い返す。そんな気がしてきた。

「……お兄ちゃん！ お姉ちゃん！ いっぱい……いっぱい来るよ！ 気をつけて！」

こんな時に役に立つのは、レオーだ。

「トーガ、大丈夫。全体攻撃は任せて」

リヴィはグリスに再び待機命令を出し、手を出す気配をまったく見せない。レオーの力を一度見ている彼は自分が働くまでもないと判断したのだろう。

良い判断である。

「レオー！」

虐殺獅子の名は伊達ではない。一度大きく咆哮すると、体に濃い紫のオーラを帯びて駆け回る。

昔から、虐殺は毒でされると相場は決まっている、敵はどんどん溶けていき辺りには無残な死骸たちが残った。

すべて、ミノタウロスやキメラ、キュクプロスなど、良いイメージを持っていない幻獣ばかりだ。

「ほう、随分と力をつけてきたようだな、お前ら」

あまりにも部下を殺されたことに焦ったのか、早々に出てきたグリフォン。

しかしトーガですらも怯えることなくあいつに対峙している。夕霧の冒険は、無駄ではなかった。

「お前を倒すために、色々用意したんだ！ 覚悟しろ！」
稲妻豹も、虐殺獅子も恐ろしい。ものすごく強い力だ。

それでも、彼女には叶わない。

「ファーチャ！」

魔人ファーチャは巨大で、グリフォンにもひけをとらない。

しかし、ファーチヤを見てもグリフォンは焦る顔一つ見せなかった。

「この程度か！ 俺はそんなんじゃ倒せないぜえ！」

グリフォンが猛る。落ち着け、と自分を宥める夕霧。

「じゃあ、これでどう！」

上空から様子を見ていたフェイが回転しながら落ちてくる。

グリフォンはそのフェイの攻撃を避けもせず、その体で受け止めた。

「ははは！ オレが負けるはずがないんだ、どんな攻撃も受け付けないというレディ・サタンの魔力が込もった鎧を着けているんだからなあ！」

その話を聞き、夕霧の目に絶望の色が浮かぶ。グリフォンの絶対の自信の出所はここだったのか。

「夕霧！ ハツタリだよ！」

リヴィが声をあげた。

そこでハツとする。敵の発言だけで諦めてどうする。ぴるぴるの顔を思い浮かべる。絶対仇を取ってやる！

「ファーチヤ！ パンテーラ！ レオー！ 総攻撃！」

「氷龍、白虎！ 手加減は、いらないよ！」

「みんな、フェイに当たらないようにね！」

六匹もの、総攻撃。

ここまですれば、少しは……！

しかし夕霧の考えは全く当たらなかった。

グリフォンに攻撃していた六匹はすべて吹き飛ばされ、具現化が解かれてしまった。

「うつ……くう……」

「つ……げほ、」

無理やり解かれた具現化は、そのダメージがすべて術者に——つまり、夕霧とリヴィに返ってくる。夕霧に至っては三匹分のダメージをくらい、ともに動くこともできない。

フエイも吹き飛ばされ、今動けるのはトーガのみ。しかし、そのトーガの姿が見えない。

もしかしたら、吹き飛ばされた召喚獣達に巻き込まれたのかもしれない……再び絶望が夕霧を襲う。

今度は活を入れてくれるリヴィも倒れている。ここで自分は死ぬのか、と自嘲する。

びるびるの仇をとれなかった――

その時。

「ぐわああああああっ！」

意識が遠のきかけたとき、突然グリフォンの断末魔の叫びが夕霧の耳に飛び込んできた。

強制的に呼びもとされた意識で、何があつたのかを探る。

体の痛みよりも、驚きが勝った瞬間だった。

グリフォンの上に、トーガが立っている。

「忘れたの？ オレの剣は、レディ・サタンを討った勇者の剣だよ！」

トーガの剣がグリフォンの眉間に深々と刺さり、グリフォンは苦しそうに呻いている。

どんな攻撃も受け付けないのではないのか。

リヴィはハッターだと言っていたけれど、六匹の総攻撃をもってしても無傷だったのだ、本物だと思えない。

なるほど、と夕霧は笑う。

かつてレディ・サタンを貫いたらしい勇者の剣なら、確かに攻撃を受け付けないという効果を無効化できるのも納得できる。

フィナーレだ。トーガがグリフォンに止めを刺し、夕霧は元の世界に帰ることができる。

物語は、閉幕へ向かい始めた。

VSゲリフォン たった3ページのラスボス（後書き）

（大人の事情です）

V S リヴィ 夕霧の決断

目が覚めると、見覚えのある天井が夕霧の視界に広がる。ここは、リオンだ。

そして横を見る。きつといるだろう、という確信を持つて。

「リオンだよ。……また遅いお目覚めだね、夕霧。おそよう」

リヴィは驚かない夕霧を見て、不満げに口を尖らせた

「つまんないの」

そう何回も驚いてたまるか、と言い捨て洗面所に向かう。

ぱたぱた、と見覚えのある小鳥が部屋に入ってきた。

「おはよう太郎」

夕霧があいさつをしてやると、自分に名前をつけたことを忘れたのか首を傾げる小鳥。

『君は仕事をきちんと果たしてくれたから、報酬を与えに来たよ』
もちろん帰るんだろ？ と小鳥は早く準備をするよう促す。

しかし、夕霧は動じずに顔を洗いタオルでごしごしと顔を拭いた。
「その報酬ってさ、どんなことでも叶えてくれるとか、そんな感じ？」

帰るの嫌になっちゃってさー、と言う夕霧。

『え？ 良いの？ 君、弟君のことあんなに心配してたじゃないか。君がいなくなった今も一人ぼっちだよ』

君しか遊んであげる人がいないんじゃないのかい、と尋ねる神。

「うん、だからさ。私の家族をこっちの世界に呼んでくれないかな……ちゃんと選択権は与えてね」

私はここに残るから、とも伝えてほしいと夕霧は言った。

『……まためんどくさいお願い事だね。いいよ、でも君の家族が嫌がったら君は一人ぼっちだよ、いいのかい？』

ん、と夕霧は神を馬鹿にしたような笑い方をする。

「私には仲間がいるからね」

トーガ、リヴィ、フェイ。そして召喚獣達。

せつかく契約したのに、また元の世界に戻って自分の精神に閉じ込めるなんてできないのが夕霧だ。それに、ぴるぴるのこともある。『そう。やっぱり産まれた世界から飛び出していくことはあまりよくないことだね……もう少し厳しく取り締まるのかな』

世界渡りの魔法を人の記憶から消してしまおう、なんていう神。『がんばってー』

神に興味がなくなった夕霧は、洗面所を出る。家族がこの世界に来てくれるかはわからないが、今はそれよりもやることがある。

男耐性がなかった夕霧だが、リヴィはぐいぐいずかずか心に入ってきた。

あれだけストレートに感情をぶつけられては揺らがないわけがない。すべて片付いたら言おうと思っていた。

しかし夕霧は変なところでチキンなのである。

「リヴィー」

自分を待っているであろうリヴィの名を呼ぶ。

「何」

意外に面倒見の良いリヴィは、夕霧がぐしゃぐしゃにしたシーツを直していた。その背中に向かって夕霧は今日の朝ごはんは何、とでも聞くかのように尋ねる。

「私のこと好きか？」

少し背中の方に鳥肌が立つ。こんなセリフを吐こうとは、昔の世界にいたころは思ってもみなかっただろう。恋愛なんて自分には無縁のものだと思っていたし、相手もいなかった。

しかしそれは世界に適合できていなかったただけであり、今は恋愛するのも良いかな、なんて夕霧は思っていた。

「いきなりどうしたんだい？」

リヴィも流石に驚いたらしく、夕霧を見つめていた。その顔が面白くて、夕霧は笑う。

「私、男が苦手なんだ」

「知ってるよ」

人の顔を見て笑うなんて失礼だね、とむくれるリヴィー。

「でも、トーガは平気だ」

「……へえ」

もしかして振られるのかもしれない、と思ったのだろう。リヴィーは今にもトーガを殺しに行かんばかりの顔をした。夕霧はまた笑う。
「まあ最後まで聞けよ」

「うん」

「リヴィーも平気だ」

「当然でしょ」

無理やり馴らしたんだから、と言うリヴィー。

「迷ったんだ」

「うん……？」

脈絡もない言葉に、リヴィーは困惑する。

「元の世界に帰るか」

「ああ」

「帰れなかったよ」

「そうなの？」

夕霧の言い方で、グリフォンごとき倒したくらいでは帰れない、という意味だと取ったのだろう。

「リヴィーを思うとさ」

照れ笑いをする夕霧。リヴィーは理解した瞬間、いつもの不敵な笑みを浮かべた。

「……離れたくなかった？」

「離れたくなかった」

リヴィーの言葉を繰り返す夕霧。さっぱりしたような表情だ。

「そう」

それだけ言うと、リヴィーは部屋を出ようと整えたベッドを降りて窓へ向かった。

「続き聞かないの？」

リヴィは言ったのに、夕霧は言っていない言葉。これを求めているだろうと思っていた夕霧は拍子抜けした声を出した。だいぶ心の準備をしていたというのに。

「楽しみは後に取っておくよ」

ひらり、と部屋から消えるリヴィ。

「そーかよ」

そんな柄じゃないくせに、と夕霧は苦笑いだ。

さて、と夕霧はこれからするべきことを考えた。これからはこの世界で生きて行くのだ。住む所や仕事も考えなければならぬ。

しかし、不思議と不安は無かった。

この世界でなら、どんな手を使っても生きていけるきがしているのだ。

とりあえず夕霧は、この世界での一般常識を学ぼうと図書館へ向かった。

終わり

「わ、レティちゃんひどい怪我だね、転んじやつたかな」

子供たちに囲まれるトーガ。あの冒険から、五年は経った。は……というのも、リヴィと夕霧は、あの冒険のおかげでできた人脈を辿り、困ったモンスターが出るとその退治に出かけ、その先でまた問題が起きて……の繰り返しで、ずっと旅を続けていたのだ。

そして五年ぶりに立ち寄ったりオンの街。トーガはすっかり保育士として独立していて、なんとフェイも同じ職業を志して勉強しているらしい。

「トーガせんせー、あの人達こっち見てるう、怖いよー」

トーガを見るリヴィと夕霧に気がついた子供がトーガを呼ぶ。ニヤニヤと彼を待つ二人。どんな反応をするだろうか。

「ママ、あのお兄ちゃんがトーガ？」

三歳程の子供を抱く夕霧。まぎれもなくリヴィの子供だ。名前はトコロス、愛称トコだ。

あれから本当に男女交際をした二人は、普通の恋愛というものがわかっていなかったため旅をしながら自分達なりに愛を育んだ。夫婦喧嘩で街を潰してしまう危機に陥ったりと大変なこともあったが、意外と二人とも子供の世話が好きなようだ。

「そうだよ、トコの先生にびったりだと思ってね」

不審者を退治せんと駆け寄ってくるトーガ。しかしすぐにリヴィと夕霧、そしてその息子トコロスに気が付いたようだ。

「リヴィ！ 夕霧！ まったく、久しぶりってレベルじゃないよ？ なんか子供できてるし！」

もう、少しくらい連絡くれたっていいじゃん、と怒るトーガ。

「トーガにトコをお願いしようかと思ってるね」

リヴィがトーガに言う。トーガの表情が、怒りも忘れてぱあっと輝いた。

「いいの？ オレ、昔からリヴィの子供を生徒にするの夢だったんだ！ お母さんも夕霧だし、気合入れて預かるよ！」

任せて、とトーガ。

「頼んだ。で、私の家族はどこ行っただ？」

両親と薫とも五年程会っていない夕霧。彼女の家族は即決でこちらの世界へ戻ってきたのだ。薫もののびのびと過ごしこちらの世界で楽しく暮らしているらしい。

「夕霧達が出発してからヴィペールに行っただよ。ソラニテが夕霧のお母さんを離れたがなくてさ」

トコはトーガの周りに寄ってきた子供たちと遊び始めている。

「あれ？ トコをここに預けるってことは、ここに住むの？」

トーガはすごく嬉しそうだ。

「うん、よろしく」

夕霧も嬉しそうに答え、これからまた楽しい生活が始まるであろうことが暗示されている。

「ああ、でもモンスター退治はやめないよ」

ばさ、とジャージをはおる夕霧。

もうボロボロで、いい加減捨てなければならぬのだが愛着があるジャージ。

「それ着てた方が夕霧らしいや」

くす、と笑うトーガ。

昔に戻ったかのような感覚。ジャージ一つで、あの時の記憶がありありと思い出される。

当時はどん引きで受け入れられなかった職名だったが、今では自信を持って言える。

「ジャージのヒーローだからね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941z/>

ジャージのヒーロー

2011年12月14日01時51分発行